

**「教育DXを支える基盤的ツールの整備・活用事業」
（教育データ利活用の加速化事業）**
成果報告書

2026年3月31日

目次

1. 今年度事業の概要	p.3
1-1. 今年度事業の背景・目的、取組内容	p.4
1-2. 各取組内容の概要	p.5
2. 教育データ利活用に向けたシステム利用状況調査	p.12
2-1. 調査概要	p.13
2-2. アンケート調査結果（抜粋）	p.14
2-3. 個別事例ヒアリング結果	p.18
3. 教育データ利活用に向けた地方自治体コミュニティの運営	p.29
3-1. コミュニティ実施実績	p.30
4. 教育データ利活用実証研究	p.31
4-1. 実証研究_役割分担・取り組み概要	p.32
4-2. 長浜市_実証研究報告	p.35
4-3. 鹿児島市_実証研究報告	p.48
4-4. 山形県_実証研究報告	p.63
4-5. 効果検証報告	p.74
5. 教育データ利活用のステップ（β版）	p.112
5-1. 作成・更新の背景、更新方針	p.113
5-2. 更新版骨子	p.114
6. まとめ	p.117
6-1. 今年度の取組から得られた示唆	p.118

Appendix

実証研究における主な開発アプリ・ダッシュボード画面

1. 今年度事業の概要

1-1. 今年度事業の背景・目的、取組内容

背景	■ 1人1台端末の整備と多様な学習ツール等導入、教育データ標準化、相互運用標準モデル整備、次世代校務DX推進など、教育データ活用の環境整備が進みつつある一方、現状では各種教育データを連携して表示・分析・利活用できる環境を実現している自治体は限定的 ■ 教育データの更なる利活用の取組を全国的に推進するため、教育データを利活用していくまでのステップについて解説した「今からはじめる！NEXT GIGA 教育データ利活用のステップ（β版）」（以下、「ステップ（β版）」）を令和6年度に公表 ■ ステップ（β版）は今後の実践や議論を踏まえてブラッシュアップを重ね、現場に即したガイドブックとしていくこととしている
目的	■ 公募により指定した自治体において、教育データ利活用の目的設定から環境の構築、データの収集、分析、分析結果の活用までの一連のプロセスの実証を行う ■ 実証等から得られたノウハウをまとめて「ステップ（β版）」に反映し、教育データの利活用を推進する
取組内容	① 自治体が教育データ利活用のために活用しているツールや整備している既存システムに関する調査研究（以下、「システム利用状況調査」） ② 教育データ利活用に関心のある地方自治体が集まる情報交換会（コミュニティ）の開催 ③ 実証研究の伴走支援・効果検証 ④ 「教育データ利活用のステップ（β版）」（以下、「ステップ（β版）」）の更新 ⑤ 有識者会議の開催

1-2. ①システム利用状況調査

アンケート

ヒアリング

目的	- これから教育データの利活用を実施していく自治体等の参考になるような情報を収集し、展開すること ※第5回コミュニティにて結果を共有	
対象	- 対象：全自治体 - 回答自治体数：1,798教育委員会中1,530（85.1%）	10自治体 ※教育データ利活用の目的や方法が幅広くなるよう選定
期間	2025年8月22日（金）～2025年9月30日（火）	2026年10月～12月
実施方法	- 文部科学省WEB調査システムEduSurvey - 自治体から提出のあったExcel・PDFファイル	オンライン会議
調査項目	- 教育データ利活用の状況（パターン1～3） - 教育データ利活用の目的 - 使用しているツールやシステム、データ項目 - 教育データ利活用を行っておらず、検討もしていない場合、その理由 等	- 教育データ利活用の目的・その背景課題 - 取組内容の詳細（使用ツールやシステム、データ項目） - 教育データ利活用方針を決めるプロセス - 教育データ利活用による効果 - 学校現場での主体的な利活用を促すための工夫 - 効果検証の有無・内容 - 構築・運用における課題

1-2. ②教育データ利活用に関心のある地方自治体が集まる情報交換会（コミュニティ）の開催

実施概要

開催趣旨	■ 教育データ利活用の最近の動向や課題等について意見交換等を行う ■ 教育データの利活用によって得られる効果やプロセスなど、教育データ利活用における基礎的な理解を深めていただく ■ 地方自治体の事例紹介等を通じて知見を共有する
参加対象	■ 教育データの利活用に関心のある全ての都道府県・市（指定都市を含む。）区町村教育委員会の事務担当者 ※事前に参加意向に係るアンケートを実施の上、希望者/自治体へ開催日程等の案内を展開
開催形態	■ オンライン（Zoom） ■ 各回1~2時間
その他補足	■ 令和7年度は計5回実施（各回アジェンダは右記参照） ■ 開催後のアンケートにて参加者の満足度や教育データ利活用に関する情報提供のニーズ等について把握

各回アジェンダ

第1回 10月17日	■ 教育データ利活用に関する取組等に係る情報共有 ■ 令和7年度全国学力・学習状況調査に係る情報共有
第2回 11月28日	■ 自治体事例紹介 - 教育データ利活用 取組み共有 ■ 交流パート - グループに分かれて個別質疑・交流
第3回 12月24日	■ 自治体事例紹介 - 教育データ利活用 取組み共有 ■ 交流パート - グループに分かれて個別質疑・交流
第4回 1月28日	■ 国立教育政策研究所 教育データサイエンスセンター講演
第5回 2月27日	■ 今年度事業における取組の報告 - 教育データ利活用 実証研究の取組状況 - その他調査研究結果、成果物概要

1-2. ③実証研究の伴走支援・効果検証_取組概要

実証主体	前提情報	今年度の主な取組（開発）内容
長浜市 ・ 内田洋行 パターン2*	- 令和6年度実証に参加 - 前年度は学習eポータルを中心に、「AIドリル」、「校務支援システム」等のデータを連携し、ダッシュボードで可視化するシステムを構築、市内小中学校へ展開済	前年度構築システムの使いやすさ・可視化データの付加価値の向上 - 健康観察データの入力動線の改善（教室内でデータ入力可能とするUIの導入） - 学習eポータルで収集したデータに基づく、心の不調や生活リズムの乱れに係る支援を要する子どものアテンション表示 - データの視認性、見やすさの改善
鹿児島市 ・ NTTドコモビジネス パターン2*	- 学習系（まなびポケット、navima等）および校務系（スズキ教育シリーズ）のシステム、学習eポータル「まなびポケット」を市内全小中学校に導入済 - 令和6年度より「まなびポケット」に付随する教育ダッシュボード機能を運用中	学習eポータルの統合ダッシュボード化による、教育データ利活用環境の整備 - 学習系・校務系システムからのデータ連携 - 校務支援システムのクラウド（evanix）移行・統合ダッシュボードへのデータ連携（重点実証校2校のみ） - AAR振り返り機能、AIレポート機能の導入
山形県 ・ Ddrive パターン3*	「第7次山形県教育振興計画」（令和7年3月）において、学びの改革や校務改善につながるICT活用の充実を図ることが示されており、教員に関するデータについて効果的な活用を図る必要がある - システムについては、令和7年度から新規に開発	BIツールを用いたデータの可視化や分析（ダッシュボードの創出） 教職員の勤務実態および勤務時間を正確に把握するための「勤務時間データ収集アプリ」および「業務実態を把握するためのダッシュボード」開発

*令和6年8月に公表されたステップ（β版）において、データ利活用の在り方を3つのパターンに整理しており、今年度はパターン2または3に関する実証研究を複数実施することとした。

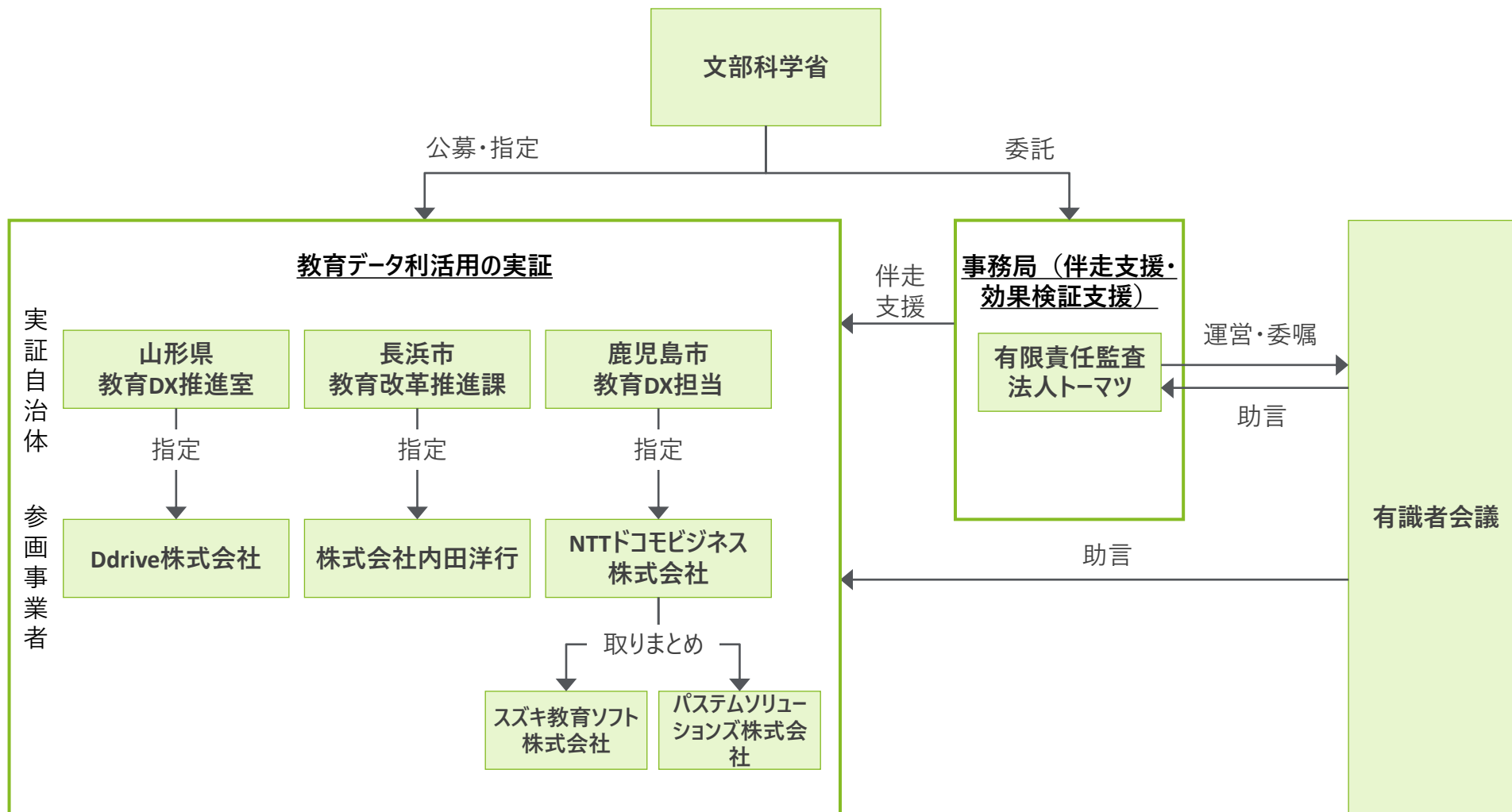
パターン1：OSメーカーが標準的に提供する教科横断的に活用できるソフトウェアや学習ツール、学習eポータル、校務支援システムなどのツールや各ツールに付属するダッシュボードなどを単独で利用してデータ利活用する方法。

パターン2：複数のツール・システムと連携が可能となっている、データ利活用のためのデータ連携機能付システム（仮称）を利用して、データ利活用する方法。

パターン3：システムを構築して複数のツール・システムのデータを集約し、独自のダッシュボードなどで可視化して、データを利活用する方法。

1-2. ③実証研究の伴走支援・効果検証_実施体制

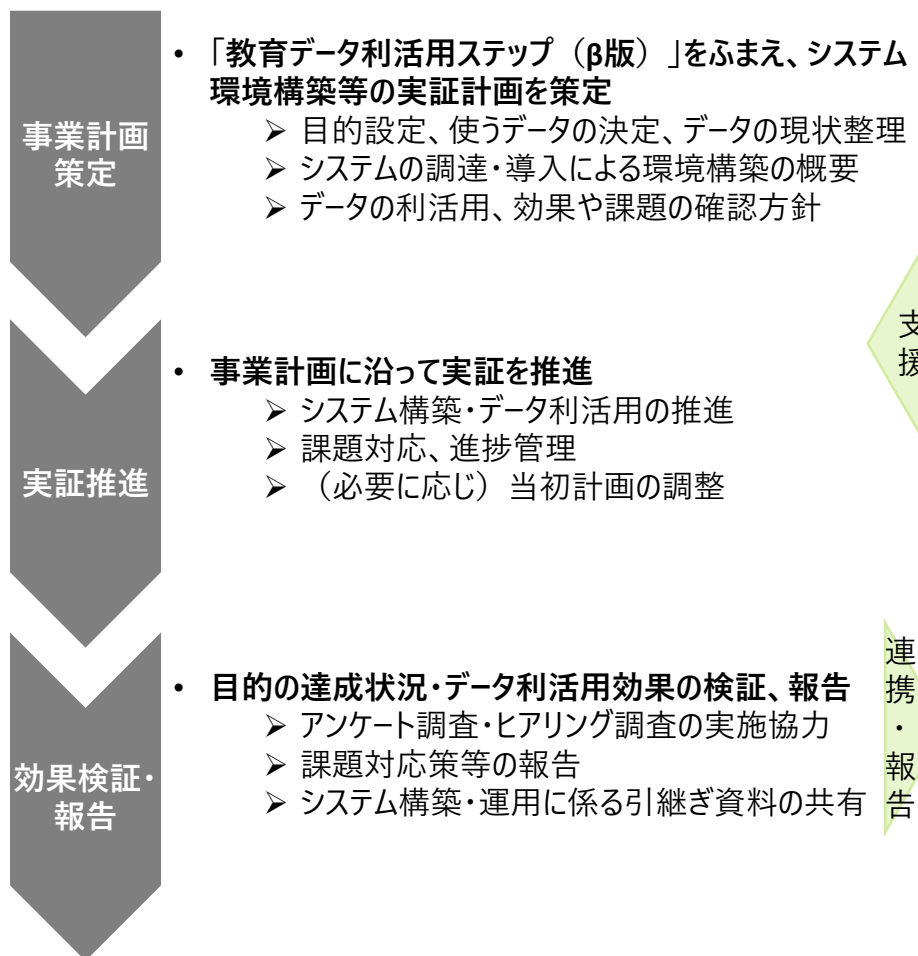
各自治体が実証主体となり、それぞれに参画事業者と連携して推進し、事務局（弊社）が有識者会議からの助言を得て伴走支援を行う体制にて実施しました



1-2. ③実証研究の伴走支援・効果検証_役割分担

実証自治体では「ステップ（β版）」をふまえた教育データ利活用の環境構築・導入等を進め、弊社からは定期的な打合せ等による伴走支援と効果検証支援に取り組みました

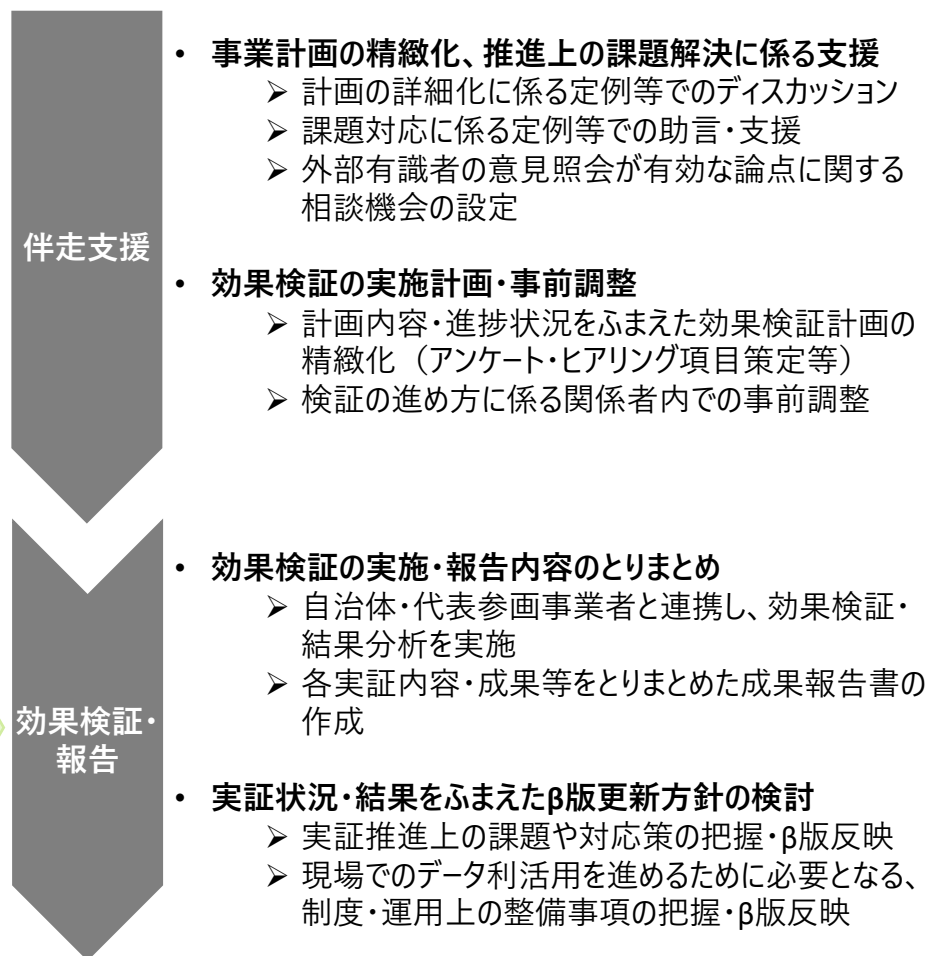
教育データ利活用の実証（実証自治体・参画事業者 主導）



支援

連携・報告

教育データ利活用の推進に向けた研究開発（事務局（トーマツ） 主導）



1-2. ④ステップ（β版）の更新

ステップ（β版）の更新に際しては、実証研究や先進的に取り組む自治体へのヒアリング等も踏まえ、教育データ利活用に関する一連のプロセスの手順書となるよう内容の充実を図りました

今年度の更新のねらい

- ① 教育データ利活用に関する一連のプロセスが分かる手順書となるように、内容の充実を図る
- ② 初めて教育データ利活用に取り組む担当者が、進め方のイメージを具体化するために必要な情報を体系的に示す
- ③ 既に教育データの利活用を進めている自治体による、継続的な取り組み・より効果的な取り組みにも寄与する内容・構成とする

目次		主な記載事項
I. はじめに		・ ガイドブックの目的、位置づけ
II. データ利活用の重要性		・ 教育データ利活用の意義、必要性、重要性
III. データ利活用の類型		・ 利活用の目的や方法、実装手法のパターンについて、基本的整理として提示
IV. データ利活用のステップ	0. ステップに関する全体像	・ 1.~6.の概要
	1. データ利活用の目的を定める	・ 上位施策との紐づけや現場メリットへの落とし込みなどの整理観点 ・ 学校へのヒアリングを通じたブラッシュアップなど具体的な事例
	2. データ利活用の方法を定める	・ それぞれのデータ利活用方法の特性、組合せの考え方
	3. 利活用するデータを定める	・ ①必要なデータ項目の整理②対象データの現状整理③データ収集・加工④活用イメージ作成の各段階における検討・実施事項
	4. データ利活用のシステムを定める	・ システムの実装状況に不足がある場合、データ活用開始までに必要な手順 ・ 実務上の考え方・工夫例
	5. データを活用する	・ 効果的にデータ活用に取り組むための体制構築や、学校現場で活用を促していくための施策・留意事項 ・ 学校での活用を促す施策の事例や、実際の活用事例
6. 効果や課題を確認し、ネクストアクションを検討する		・ 効果検証の基本的な流れ ・ ネクストアクションにつなげるための効果検証項目の考え方 ・ 分析時の留意点
V. データ利活用の際の留意点		・ 個人情報の取り扱い等の共通的な留意点
VI. 用語集		・ 専門用語等のリスト・簡単な補足
別添資料		・ 教育データ利活用のユースケース集（「効果的な教育データ利活用に関する調査研究事業」にて作成） ・ データ項目一覧（「効果的な教育データ利活用に関する調査研究事業」にて作成） ・ 教育データ利活用に向けたシステム利用状況調査（個別事例ヒアリング結果）

1-2. ⑤有識者会議の開催_実施概要

会議の位置づけ

■ 事業全体に対するアドバイザー組織として助言をいただく

■ ステップ（β版）の更新方針に係る議論・助言提供を中心に、実証事業をβ版更新に活かすための伴走支援の進め方や、効果検証観点についても助言をいただく

実施概要

目的

・ ステップ（β版）の更新観点・方針に係る助言獲得

・ 実証研究の効果検証に向けた検証観点・指標設計や分析方針に係る助言獲得

実施形態

・ オフライン/オンラインのハイブリッド開催

・ 約2時間/回

各回アジェンダ

第1回
10月15日

■ 事業全体の取り組み内容共有

■ 実証自治体での実証計画共有

■ ステップ（β版）更新方針に関する議論

■ 実証効果検証観点に関する議論

第2回
12月15日

■ 実証状況の報告

■ 効果検証観点・指標案の共有、議論

■ ステップ（β版）更新案（骨子）の共有・議論

第3回
3月3日

■ 実証結果報告

■ ステップ（β版）更新案の共有・議論

有識者委員一覧

※ 敬称略、50音順

氏名

所属・役職

高木 純

渋谷区役所 ICTセンター インフラチーム主任

◎主査 高橋 邦夫

合同会社KUコンサルティング 代表社員

能島 裕介

尼崎市 こども政策監

原 秀樹

CocreCoコンサルティング合同会社 代表

2.教育データ利活用に向けたシステム利用状況調査

2-1. 調査概要（再掲）

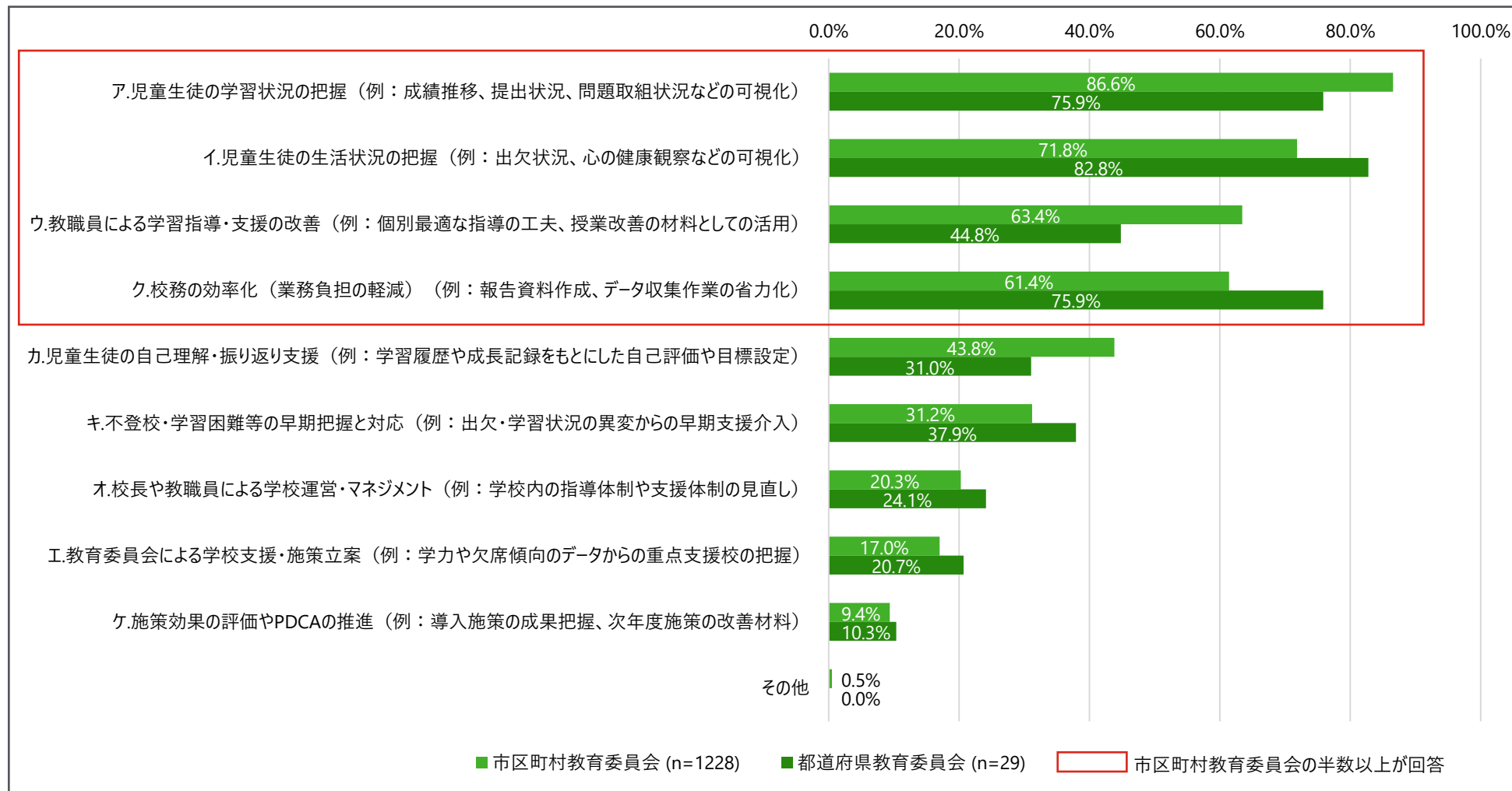
全国の自治体における教育データ利活用の概況をアンケートで把握の上、ヒアリングにて 特に先進的に取り組んでいる（又は効果的な活用を目指し実証を行っている）事例の深掘りを行いました

	アンケート	ヒアリング
目的	- これから教育データの利活用を実施していく自治体等の参考になるような情報を収集し、展開すること ※第5回コミュニティにて結果を共有	
対象	- 対象：全自治体 - 回答自治体数：1,798教育委員会中1,530（85.1%）	10自治体 ※教育データ利活用の目的や方法が幅広くなるよう選定
期間	2025年8月22日（金）～2025年9月30日（火）	2026年10月～12月
実施方法	- 文部科学省WEB調査システムEduSurvey - 自治体から提出のあったExcel・PDFファイル	オンライン会議
調査項目	- 教育データ利活用の状況（パターン1～3） - 教育データ利活用の目的 - 使用しているツールやシステム、データ項目 - 教育データ利活用を行っておらず、検討もしていない場合、その理由 等	- 教育データ利活用の目的・その背景課題 - 取組内容の詳細（使用ツールやシステム、データ項目） - 教育データ利活用方針を決めるプロセス - 教育データ利活用による効果 - 学校現場での主体的な利活用を促すための工夫 - 効果検証の有無・内容 - 構築・運用における課題

2-2. アンケート調査結果（抜粋）

【設問10】設問5で選択肢ア.～ウ.を選択された方に伺います。これらのツール/システムについて、どのような目的で活用していますか。（複数回答可）

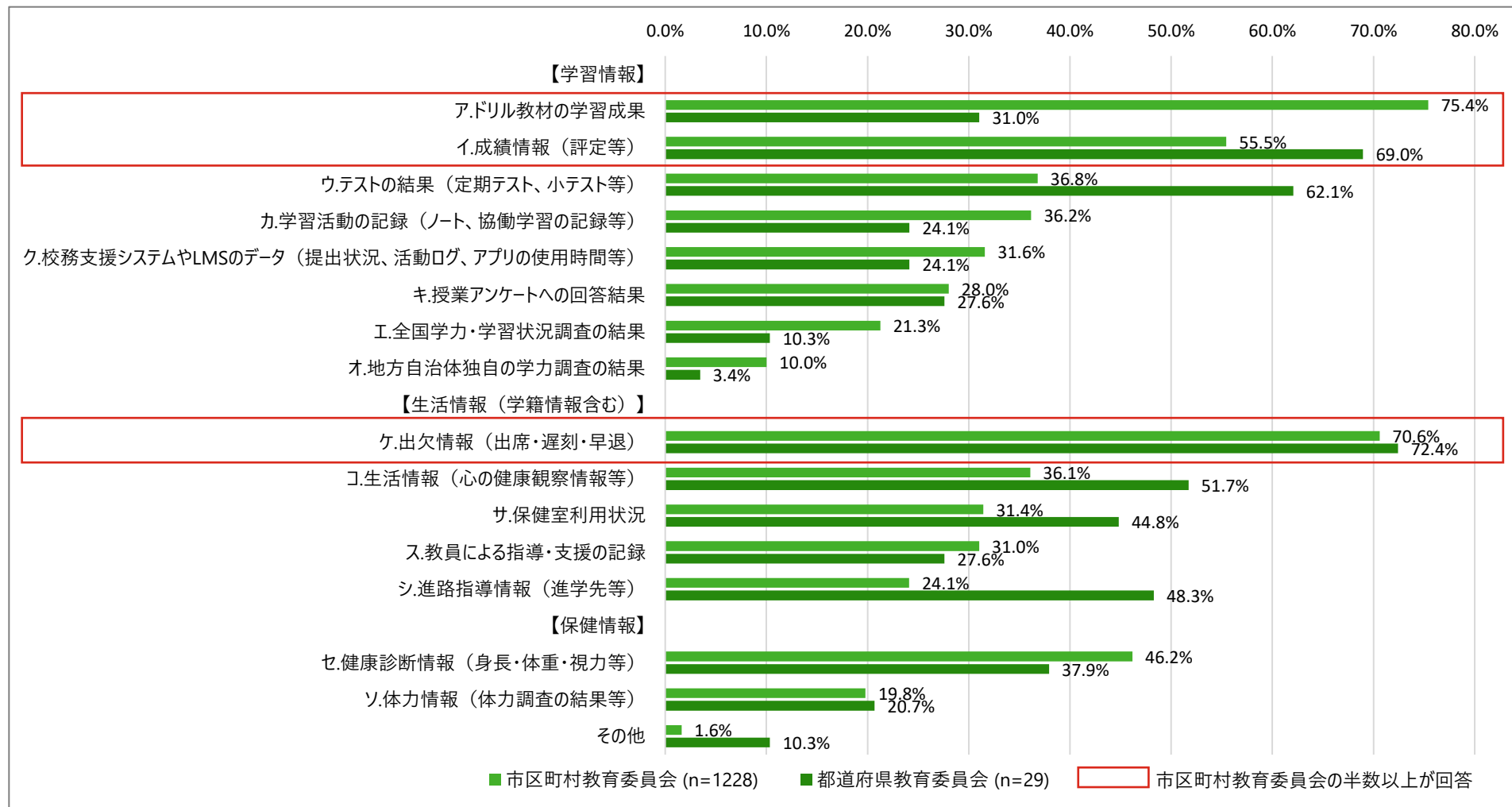
ツール/システムの活用目的については、児童生徒の状況把握・指導・支援や校務効率化が多く挙がっており、学校運営や教育委員会による施策評価等での活用は限定的でした



2-2. アンケート調査結果（抜粋）

【設問12】設問5で選択肢ア.～ウ.を選択された方に伺います。貴自治体で利用しているツール/システムにおける可視化機能において、以下のデータは表示されていますか（又は、表示することを検討していますか）。（複数回答可）

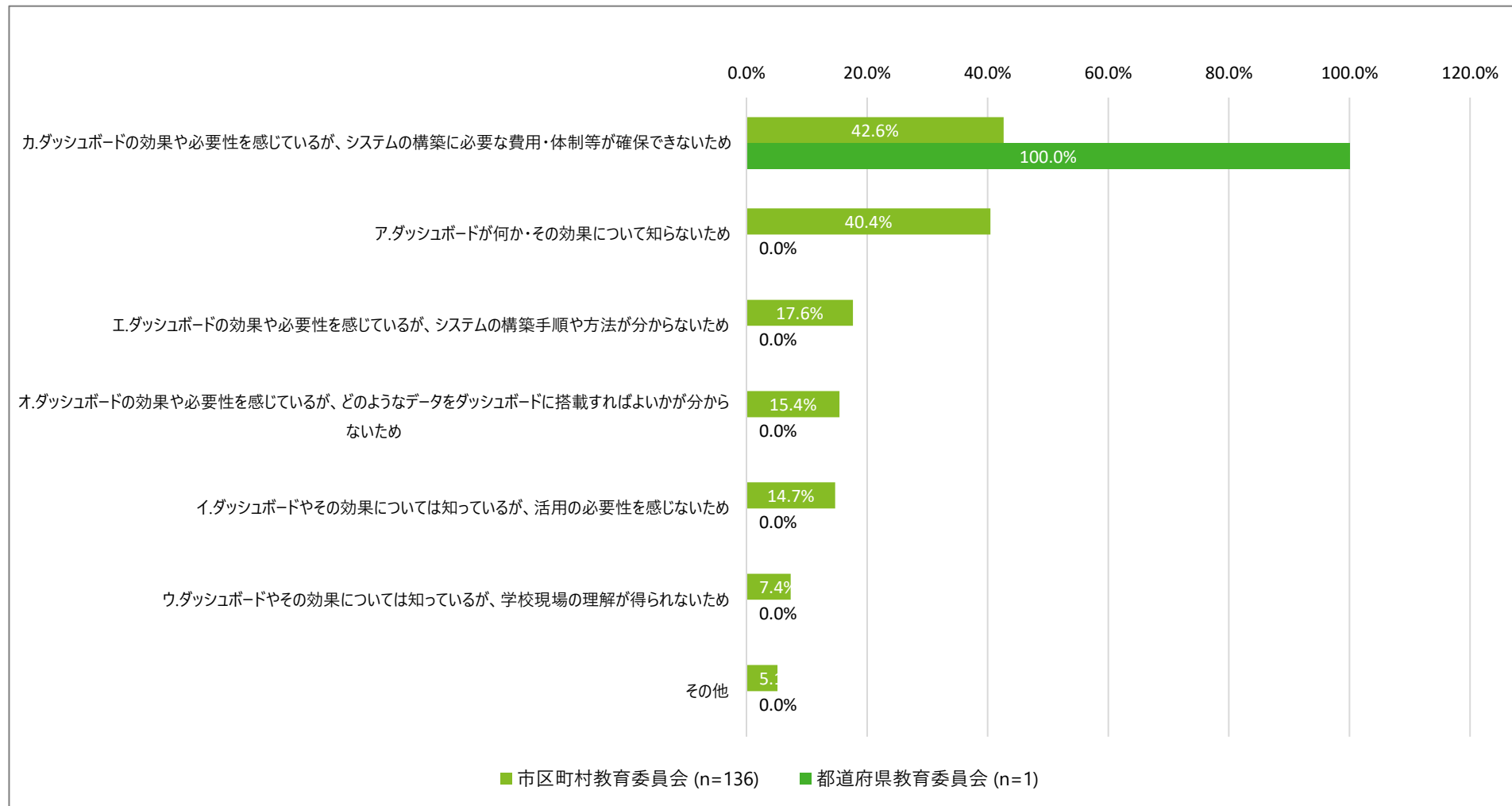
活用しているデータの種別については、ドリル教材の学習成果や成績情報等の学習情報、また生活情報の中では出欠情報を挙げる自治体が多く見られました



2-2. アンケート調査結果（抜粋）

【設問21】設問19において、選択肢イを選択された方に伺います。貴自治体でダッシュボードの活用を検討しない理由は何ですか。（複数回答可）

データ利活用に取り組んでおらず検討もしていない場合に比較的多く挙げた理由として、費用・体制等の確保ができない、ダッシュボードが何か・その効果を知らない等が見られました



2-2. アンケート調査結果（抜粋）

【設問22】設問5において、選択肢Ⅰを選択された方に伺います。どのような条件が整えば、データ利活用に取り組めると考えますか。データ活用に取り組めない現状の要因と、改善が必要な点についてご記載ください。

（自由記述）

データ利活用に取り組んでいない場合、効果や成果が不明なことや、現場の理解が得られない等の課題があり、活用方法等の周知をはじめとしたサポート要望が寄せられています

取組めない要因

大分類※1	中分類※2
ダッシュボードが何か・その効果について知らないため または自治体内で説明できない・知られていないため	費用対効果 / 定量的な効果が不明である・説明できない
	具体例の提示 / イメージが難しい
	教育現場の理解が得られない
ダッシュボードの効果や必要性を感じているが、システムの構築に必要な費用・体制等が確保できないため	データ利活用のノウハウが不足している
	既存の業務負担が大きい / 人的余裕がない
その他	自治体としての方針が不明である
	小規模校におけるデータ利活用に懸念がある
	関連自治体との統一を踏まえた検討が必要である
	優先事項が他にある
	学校の統廃合を予定している

※1 データの活用状況に関して「いずれも利用していない」と回答し、ツールやシステムの活用方針についても「活用の検討はしていない」と回答した自治体の「ツール／システムの可視化機能の活用を検討しない理由」として挙げられた項目を分類

※2 「ツール／システムの可視化機能の活用を検討しない理由」に挙げられた自由記述を分類

2-3. 個別事例ヒアリング結果一覧

教育データの利活用にこれから取り組んでいく自治体等の参考としていただくことを目的に、既に取り組に着手されている自治体へのヒアリング等を通じ、取組概要や活用しているシステム・ツール、具体的な活用方法の事例を取り纏めました

1. 栃木県矢板市『体力テスト結果の迅速な見える化による授業改善』(パターン1)
2. 宮城県『「みやぎ学力状況調査」を踏まえた各校の教育活動の改善』(パターン1)
3. 岐阜県岐阜市『朝夕の健康観察による子どもが安心できる居場所づくり』(パターン1)
4. 鹿児島県長島町『単元の見通し・振り返りによる授業改善・自律的な学びの実現』(パターン1)
5. 千葉県『施策前後の学力比較による教育施策の効果検証』(パターン1)
6. 滋賀県長浜市『心の調子や学習状況を踏まえた個別支援』(パターン2)
7. 鹿児島県鹿児島市『学習・生活状況の見える化による、授業改善や個別支援の実施』(パターン2)
8. 山梨県甲府市『健康観察×端末ログで、生活習慣の改善』(パターン3)
9. 東京都『在校等時間の見える化による働き方改革の推進』(パターン3)
10. 福島県いわき市『多角的なデータを活用した学級づくり・授業改善』(パターン3)

※パターン1~3の定義については、p.7下部注記参照

矢板市『体力テスト結果の迅速な見える化による授業改善』(パターン1)

概要

矢板市では、児童生徒の体力低下に課題意識があり、**児童生徒の体力向上**を目的にデータを活用している。

モデル校3校（小2校、中1校）で、体力テスト結果をアプリに入力し迅速に可視化することで、**授業や業間の体力づくりの改善**に活かしている。

具体的な活用方法

データ入力

データ項目

- 基本情報
- 健康情報 (身長/体重)
- 体力テスト結果

児童生徒



集計・分析



図1：体力テストの個人結果/分析閲覧ページ



図2：過去の体力テスト結果閲覧ページ

クラス平均や全国平均との比較も可能。

組	平均	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横跳び	20mシャトルラン	50m走	立ち幅跳び	ボール投げ
平均	8.86	14.93	27.93	25.07	15.86	11.72	87.93	6.21	
Tスコア	51.69	56.75	49.17	46.28	50.4	50.49	37.83	52.99	
全国	8.52	11.77	28.49	26.88	15.6	11.77	108.42	5.63	

全国平均を下回った種目：長座体前屈、反復横跳び、立ち幅跳び

活用システム/ツール

■ ALPHA：体力テストの計測・集計・分析をデジタル化するシステム。体力づくりのための動画も閲覧可能。

児童生徒

目標設定



アドバイス動画視聴



体の動かし方の改善



児童生徒が伸ばすべきポイントを理解することで、意欲をもった活動に繋がる

教員

課題等の把握



授業改善の検討



教職員は体育の授業や体力づくり活動を改善できる

教員

教委へのデータ提出

教委

教員研修等への反映



教職員の業務効率化に繋がる



教職員の指導力向上が図られる

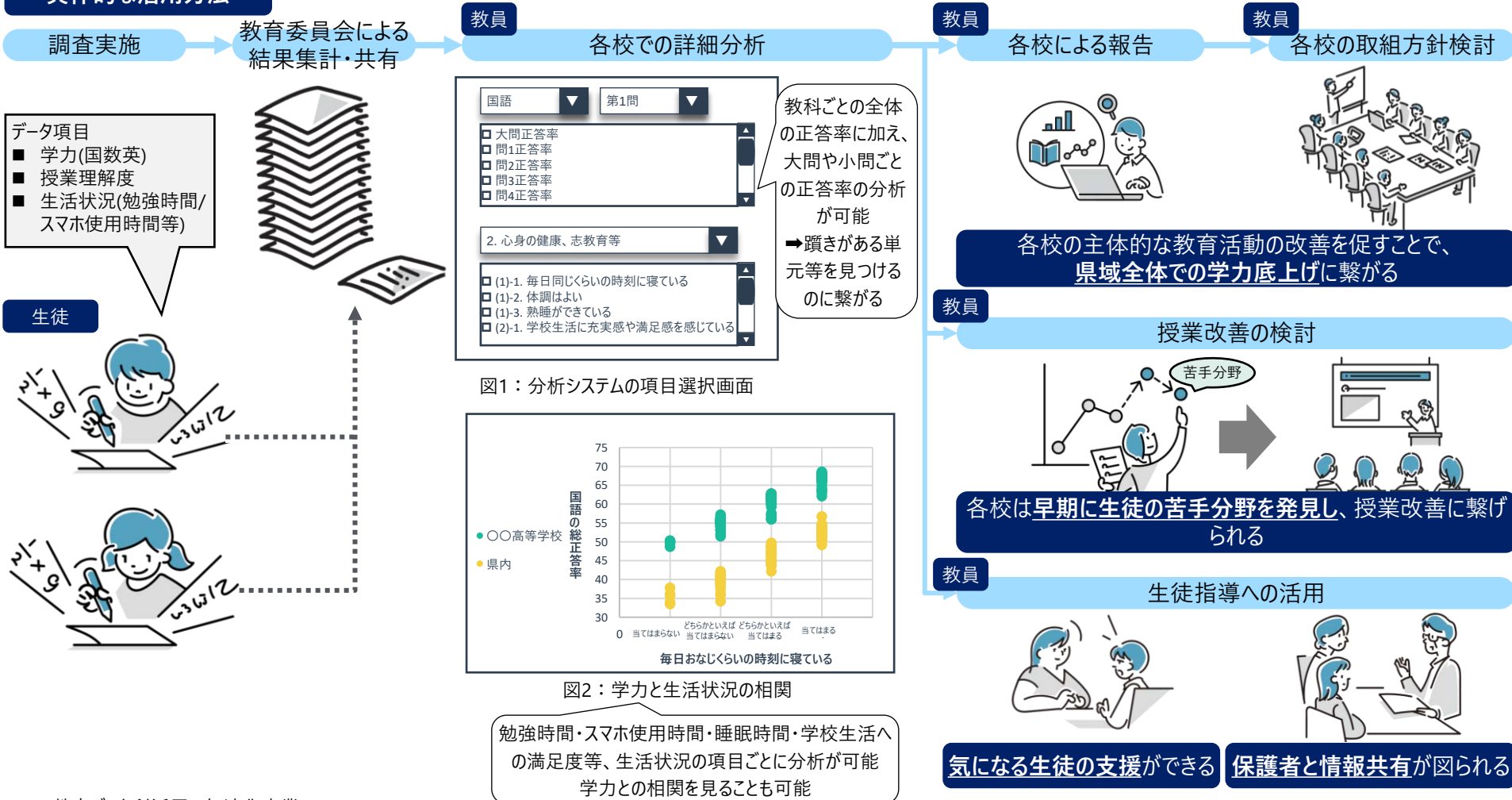
宮城県『「みやぎ学力状況調査」を踏まえた各校の教育活動の改善』(パターン1)

概要

宮城県は、**県立高校の学力向上**を目的に、県独自の学力状況調査を実施し、県立高校全体で、データを活用している。

調査で得られた結果を県立高校に共有するとともに、**各校での詳細な分析ができる環境を整えることで各校における教育活動改善のサイクルを回す**ことを促している。

具体的な活用方法



岐阜市『朝夕の健康観察による児童生徒が安心できる支援体制づくり』(パターン1)

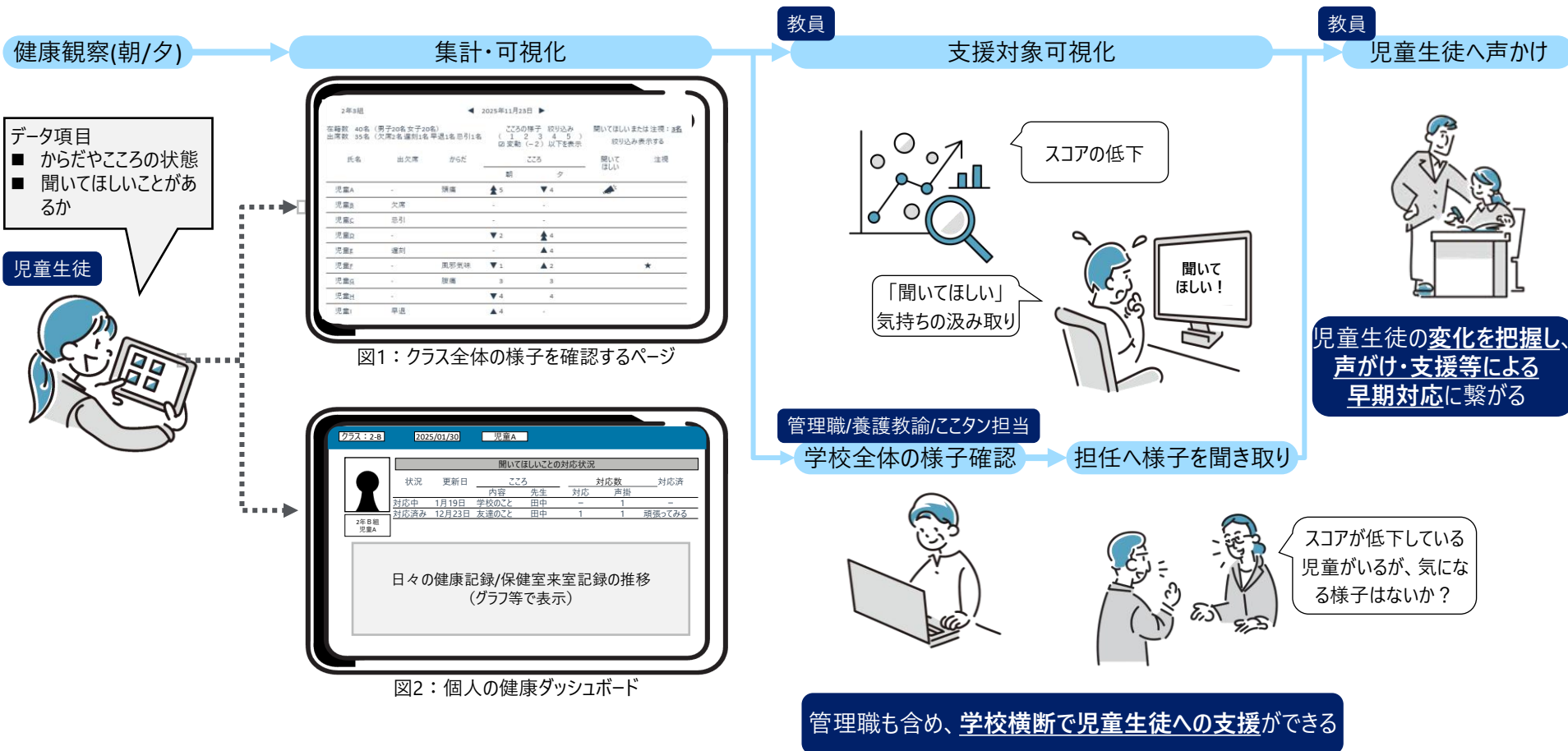
概要

岐阜市は、**児童生徒が安心できる支援体制づくり**を目的に、全小中学校・義務教育学校で児童生徒の「からだ」と「こころ」の健康データを活用している。
1日に2回（朝・夕）行う健康観察の結果を基に、**気になる変化が確認できた児童生徒への迅速な声かけ**につなげている。

具体的な活用方法

活用システム/ツール

- **ここタン**：児童生徒が相談したい内容と相談したい教員を選んで、気軽にSOSを発信できるシステム



長島町『単元の見通し・振り返りによる授業改善・自律的な学びの実現』(パターン1)

概要

長島町では、町内研究校を中心に、単元の目標を踏まえた振り返りを毎時間行い、**単元を通して、児童生徒がどのように変容したか**を見て分かるようにしている。**教員の授業改善**と共に、**児童生徒の自律的な学び**に繋げている。

活用システム/ツール

■ ロイロノート：タブレット上で使えるデジタルノート。児童生徒の思考を表現し、アウトプットを教員・児童生徒間で共有したりできる。

具体的な活用方法

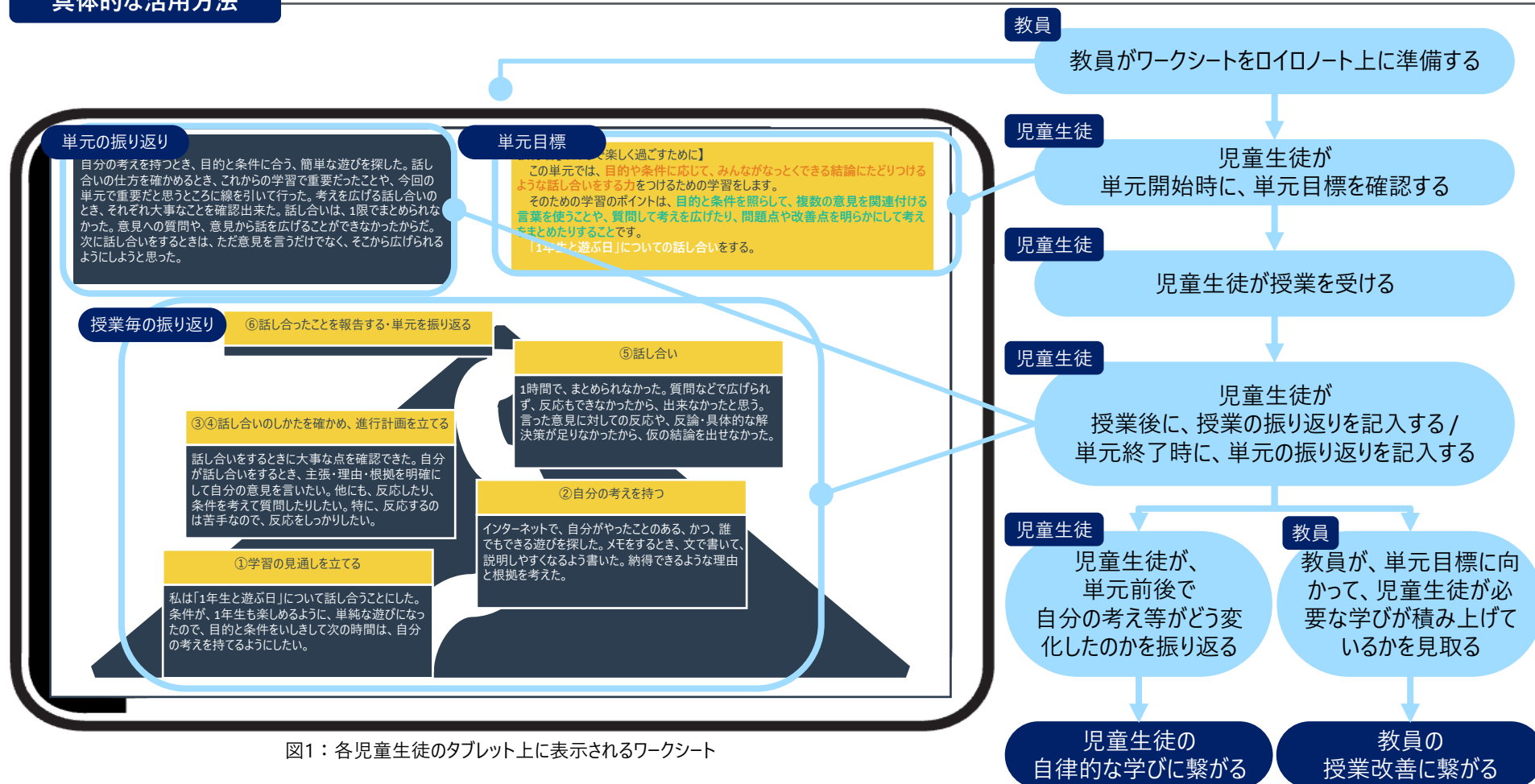


図1：各児童生徒のタブレット上に表示されるワークシート

千葉県『施策前後の学力比較による教育施策の効果検証』(パターン1)

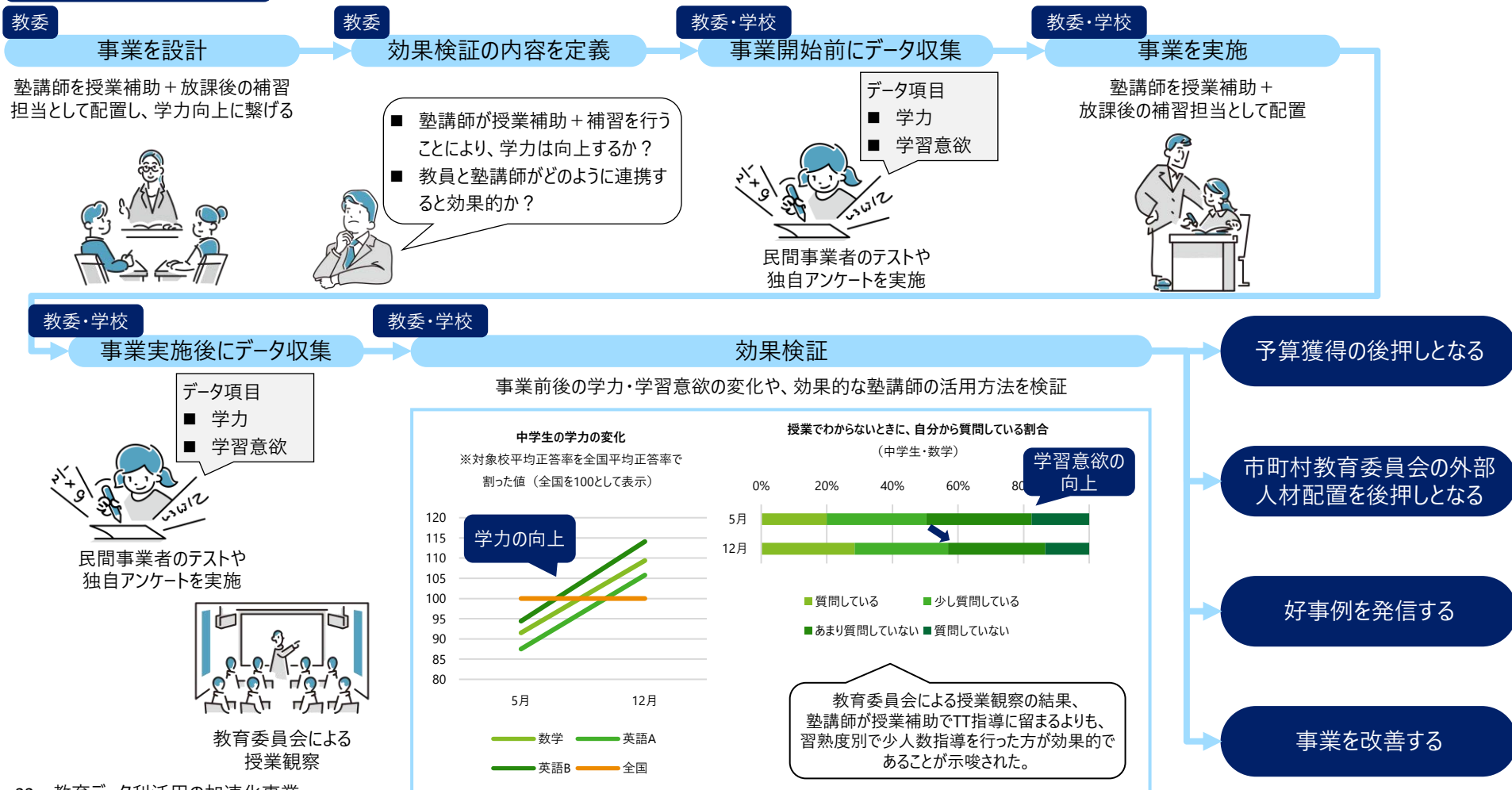
概要

千葉県では、塾講師を学習支援員として配置する事業の効果検証を丁寧に行うことで、学力や学習意欲向上を明確に示し、**予算獲得**や、市町村教育委員会に対して**学習支援に係る外部人材活用を後押しするための根拠**としている。

活用システム/ツール

■ 学力テスト・アンケート・授業観察を組み合わせ、効果検証を実施

具体的な活用方法



長浜市『心の調子や学習状況を踏まえた個別支援』(パターン2)

概要

長浜市では、全小中学校で、児童生徒の心の調子等の毎日のアンケート、AIドリルでの学習状況や、出欠状況のデータをL-Gate（学習eポータル）で一元的に見える化し、それぞれの児童生徒の状況を教職員全体で共有し、心の落ち込み等が見られる児童生徒へ早めの個別支援や、家庭学習の改善に繋げている。

活用システム/ツール

- L-Gate：MEXCBT等へ接続するための入り口となる学習eポータル
- Qubena：AIデジタルドリル
- MEXCBT：オンライン上で学習やアセスメントができるプラットフォーム
- 教務手帳：教員が出欠等を登録するシステム

具体的な活用方法

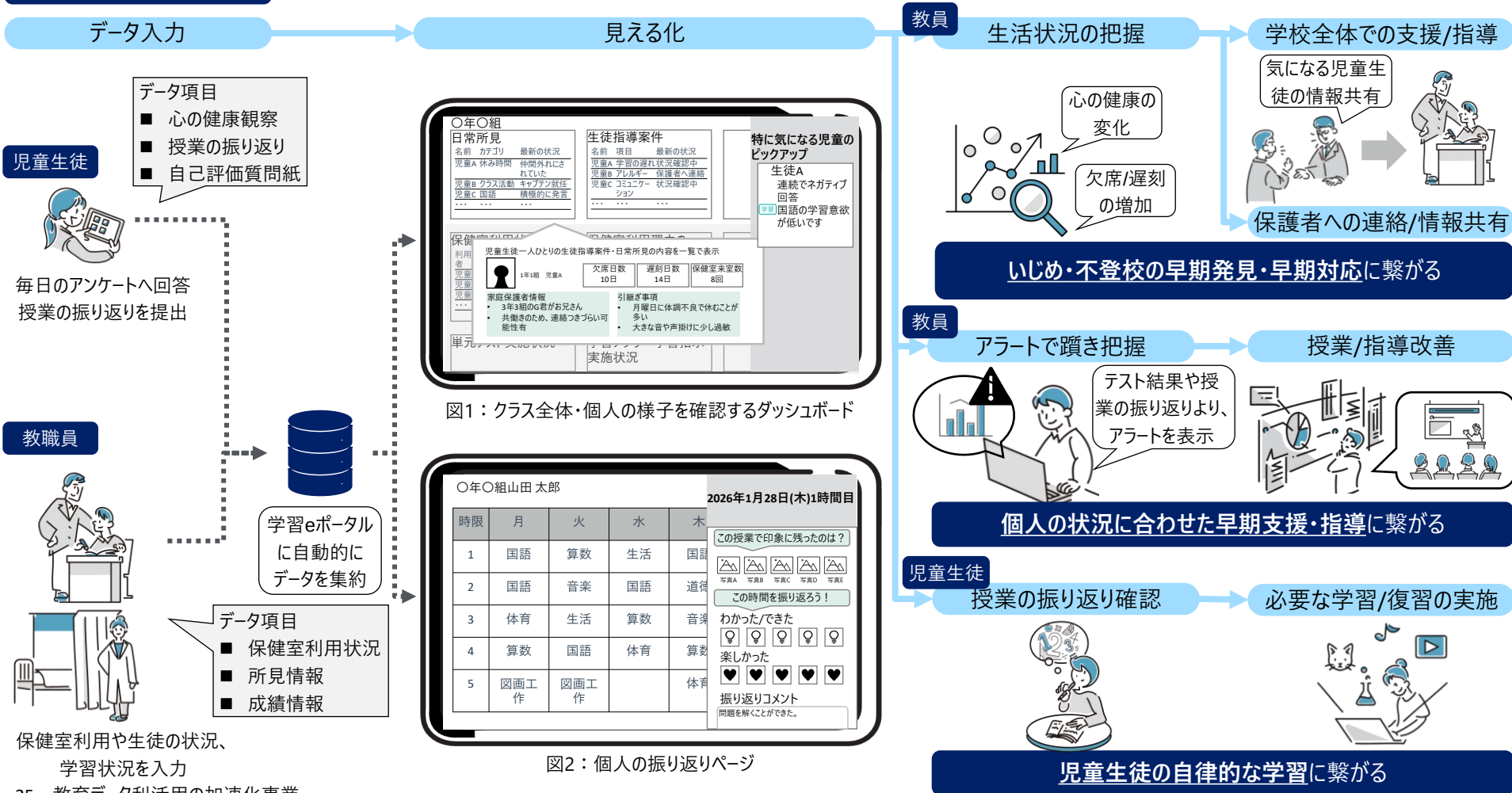


鹿児島市『学習・生活状況の見える化による、授業改善や個別支援の実施(パターン2)』

概要

鹿児島市では、モデル校2校で、価値のある教育データ活用ユースケース/ノウハウの創出を目的に、学習や生活・健康、指導・支援に関するデータを一元管理し、「**学習状況の変化**」や「**生活状況の変化**」に着目し、気になる生徒をピックアップすることで**授業改善**や**個別支援**に繋がっている。

具体的な活用方法



甲府市『心の健康観察×端末ログで、生活習慣の改善』(パターン3)

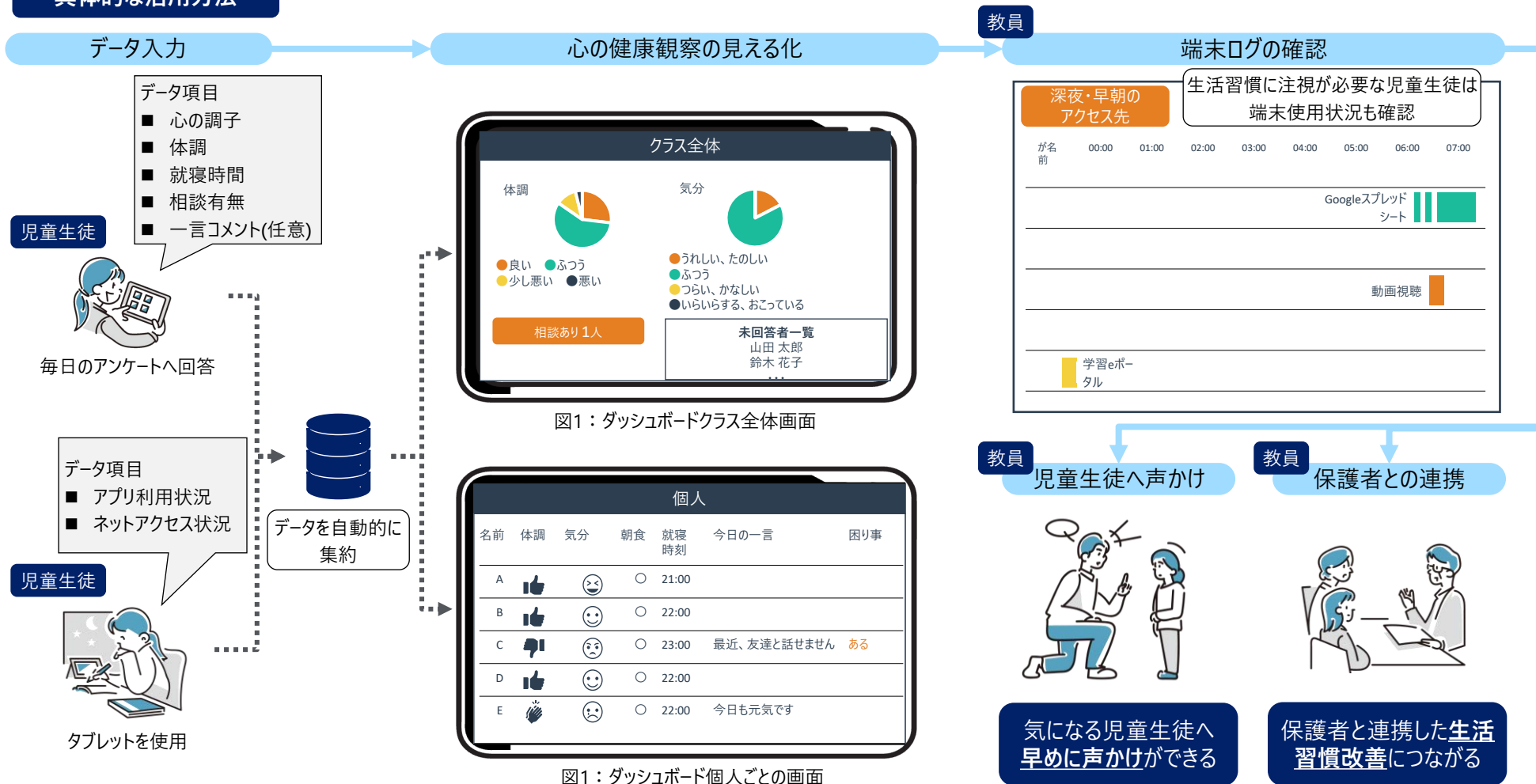
概要

甲府市では、全小中学校で、子どもの状況に合わせた個別支援を目的に、教科書やドリルアプリの使用状況、心の健康観察結果等をGoogle Cloudに集約し、ダッシュボード化している。日々の心の健康観察に加え、端末使用状況も見ることで、生活習慣の改善へアプローチしている。

具体的な活用方法

活用システム/ツール

- Google Forms：オンラインアンケート
- Google Cloud：各種データを集約し一元化できるデータベース
- Looker Studio：様々なデータソースのデータを、グラフや表にできる可視化ツール
※Google Formsで集めた児童生徒のアンケート結果や、児童生徒のタブレットから収集したアプリ利用状況等について、Google Cloudで集約し、Looker Studioで見える化している



東京都『在校等時間の見える化による働き方改革の推進』(パターン3)

概要

東京都では、働き方改革を目的に、都立全校の校長が自校の在校等時間を分析するダッシュボードと、保護者や地域に学校の勤務状況を公開するダッシュボードを作成し、分析の効率化や、打ち手の立案、保護者や地域からの働き方改革への理解醸成を図っている。

具体的な活用方法

活用システム/ツール

■ Power BI：様々なデータソースに接続し、データの可視化やレポート作成を行うツール

※出退勤管理システムで記録された日々の教職員の勤怠について、PowerBIへ連携し、見える化している



いわき市『多角的なデータを活用した学級づくり・授業改善』(パターン3)

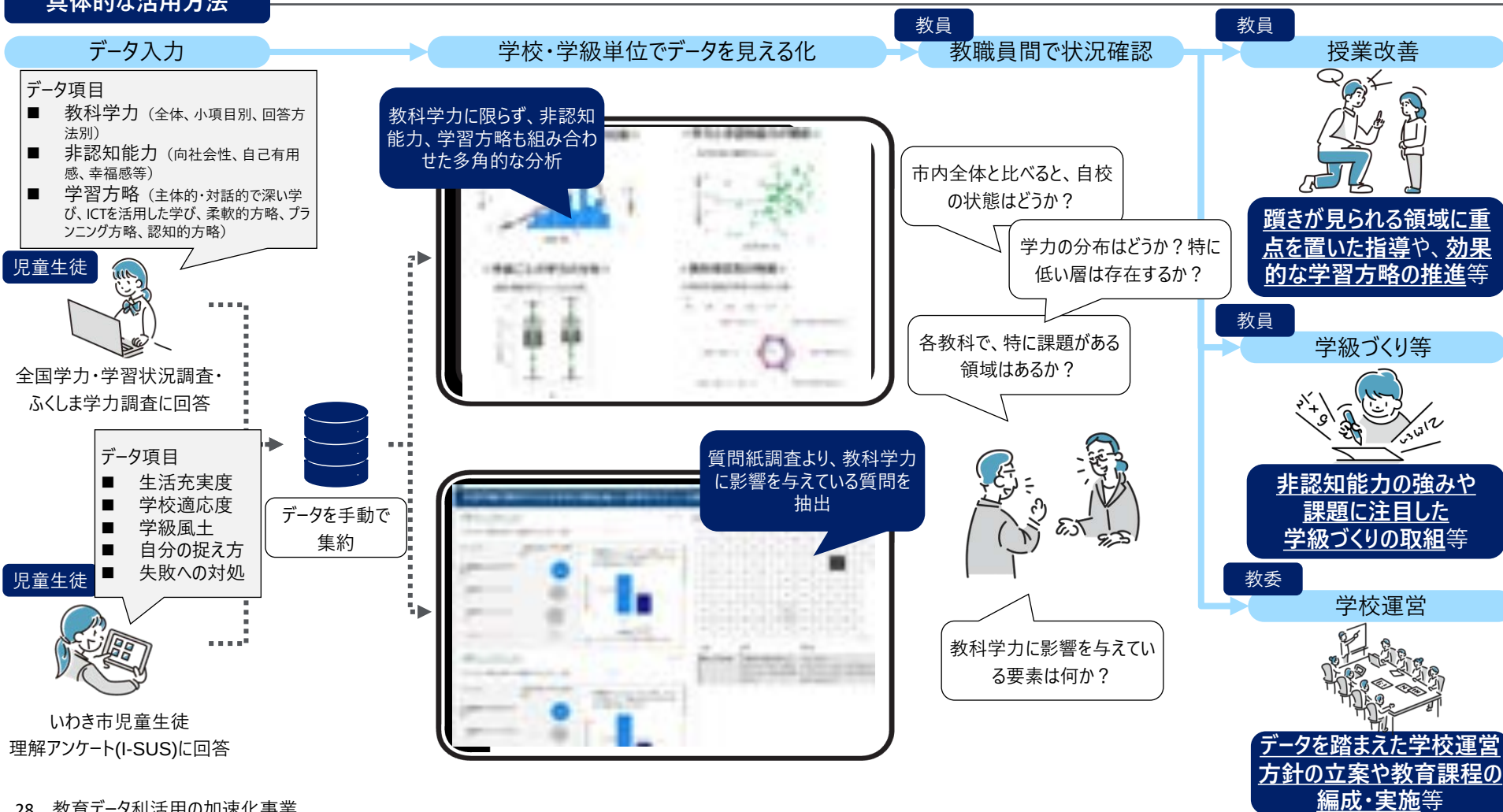
概要

教科学力や非認知能力、学習方略等の多角的なデータを組み合わせ、平均正答率等の表面的な情報に加え、分布図や「インフルエンサー（影響を与えるもの）分析」により、**学校・学級の強みや課題の背景を理解し、改善の糸口となる情報を把握**し、全小中学校で学校運営や学級づくり、授業改善に繋げている。

活用システム/ツール

- PowerBI：様々なデータソースに接続し、データの可視化やレポート作成を行うツール
- ※全国学力・学習状況調査やふくしま学力調査、いわき市児童生徒理解アンケート-I-SUSの結果をPowerBIへ連携し、見える化している

具体的な活用方法



3.教育データ利活用に向けた地方自治体コミュニティの運営

3-1. コミュニティ 実施実績

地方自治体で教育データ利活用に取り組む際の参考情報を提供し、互いの情報交換やネットワーキングにも活用いただくことを目的として、以下の通りコミュニティを開催しました

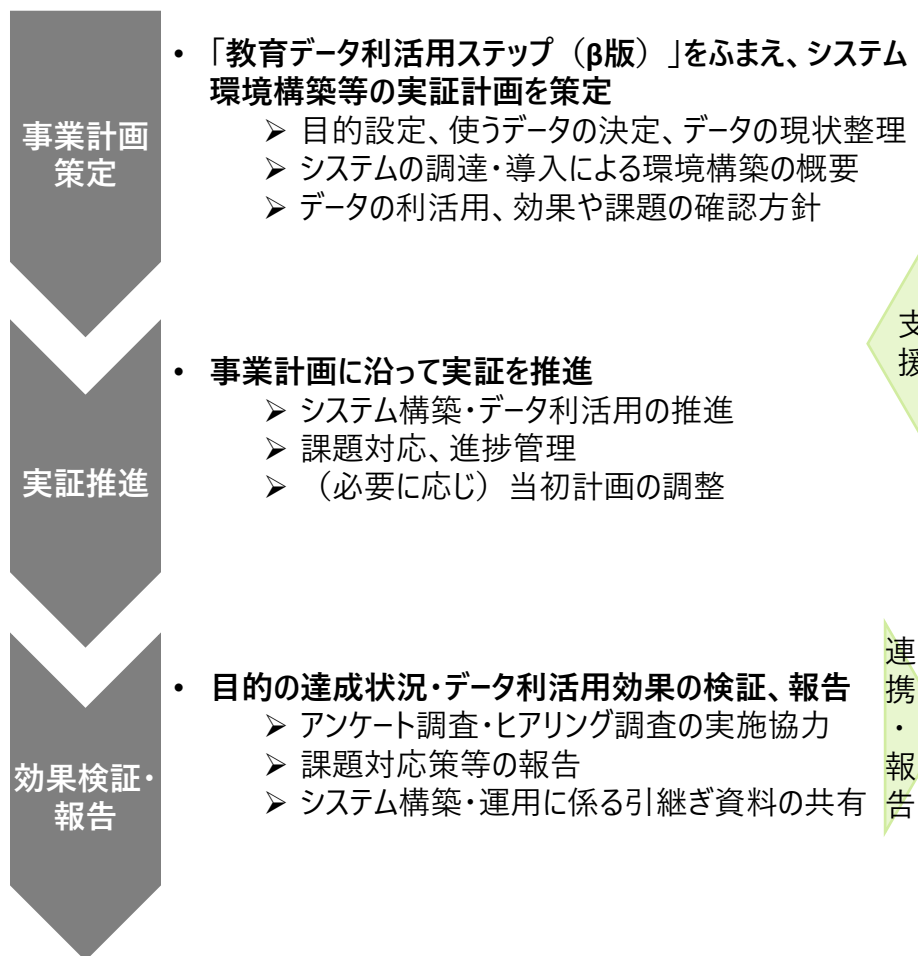
開催日	実施内容（登壇者）
第1回 10月17日	■ 教育データ利活用に関する取組等に係る情報共有（文部科学省 初等中等教育局 学校情報基盤・教材課 教育DX推進室） ■ 令和7年度全国学力・学習状況調査に係る情報共有（文部科学省 総合教育政策局参事官（調査企画担当） 付学力調査室）
第2回 11月28日	■ 自治体事例紹介－教育データ利活用 取組み共有 ➢ 福岡市 教育データ利活用の取り組み（福岡市教育委員会） ➢ 学校カルテ（学校・学級ダッシュボード）による学校・学級の強みや課題の分析（いわき市教育委員会） ■ 交流パート－グループに分かれて個別質疑・交流
第3回 12月24日	■ 自治体事例紹介－教育データ利活用 取組み共有 ➢ データ利活用の推進は「3S」で！－香川県域で進める教育DXの夢－（香川県教育委員会） ➢ 働き方改革推進のためのダッシュボード（福島市教育委員会） ■ 交流パート－グループに分かれて個別質疑・交流
第4回 1月28日	■ 国立教育政策研究所 教育データサイエンスセンター 講演 ➢ 教育データのイメージを拡げ、深める ➢ 全国学力・学習状況調査の分析・活用に関する情報提供
第5回 2月27日	■ 今年度事業における取組の報告 ➢ 教育データ利活用 実証研究の取組状況 ➢ 今年度事業における調査・成果報告概要報告 ■ 交流パート－グループに分かれて個別質疑・交流

4. 教育データ利活用実証研究

4-1. 実証研究_役割分担（再掲）

実証自治体では「ステップ（β版）」をふまえた教育データ利活用の環境構築・導入等を進め、弊社からは定期的な打合せ等による伴走支援と効果検証支援に取り組みました

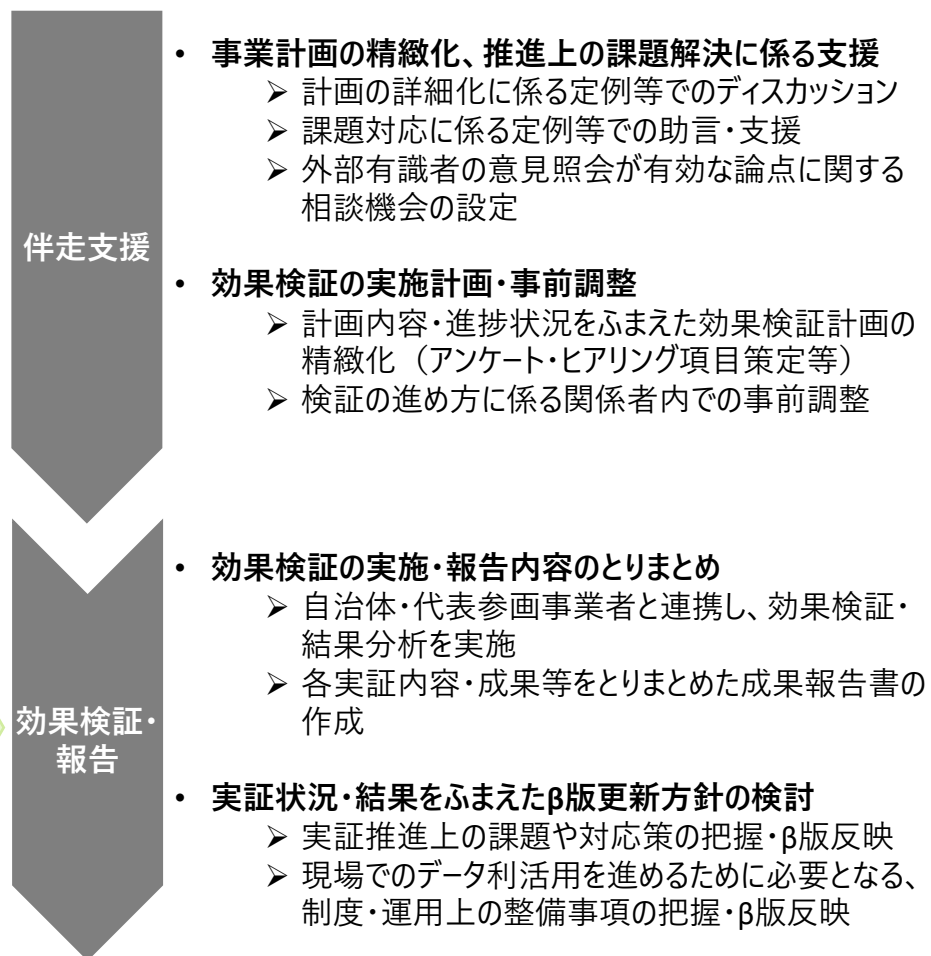
教育データ利活用の実証（採択自治体・参画事業者 主導）



支援

連携・報告

教育データ利活用の推進に向けた研究開発（事務局（トーマツ） 主導）



4-1. 実証研究_取り組み概要（再掲）

長浜市、鹿児島市、山形県の3自治体により、それぞれのデータ利活用目的に照らし、必要なシステム環境の構築・展開が進められました

実証主体	前提情報	今年度の主な取組（開発）内容
長浜市 ・ 内田洋行 パターン2	- 令和6年度実証に参加 - 前年度は学習eポータルを中心に、「AIドリル」、「校務支援システム」等のデータを連携し、ダッシュボードで可視化するシステムを構築、市内小中学校へ展開済	前年度構築システムの使いやすさ・可視化データの付加価値の向上 - 健康観察データの入力動線の改善（教室内でデータ入力可能とするUIの導入） - 学習eポータルで収集したデータに基づく、心の不調や生活リズムの乱れに係る支援を要する子どものアテンション表示 - データの視認性、見やすさの改善
鹿児島市 ・ NTTドコモビジネス パターン2	- 学習系（まなびポケット、navima等）および校務系（スズキ教育シリーズ）のシステム、学習eポータル「まなびポケット」を市内全小中学校に導入済 - 令和6年度より「まなびポケット」に付随する教育ダッシュボード機能を運用中	学習eポータルの統合ダッシュボード化による、教育データ利活用環境の整備 - 学習系・校務系システムからのデータ連携 - 校務支援システムのクラウド（evanix）移行・統合ダッシュボードへのデータ連携（重点実証校2校のみ） - AAR振り返り機能、AIレポート機能の導入
山形県 ・ Ddrive パターン3	「第7次山形県教育振興計画」（令和7年3月）において、学びの改革や校務改善につながるICT活用の充実を図ることが示されており、教員に関するデータについて効果的な活用を図る必要がある - システムについては、令和7年度から新規に開発	BIツールを用いたデータの可視化や分析（ダッシュボードの創出） 教職員の勤務実態および勤務時間を正確に把握するための「勤務時間データ収集アプリ」および「業務実態を把握するためのダッシュボード」開発

各実証自治体・参画事業者からの成果報告

4-2. 長浜市_実証研究報告

(1) 事業概要

長浜市では、前年度からの継続実証自治体として、使いやすさ・見える化データの付加価値の向上に向け、構築したダッシュボードの改良に取り組みました

背景・目的

■実証の背景・課題

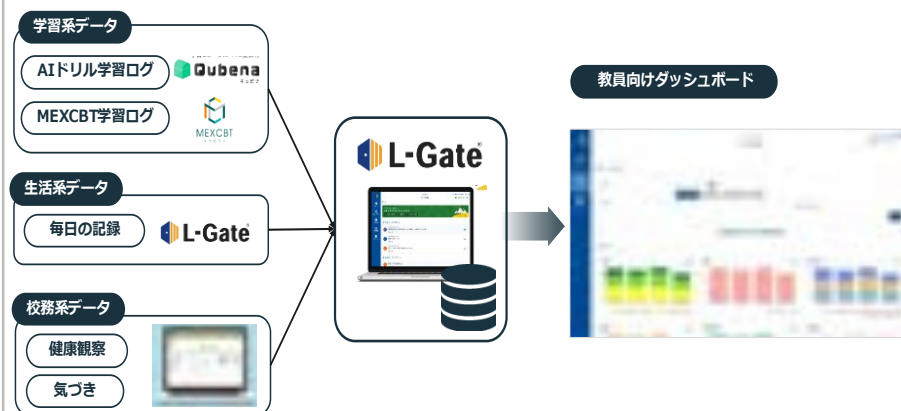
- 長浜市では、第3期長浜市教育振興基本計画（令和3年1月）において基本方針を「つながりあい、学び合い、豊かに生きる人づくりをめざす「ながはま」」とし、教育大綱において6つの基本目標を掲げ、その基本目標実現するために定めた13の基本的方向を示している。
- 13の基本的方向の中でも特に、「一人ひとりを大切に**する教育の推進**」「**確かな学力の育成**」を実現するため、個別最適な学びを実現するAIドリルや、各種システムの導入を通じ、**教育のDX化を推進してきた**。行政全体でも、令和4年に長浜市DX推進戦略を公表し、DX化を通じた教育課題の解決を図ることを目指している。
- 一方、各種システムを通じ**児童生徒のデータが収集・蓄積されつつあるものの、十分な活用までは至っておらず**、令和7年度「長浜市教育行政方針」でも、教育データベースの活用により確かな学力の育成を図ることを重点施策としており、データ活用により様々な教育課題に対応することは政策上の喫緊の課題となっている。

■令和7年度実証の目的

- 上記背景・目的をふまえ、長浜市では、令和6年度文部科学省委託事業「教育DXを支える基盤的ツールの整備・活用事業」に参画し、**教育データの利活用のためのデータ連携基盤を構築した**。
- 今年度は、昨年度構築した環境を活用し、担任任せにせず、**学校全体で子どもを見守り、支援を行う「チーム学校」としての組織的支援体制の確立**を目的に、支援を要する児童生徒を効率的に抽出する仕組みの導入等に取り組むこととした。

構築システム概要

- 児童生徒の生活アンケート（心の調子・生活習慣等）は学習eポータル（L-Gate）で入力
- 健康観察や教師の気付きは校務支援システム（デジタル校務）、学習履歴はAIドリル（Qubena）やMEXCBTから取得
- これらのデータを同一IDで識別し、データ連携基盤上で統合・蓄積したうえで、ダッシュボードにおいて可視化



(1) 事業概要 実施体制・スケジュール

今年度の実証に際しては、市内3校を活用重点校に位置付け、日々のデータ入力からダッシュボードの利活用までの一連の取り組みと、効果検証を実施しました

実施体制	参画者	主な役割
	長浜市教育委員会 教育改革推進課 教育指導課	事業全体の統括、進捗管理、実証校との調整、効果検証の実施および成果の取りまとめ 各学校のダッシュボードの参照
	株式会社内田洋行	データ連携基盤およびダッシュボードの構築・改修、システム運用支援、その他プロジェクト管理上の支援
	中学校1校 小学校2校	生活・学習データの入力・活用、ダッシュボードの利用、効果検証への協力および現場課題のフィードバック



(2) 利活用対象データ項目

利活用対象データ項目、表示・集計方法については、教育委員会主導のもと、活用重点校や参画事業者との協議を経て決定されました

システム名	項目分類	項目名	内容	取得頻度
L-Gate	毎日の記録	心の状態	毎日取得する小アンケート。児童生徒の調子（心身の状態）を収集する。 一定の条件を満たす児童生徒を抽出表示（アテンション機能）する。	1時間に1回 8:40更新を追加
L-Gate	毎日の記録	朝食	毎日取得する小アンケート。朝食を食べたかどうか。 一定の条件を満たす児童生徒を抽出表示（アテンション機能）する。	1時間に1回 8:40更新を追加
L-Gate	毎日の記録	睡眠	毎日取得する小アンケート。十分に睡眠がとれたかを確認する。 一定の条件を満たす児童生徒を抽出表示（アテンション機能）する。	1時間に1回 8:40更新を追加
L-Gate	毎日の記録	就寝時間	毎日取得する小アンケート。何時に寝たかを確認する。	1時間に1回 8:40更新を追加
L-Gate	毎日の記録	家庭学習時間	毎日取得する小アンケート。家庭学習を行った時間を記載。	1時間に1回 8:40更新を追加
L-Gate	MEXCBT	MEXCBT	MEXCBTのテストに対して、誰が回答を実施したかの状況。	1時間に1回
デジタル校務	健康観察	健康観察	校務システムの健康観察機能。毎朝確認される体調等の確認した内容が反映される。 一定の条件を満たす児童生徒を抽出表示（アテンション機能）する。	3時間に1回
デジタル校務	気づき	気づき	校務システムの気づき機能。日常の中で教師が気づいた児童生徒に関する行動や注意を要する出来事などを登録する。	3時間に1回
Qubena	回答ログ	問題取組み状況	Qubenaの問題に対して、どの教科の問題に対して、誰が何問回答したかの状況。	1日1回

● データ項目定義を進める上での工夫・留意事項

昨年度実証を踏まえて、本年度は長浜市教育委員会主導のもと、活用重点校や参画事業者と協議し、生活面データを中心に活用対象項目を整理した。生活面のデータについては、支援を要する児童生徒を効率的に抽出するアテンション表示の条件設計を検討し、ダミーデータによる表示・集計ロジック検証などを実施して決定した。

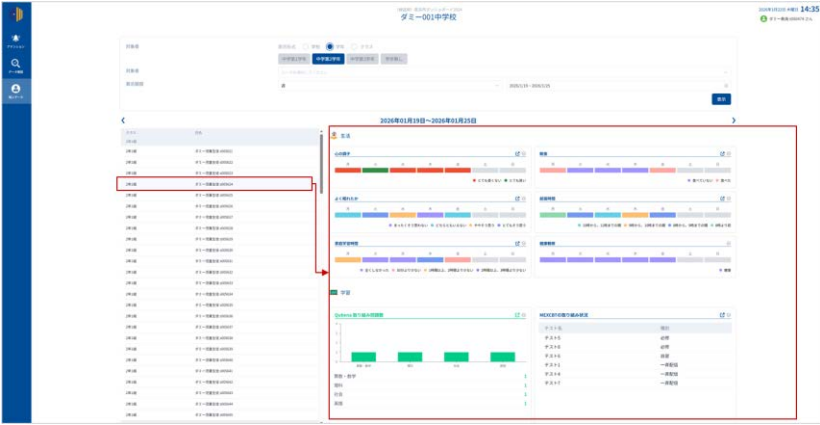
(3) 可視化システム・ツールにおける工夫 (1/4)

特に注意を要する児童生徒について、迅速な把握を可能とするため、生活アンケートの回答傾向や変化等に着目した「アテンション機能」を実装しました

タイトル	工夫内容	画面イメージ
注意が必要な児童生徒を即時把握するアテンション機能の実装	(検討課題・目的) - 多数のデータがサマライズされた画面では、どの項目に着目すべきかが直感的に分かりづらく、ダッシュボード閲覧時の負担が大きいとともに、重要な変化を見逃す可能性があった - そのため、特に注意が必要な児童生徒やデータを自動的に抽出・表示し、迅速な状況把握と判断を支援する仕組みの構築を目指した (工夫内容) - ダッシュボードで活用している各種データについて、どのような状態を「特に注意が必要」と判断するか検討を重ねた。単純に生活アンケートの5段階評価スコアが低い児童生徒を抽出するのではなく、「低いスコアが継続しているケース」や「スコアが急激に変動しているケース」など、変化や傾向にも着目した検知ロジックの設計を行った - 想定されるデータパターンを洗い出した上で、既存データを用いたシミュレーションを行い、検知精度や妥当性を検証して有効と判断されたパターンをダッシュボードのアテンション機能として実装した - また、検知されたデータについて該当児童生徒を迅速に把握できるよう一覧表示機能を設けた。一方で、個人情報保護の観点から、初期画面で直接氏名を表示するのではなく、ワンクリック操作を介して一覧を表示する設計とした	▼アテンション画面  ▼該当児童生徒の一覧表示画面 

(3) 可視化システム・ツールにおける工夫 (2/4)

昨年度の実証研究・効果検証を通じて現場から寄せられたニーズをふまえ、ダッシュボードのUI設計や配色等の改良に取り組みました

タイトル	工夫内容	画面イメージ
個別状況を把握するための個人データ表示機能の実装	(検討課題・目的) - 令和6年度時点では、学校・学年・クラス単位で集計されたデータのみを表示しており、個々の児童生徒の詳細状況を直接確認することができず、具体的にどの児童生徒にどのような状況が生じているのかを把握することが困難であった - そのため、着目した児童生徒の詳細状況を確認できることを目指した (工夫内容) 児童生徒一覧から表示対象を選択する操作により、対象児童生徒をスムーズに切り替えられる設計とした 毎日のアンケートや健康観察の回答状況を直感的に把握できるよう、カレンダー形式のUIを採用した	
視認性向上に向けたグラフ配色の調整	(検討課題・目的) - 従来のグラフ配色は、色覚特性に配慮したカラーユニバーサルデザインを採用していたが、その結果、色味が濃くなり、画面全体として視認性が低下することがあった - そのため、アクセシビリティへの配慮を維持しつつ、より視認性を担保した配色構成を目指した (工夫内容) - グラフの配色については、色の透過度を調整することで過度な主張を抑え、背景や他要素とのコントラストバランスを改善した	

(3) 可視化システム・ツールにおける工夫 (3/4)

教育委員会ユーザーについて、域内の学校を横断的に参照していく必要があるため、学校を選択・切替えをスムーズに行うための機能を実装しました

タイトル	工夫内容	画面イメージ
教育委員会ユーザー向け学校切替閲覧機能の実装	(検討課題・目的) - 本ダッシュボードは、ユーザーが所属する学校のデータのみを閲覧できる構成であったため、教育委員会のユーザーが複数校の状況を確認する際には、対象校ごとに別ユーザーとしてログインし直す必要があり、確認作業に大きな手間を要していた - そのため、ユーザーの所属やアカウントを切り替えることなく、閲覧対象校を選択できるようにし、教育委員会ユーザーの閲覧負荷を下げることを目指した (工夫内容) - 教育委員会ユーザーと判別されたアカウントについては、ダッシュボード表示時および閲覧中に対象学校を選択・切り替えできる機能を実装し、少ない操作で学校間の確認を可能とする設計とした - 教育委員会ユーザーの判別には、L-Gateの所属情報および権限情報を活用し、さらに校務支援システムとの名簿連携を組み合わせることで制御を行った。これにより、新たな権限体系を追加することなく、既存の権限運用を流用できる構成とした	▼教育委員会ユーザーによる学校の切り替え画面 

(3) 可視化システム・ツールにおける工夫 (4/4)

現場の教職員の日々の業務の中で利活用し易くなるよう、業務負担軽減のための入力プロセス改善や、データ更新頻度の調整を実施しました

タイトル	工夫内容	画面イメージ
健康観察情報の反映速度向上に向けた入力プロセス改善	(検討課題・目的) - 毎朝の健康観察について、従来は紙で記録し、後から校務支援システムへまとめて入力していたため、教員の事務負担が大きかった - またシステムへの登録が遅れることで、ダッシュボードへのデータ反映も遅延し、当日の状況把握ができないことがあった - そのため、入力プロセスを改善することによって、入力から可視化までのリードタイムを短縮することを目指した (工夫内容) - デジタル教務手帳を用いて教員がGIGA端末から健康観察情報を教室内で入力できる運用とし、アナログ作業を廃止した	▼教員向け説明資料 健康観察の仕組みをわかりやすく説明し、現場で活用しやすいよう迅速に確認しながら、「健康観察情報」を登録することが可能です。 健康観察の情報は、教務手帳から取得する「デジタル教務」画面で即時登録できます。即時登録することで、健康データの反映が瞬時にシステムに反映することが可能となります。 デジタル教務の活用により迅速に「健康観察情報」の登録が可能となります。デジタル教務の活用により、健康観察の登録が迅速に行われ、データの反映も迅速に行われます。 
運用実態に合わせたデータ更新頻度の調整	(検討課題・目的) - L-Gate「毎日の記録」における心の状態や生活習慣に関するアンケートについて、教員がダッシュボードを確認する朝の時間帯と、当日の回答が反映されるタイミングが一致しておらず、当日の状況を十分に把握できない場合があった - そのため、朝のデータ確認時点で大半の回答が反映されている状態を目指した (工夫内容) - ダッシュボード活用が進んでいる学校にヒアリングを実施し、管理職や養護教諭が概ね9時頃に当日の状況を確認していることが判明したため、その時間帯までに主要な回答データが反映されるよう、更新タイミングおよび頻度の見直しを行った	N/A

(4) 現場活用促進のための施策・工夫

現場での活用を促すため、事前の訪問説明や、段階的な機能リリースを行ったほか、運用中も定期的に連絡・訪問を行い、教職員の困り感や要望の直接把握に努めました

時期	タイトル	工夫内容
事業開始前	現場の不安を解消する事前準備	(検討課題・目的) - 教員の負担感や心理的ハードルを軽減しつつ、関係者の理解・合意形成を進めることを目的として実施した。 (工夫内容) - 管理職、養護教諭、ICT担当者へ直接足を運び、実証の意図やスケジュール、教員の負担感について直接説明し対話。 - 段階的な導入ステップ: 9月に教務手帳、10月にアンケート、11月に実証開始と、機能を1ヶ月ごとに順次開放し、操作に慣れるための「ゆとり」を確保した。 - 各校の実態に即した研修: ダッシュボードや教務手帳の使い方を各校で実施し、導入時の心理的ハードルを下げる工夫をした。
運用中	現場の声を反映するサポート体制	(検討課題・目的) - 運用中も、双方向のコミュニケーションと迅速な改善対応により、利用者の安心感と信頼性を高める必要がある。 (工夫内容) - 電話やメールで随時意見を受け付けるだけでなく、市教委からも定期的に連絡を入れ、双方向のコミュニケーションを維持した。 - 運用中に実際に学校を訪れ、先生方の「困り感」を直接把握。使い勝手に関する要望をお聞きした。 - システム改善: 「色味の調整」や「過去履歴の閲覧」など、現場の要望を可能な限り参画事業者と連携して形にした。

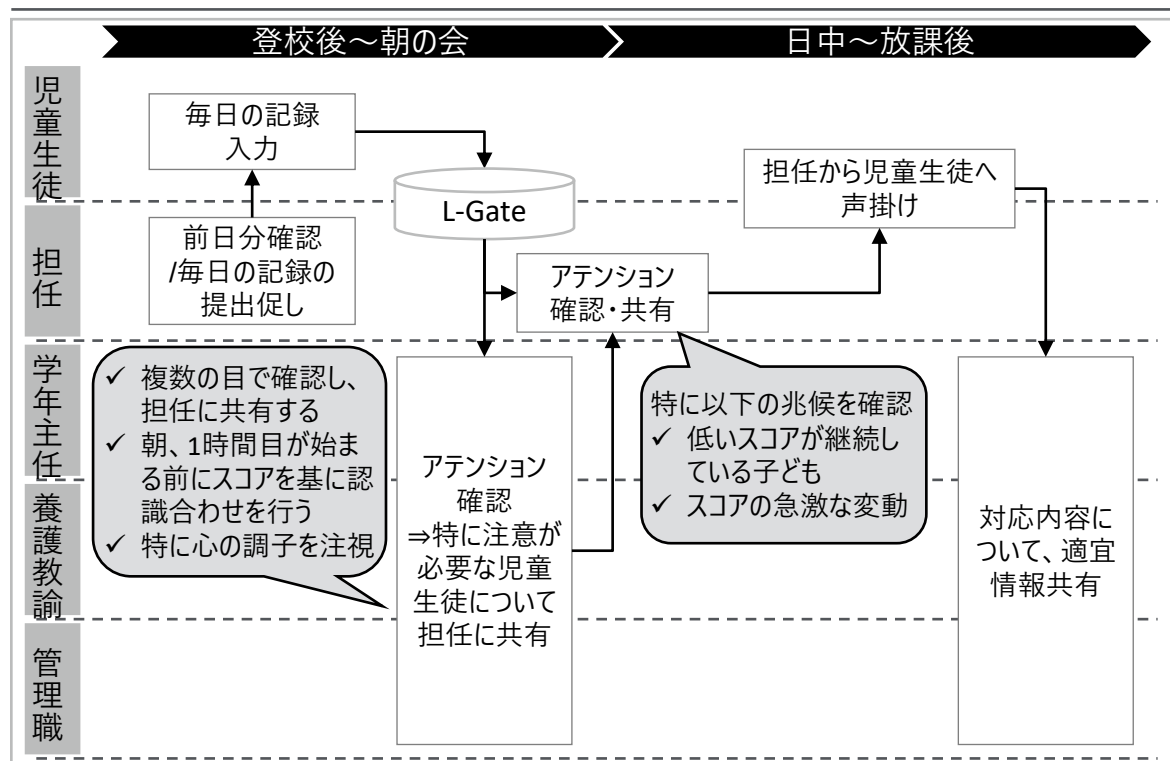
(5) 現場での活用状況

学校現場では、児童生徒の生活アンケート（「毎日の記録」）の回答結果や担任による健康観察結果、それらを反映したアテンション機能を中心に活用が進みました

学校や先生によって細かな活用タイミング等は異なるが、概ね以下のような業務の流れに基づいて活用している

- ① 朝の会で、児童生徒に「毎日の記録」の入力を促す。担任の先生は出欠席や健康観察を「デジタル教務手帳」を通じて入力する
- ② ①の入力結果を反映したアテンションについて、担任が確認をする。また教頭や養護教諭等担任以外の先生も確認をし、「心の調子」等で特に注意が必要な児童生徒がいた場合は担任に共有する。
- ③ 担任は朝の時間は忙しく、リアルタイムにチェックすることは難しい。時間があるときに前日のアテンション結果を見る等してキャッチアップする場合もある。

業務フロー



検知課題・リスク、それらへの対応

- ・ 特に担任は、朝の時間は忙しく、ダッシュボードを見る時間が取れない
- ・ 見る時間がなかなか取れない一方で、重要な項目設定であるがゆえに「見落とせないプレッシャー」が増える
- ・ 教室でダッシュボードを確認しようと思ったときに、担任が朝の会や授業等のために既に画面投影をしていると端末がふさがり確認できない

⇒学校全体での共有体制等、「担任の先生一人の責任にならない」ような運用体制を構築する

- ・ 「毎日の記録」の入力がされていない（データの無い）児童生徒に対する解釈が難しい（例：遅刻してくる児童生徒は入力がされないことが多い）

(6) 効果検証結果 (アンケート)

効果検証においては、活用重点校の教職員を対象にアンケートを実施し、データ入力機能やダッシュボードの使いやすさ、実際の使い方、得られた気づき等について調査しました

	アンケート回答サマリ	考察・得られた示唆
システムの主な 使われ方	ダッシュボードの確認は「アテンション」が主（35件の回答のうち、22人が選択）で、その確認時間は「～5分」といった短時間が多数（80%）あった	- ヒアリングでも挙げたが、ダッシュボードの中で特に閲覧されたのは今回新規機能追加をしたアテンションであった。これは「アテンションが有効だった」とも言えるが、一方で「アテンションしか見られなかった」とも言える。 - ヒアリング等からも先生方の時間的制約が確認されており、わずかな時間で抽出された項目のみ見るという運用が主であることが分かった。じっくりと分析を行う運用が学校現場でどこまで現実的であるか、そもそも必要であるか含めて検討が必要である。
システムの使い やすさ	- システムユーザビリティスケールの平均点は、32.63点（50点満点）であった - 最も肯定的回答の割合が高かった質問は「このシステムを使いこなすには技術者のサポートが必要だと思う。」（“あまりあてはまらない”&“あてはまらない”で57%）、最も否定的回答の割合が高かった質問は「このシステムを使うことにとても自信が持てた。」（“あまりあてはまらない” & “あてはまらない”で34%）であった	- 昨年度28.23点（n=31）であったことから、一定の改善が示唆される結果となった。アテンション機能の新規導入を中心に、改善があったと言える。 - 一方、システム利用に自信があまり持てなかったユーザーがいるのは、閲覧する時間的余裕の無さやシステムを見た後の具体的な支援等の行動に繋がりにくいこと等が、システムの利用に自信を持ちづらい理由であると考える。
システムの効果	ダッシュボードを使用することで、先生方へどのような気づきを与えたかという質問に対して、生活系では「メンタルヘルス・生活習慣が良い児童生徒、困難を抱える児童生徒は誰かわかった」が最も多く38%であったが、学習系では「特に気付くことはなかった」が最も多く80%を占めた（ただし生活系においても2番目に多かったのは「特に気付くことはなかった：36%」であった）	- 長浜市の当初の目的意識の通り、生活系のデータでは先生方へ気づきを与えることができた。 - 一方学習系のデータではアテンションの項目が含まれていないので、教員に与える気づきは少なかった。生活系においても「特に気付くことはなかった」という回答が一定数を占めたが、その明確な理由は明らかではないため今後の課題である。

(6) 効果検証結果 (ヒアリング)

活用重点校の教職員へのヒアリングでは、アンケート回答をさらに深掘りし、日々の運用の中でのデータの捉え方や、継続的に利活用を進めていく上での課題について確認しました

	ヒアリング回答サマリ	考察・得られた示唆
実際にアテンションを見て感じたこと	アテンションには、複数回同じ児童生徒が挙がってくることがよくあり、その対象児童生徒は日々の生活状況から見ても納得できるものであった	- 日々の生活状況から見ても納得できる児童生徒が挙がってきているのは、改めてデータで確認するという意味でも一定意義のあることであると言える。 - 一方で、恒常的にそのような児童生徒が挙がってくことで先生方があまり結果を注意深く見なくなってしまうといった懸念はある。現場での運用として「普段あまり気にしていない児童生徒が挙がっていないか」という変化を見る観点で毎日の結果を見る習慣化が必要である。
データ入力の実用的な課題	児童生徒本人の回答であることの良さを感じていた一方でデータの入力における課題もあった（例えば「今日の心の調子を選んでください」という質問の意味がうまく理解できていない子がいる。遅刻等、支援が必要かもしれない児童生徒ほど入力がされない）	- 今回、児童生徒向けアンケート「毎日の記録」では小中学校共通の質問項目を設定したが、発達段階によっては文章が抽象的で難しい側面もあったと言える。 - 学年ごとではなくとも小学校／中学校の区分けをして質問をわけたり、より具体性の高い質問の文言や選択肢に変更する等の対応が考えられる。
ダッシュボードを見た後の支援への接続	朝にダッシュボードを見る余裕がないのと同時に、朝見たとしても即時対応できる自信がない	「誰がいつ、何の情報を」確認すべきか／しなくても良いか、整理が必要であると言える。例えば朝の会直後の確認は担任の必須事項とはせず養護教諭等他の先生方で補足し職員会議等で全体共有する機会を設ける、一方で担任も放課後に必ず一回はその日の様子を確認する等が運用例として挙げられる。 - スクールカウンセラー等外部の人材活用も包括的な支援の観点で重要である。また、児童生徒の入力タイミングも柔軟にし朝の会だけではない一日通した運用の検討も一案である。

(7) 今年度実証研究の総括・今後の展望

今年度実証では、全教員で全児童生徒を支援していく上での、データ利活用の有効性が示されました。今後はさらに運用設計の精査を進め、DX化による業務改善と両輪で、データ利活用の定着、学校全体での支援スキーム構築に取り組む方向性が考えられます

1. ダッシュボード活用推進の前提

- 子ども支援に効果があること（不登校・いじめの早期対応等）
- 業務改善（働き方改革）につながる
- 現場の多忙感を踏まえ、**高い労働対効果**が必要

2. 実証で得られた成果

- 不登校・いじめの早期対応に対する効果を教員が感じた
- 心の不調を訴える児童生徒への早期の声かけが可能になった
- 担任だけでなく、教頭・学年主任・養護教諭等が情報を共有して関わる体制の有効性が認識された
- 「全教員で全児童生徒を見ていく」意識が作られるようになった

3. 今後の推進の方向性

- 小学校／中学校それぞれに合った運用の検討
 - 小学校では、担任単独ではなく、養護教諭・管理職を中心とした学校全体での支援スキームを構築
 - 中学校では、学年主任が学年全体を把握・支援する運営を想定
 - （スクールカウンセラー等学校外の人材の活用も一案）
- アンケート実施・ダッシュボード確認の時間確保を前提とした運用設計（「誰が、いつ、何を確認するか」の明確化）
- DX化による業務改善と、ダッシュボードを活用した支援の充実を両立

4-3. 鹿児島市_実証研究報告

(1) 事業概要

鹿児島市では教育目標の実現に向けた教育データの利活用を掲げており、本実証では施策に紐づいたユースケースの創出を目的に、ダッシュボードを設計しています

背景・目的

■実証の背景・課題

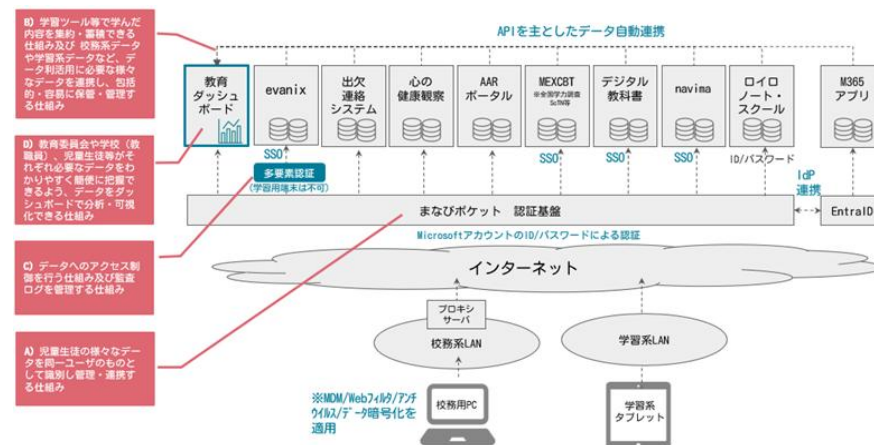
- 鹿児島市では、「鹿児島に誇りを持ち これからの時代に必要な生きる力を養い 心身ともにたくましく まなび続ける人材を社会全体で育成」する教育目標を掲げており、教育データを活用し実現していく方向性である。
- 鹿児島市では、データ利活用の仕組みは徐々に整いつつあるものの、まだデータ活用そのものは日常化していない。先行自治体で展開されている多くのダッシュボードは「技術的に取得・表示可能な情報」をそのまま可視化しているにとどまっており、現場での実用性が十分に考慮されていないケースがある。
- また、学校現場においてデータ分析の専門人材を配置することは、予算や人材確保の観点から現実的ではなく、教員自身が高いデータ分析スキルを身につけて活用することにも限界がある。こうした人材面の制約も、データ活用の定着を妨げる要因となっている。

■令和7年度実証の目的

- 本事業（教育データ利活用の加速化事業）の趣旨である、教育データ利活用の目的設定、環境構築、データの収集、分析、分析結果の活用までの一連のプロセスを実証したうえで、**真に活用価値のある教育データ利活用のユースケースの創出や、効果的な活用に向けたノウハウなどを創出し、教育データ利活用の推進に寄与することを目指す。**

構築システム概要

- 本実証では、学習eポータル「まなびポケット」に搭載された「教育ダッシュボード」を基盤とし、学習系システム（まなびポケット）にて教育データの利活用環境を構築する。
- データはAPI連携を前提とした自動連携を主とし、まなびポケット認証基盤にて児童生徒と紐づけしたデータをダッシュボードに反映させる。
- ユーザーロールによってデータ閲覧可能範囲は制限され、データアクセス制御を行う仕組みとして多要素認証を整備している。



(1) 事業概要 実施体制・スケジュール

今年度の実証に際しては、市内小中学校1校ずつを実証校に位置付け、日々のデータ入力からダッシュボードの利活用までの一連の取り組みと、効果検証を実施しました

実施体制	参画者	主な役割
	鹿児島市教育委員会 教育DX推進担当	実証事業全体の推進、実証校との調整、ダッシュボードの教育委員会機能の利用実践
	①エヌ・ティ・ティ・ドコモビジネス株式会社 (代表) ②スズキ教育ソフト株式会社 ③バستمソリューションズ株式会社	①プロジェクト全体の管理、実証内容の設計および遂行、ダッシュボードの開発提供 ②校務支援システムevanixの提供および環境構築 ③ネットワーク環境構築および校務用PC環境整備
	・中学校1校 ・小学校1校	本実証における対象校として、児童生徒および教職員によるデータ利活用の実践

スケジュール		8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	要件定義	環境構築・要件定義							
	開発・リリース			生徒カルテ機能 探索機能		evanixテスト結果 AAR振り返り結果 相関マップ機能	AIレポート ヒート マップ機能		
	現場運用 (準備含む)		以下2点を設定 校務データ連携 多要素認証機能	ダッシュボード 心の健康観察 研修会①	AARポータル ScTN質問紙 研修会②		AIレポート 機能 研修会③		
	効果検証				アンケート項目整理 ヒアリング①	ヒアリング②	ヒアリング③	アンケート ヒアリング④	
	成果報告								成果報告

(2) 利活用対象データ項目

データの活用に際しては、情報保護の観点で現場や校務支援システム提供事業者との事前協議を行い、セキュリティを担保したうえで提供を進めました

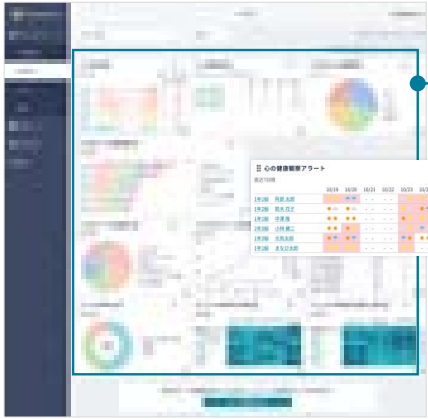
項目分類	項目名	取得頻度	連携元	表示先ダッシュボード・表示単位		
				管理職	教職員	教委
校務データ	欠席者数超過	深夜1回	evanix	3者ともに表示		
校務データ	保健室利用の多い生徒	深夜1回	evanix	3者ともに表示		
生活データ	本日の心の健康観察一覧	リアルタイム	まなびポケット	3者ともに表示		
校務データ	生徒指導案件	深夜1回	evanix	3者ともに表示		
校務データ	日常所見	深夜1回	evanix	3者ともに表示		
学習データ	AARポータル振り返り状況	7:00～20:00 にて毎時 00 /30 分 および深夜 1 回	まなびポケット	3者ともに表示		
校務データ	定期テストの得点	深夜1回	evanix	3者ともに表示		
校務データ	定期テストの得点推移	深夜1回	evanix	3者ともに表示		
校務データ	保健室利用数の推移	深夜1回	evanix	3者ともに表示		
校務データ	保健室利用状況	深夜1回	evanix	3者ともに表示		
生活データ	出欠情報	リアルタイム	まなびポケット	3者ともに表示		
学習データ	アプリ活用状況	深夜1回	まなびポケット	3者ともに表示		
学習データ	端末活用状況	深夜1回	まなびポケット	3者ともに表示		
学習データ	MEXCBET	深夜1回	まなびポケット	3者ともに表示		
学習データ	ScTN質問紙	深夜1回	まなびポケット	3者ともに表示		

● データ項目定義を進める上での工夫・留意事項

- ・特に情報保護の観点で、現場や校務支援システム提供事業者と検討を重ね、適切なセキュリティ対策を施した上で提供した
- ・当実証前に、別途現場検証を踏まえた連携データ定義を参画事業者にて実施の上、当実証内では教職員とのディスカッションおよびヒアリング（実証校の現場で4回、オンライン形式で2回）を実施し、対象データを実際に利用する中での過不足、活用メリットのフィードバックを得ることでユースケースの創出・課題洗い出しを図った

(3) 可視化システム・ツールにおける工夫 (1/2)

学校現場での活用が進まない背景を考慮し、本実証では、ユーザー自らが目的に応じて画面カスタマイズを可能とするなど、実用性の高いダッシュボード構築を追求しました

タイトル	工夫内容	画面イメージ
自治体の教育目標に沿った画面設計・各ユーザーの目的に応じた画面設計が可能	(検討課題・目的) - ダッシュボード構築済の自治体において、ダッシュボードを実装したものの現場で活用されていないケースが見受けられる。 - 背景としては、ダッシュボードの活用目的や、一人一人の役割や目的にあった画面設計がされていないこと、取得できたデータからダッシュボードに表示されているため、活用価値が乏しく、現場に理解されていないことなどが挙げられる。 (工夫内容) - 教育委員会の教育目標やダッシュボード活用目的に沿った画面設計が可能。 - そのうえで、各役職・役割、ユーザーのダッシュボード活用目的によって自由に画面設計をカスタマイズできる機能を具備した。 - これにより、データをただ網羅的に表示するダッシュボードではなく、ユーザーの意思と目的にフィットする「教育現場で真に活用できる」ダッシュボードの実現を目指した。 (ユーザーからの声) - 今までのダッシュボードは「これを見る」となっていて、先生によって何を見たいかが分からなかった。これはダッシュボードの民主化だと思う。 今まではダッシュボードは上から付与されるものだったが、まなポケは全ての先生の目線に立ったダッシュボードだと思う。	■初期設定機能のイメージ 教育委員会は教育目標やダッシュボード活用目的をもとに、各学校が閲覧する画面設計を事前に初期設定可能  ■カスタマイズ機能のイメージ  カード一覧 学習カード、生活カードが表示されます。 カードの追加や削除、サイズやレイアウトの変更も可能です。 カードのサイズ・位置変更や表示内容の編集や削除ができるので、アカウント毎に見たい情報を自由にカスタマイズできます

(3) 可視化システム・ツールにおける工夫 (2/2)

日々様々な教育活動を行う教職員の負担を踏まえ、気になる情報にアクセスしやすく、アクションに繋がるダッシュボードとするため、ピックアップ/ピン留め機能を実装しました

タイトル	工夫内容	画面イメージ
誰でもデータから 気づきが得られ る工夫（生徒 ピックアップ・ピン 留め機能）	(検討課題・目的) - ダッシュボードのデータをいちいち読み解くことがユーザーの負担であり、日々の教育活動で多忙な教職員にデータを読み解かせることは不可能であり不要 - 教育活動の中に馴染み、知りたい情報にすぐにアクセスできる仕組みがないとダッシュボードの価値は発揮できない (工夫内容) 生徒ピックアップ - 朝1日の始めに確認すべき情報に絞って表示するピックアップ機能を実装 - 授業理解度・満足度などの学習面や、出欠情報・保健室来室状況・心の健康観察の結果などの生活面の情報をもとに、今日気にかけて方が良い児童生徒をピックアップして表示 ピン留め機能 - 気にかける児童生徒をピン留めすることで常時メニュー表示することが可能 - 様子を把握しておきたい児童生徒の、今日の出席状況と心の健康状態をリアルタイムで把握が可能 (ユーザーからの声) 1日の始めに毎日見えて、生徒への声掛けや関係者との連携に繋がっている。確認時間は1人1分もかからない。	■生徒ピックアップ  ■ピン留め機能 

(4) 現場活用促進のための施策・工夫 (1/2)

実証校と密に連携し、現場の声を踏まえた要件定義・開発を実施することで「現場で活用されるダッシュボード」を目指しました

時期	タイトル	工夫内容
要件定義/ 開発・テスト	学校現場での プロトタイプ 検証を踏まえた 要件定義・ 開発	(検討課題・目的) - ダッシュボード構築済の自治体事例ではダッシュボードを実装したものの現場で活用されていない課題がある。 - 背景としては、ダッシュボードの活用目的が明確かされていないことや、教育現場の一人一人の役割や目的にあった画面設計がされていないことがあげられる。 - 莫大な開発・人的コストをかけて構築したダッシュボードにもかかわらず、活用負荷が大きく価値が乏しいダッシュボードのままだと教育データ利活用は推進されない。 - この課題を解決するため、参画事業者による当実証前の検証も含め、累計150回以上の教育現場での検証をもとに教育現場に沿ったダッシュボードの開発を実現した (工夫内容) - 真に活用されるダッシュボードを開発するための工夫として、以下の流れに留意して実証に取り組んだ ①ダッシュボードの活用目的やユースケースを検討 ②検討した活用目的等をもとにプロトタイプを作成 ③教育現場で実際に活用していただく ④活用の結果出てきたフィードバックをもとに改善点を洗い出す (①に戻る) 改善点をもとにダッシュボードのUIUX、ユースケースを検討

(4) 現場活用促進のための施策・工夫 (2/2)

ダッシュボードの活用を促進するため、教職員の利活用ハードルを下げるとともに、積極的に活用いただけるよう、操作研修や事例紹介を行いました

時期	タイトル	工夫内容
稼働直前	操作研修によるサポート	(検討課題・目的) - すべての先生が迷うことなく、日々ダッシュボードを円滑に操作し教育データの利活用ができる状態を目指した。 - ユーザーの円滑な操作に加え、ダッシュボードの利活用を促すためには、日々のデータが十分に蓄積されている環境が重要。データを着実に蓄積するため、以下の機能の利用を促進する必要があった。 - 心の健康観察 - 出欠連絡 - AARポータル - ScTN質問紙 (工夫内容) - ダッシュボード操作研修 - 実際のダッシュボード画面を先生方にご覧いただきながら、教育現場の日々の業務の場面を想定し、「どのような場面でどのように活用できるのか」をイメージしやすいように、具体的な活用シーンとともに操作方法の説明を行った。 - 各機能のメリットと事例紹介 - 各機能について単なる操作説明にとどまらず、活用メリットとすでに導入している自治体における実際の活用事例も紹介し、具体的な活用イメージを持っていただけたようにした。 - 現地とオンラインのハイブリッド形式でのサポート - 現地参加とオンライン参加を組み合わせたハイブリッド形式で実施。現地ではその場でサポートを行い、操作方法や運用に関する不明点を即時に解消できるよう対応。 - 研修動画の共有 - リモート研修の内容は録画を行い、後からいつでも視聴できるようにした。これにより、研修内容を振り返ったり、参加できなかった先生方にも内容を共有できる環境を整えた。

▼ダッシュボード研修



▼心の健康観察研修



(5) 現場での活用状況

日常的に入力・確認されるデータと、定期的に入力・確認されるデータそれぞれについて、活用ユースケースを設定し、実際の学校現場での運用を促しました

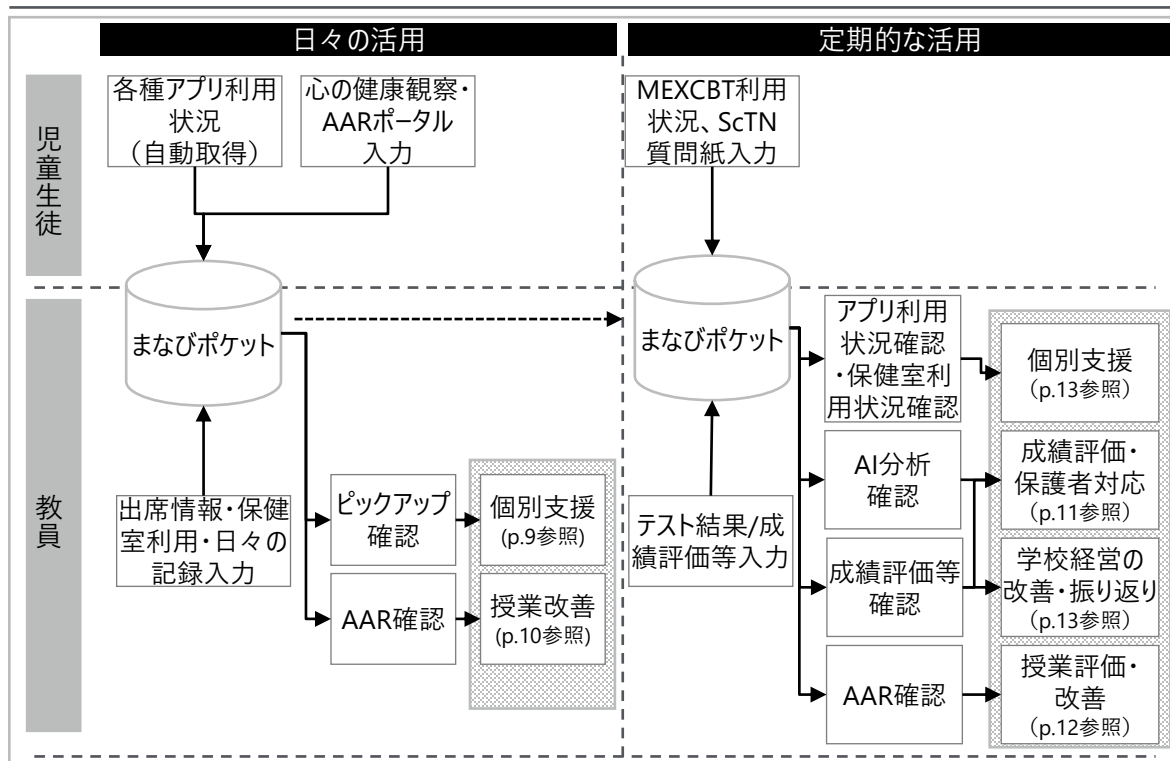
日常的入力：心の健康観察・AARポータル（児童生徒）、出席情報・保健室利用・日々の記録（教員）、各種アプリ利用状況（自動取得）等

定期的入力：MEXCBT利用状況、ScTN質問紙（児童生徒）、単元・定期テスト・成績評価・評定・通知表所見等（教員）等

日常的確認：出席情報、心の健康観察、ピックアップ（注意すべき特異な変化に関するアラート）、AARポータル（授業の振り返り）等

定期的確認：一定期間におけるAI分析、各種アプリの利用状況、AARポータル（単元レベルでの授業評価）保健室利用、単元・定期テスト結果等

業務フロー



検知課題・リスク、それらへの対応

- ・ 教員による日常的な教育データの活用が制度化・常態化しておらず、データ駆動型の教育改善文化が十分に醸成されていない。

⇒教員の日常的・定期的業務におけるデータ入力および確認作業の適切な業務内位置づけを確立し、併せて会議・委員会等におけるデータ利用の高度化・拡大を図る。

- ・ AI分析の有効性を担保するために必要なデータ群が十分に収集・蓄積されていない状況にある。

⇒AI分析の精度および粒度を向上させるための多元的データ収集体制の構築と、データ入力作業の省力化、ならびに当該作業の必要性に関する教職員・児童生徒双方の認知向上を図る。

(6) 効果検証結果 (ユースケース別) _朝、必要な情報をスピーディに確認して対応する

ピン留め機能により、気になる児童生徒の情報に迅速にアクセスし、声掛け等に活かされている一方で、データの十分性を確保するためには学校全体で入力を習慣化していくことが重要と考えられます

課題

これまで教職員や管理職が気にかけている児童生徒の様子を確認するには、直接様子を見る・担任教員に直接聞くことが主であり、物理的・時間的な限界と情報のタイムラグが課題であった。

解決策

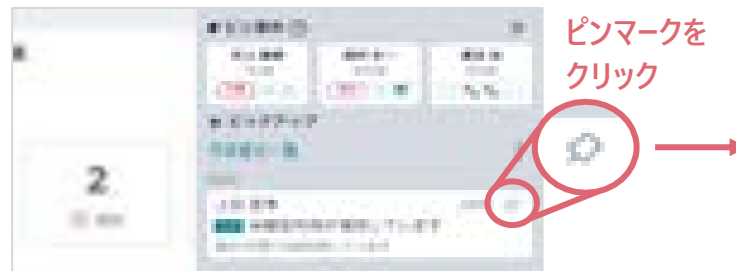
気にかけている児童生徒の最新の状態がいつでも確認できるため**情報収集の手間とタイムラグを削減できる**。
ダッシュボードで情報を持ったうえで会話できるため、質の高い情報共有ができる。

活用ユースケース

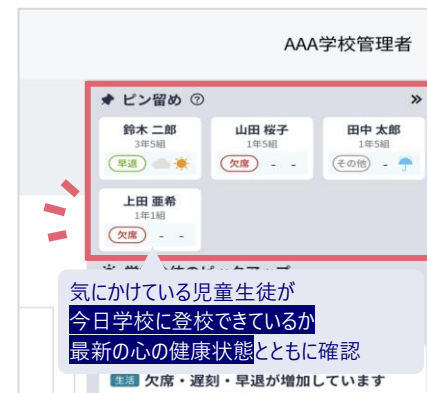
1 ピン留め機能を開く



2 気にかけた子をピン留めする



3 継続して経過観察を行う



効果・活用状況に係るユーザーコメント

- 朝の短い時間で生徒ピックアップを確認することで、生徒の見ていなかった状態や変化の把握ができる。
- 関係者間で連携した見守りが可能になったという声があった。

(ユーザーコメント)

- 朝の数分で、児童生徒の状態を把握し声掛けに活かしている。確認するのに1人1分もかからない。
- 自分でも生徒には毎日声掛けをしているが、保健室の先生や管理職の先生も結果を確認してくれているのがありがたい。

改善点に係るユーザーコメント・今後の方針

- タブレットを開けるのがめんどくさいという子がいて、毎日、心の健康観察をやるように伝えているがそうはいかない子もいる。入力を癖づけられるようなアイデアが欲しい。
- 「心の健康観察は校長先生も見てるから、普通とかだるいとかでもいいからコメント入れてね」と伝えると記入してくれる子が多くなった

【今後の方針】

- 担任の先生だけに頼るのではなく、学校全体で習慣化していくコツや事例を収集・検討する。
- 校長先生や他の先生も児童生徒の入力内容を見ていることを児童生徒に伝えるなど、様々な学校運用方法が考えられる。

(6) 効果検証結果（ユースケース別）_子どもたちの学習状況や学力・授業進捗をもとに授業を改善する

AAR機能により、授業ごとの児童生徒の理解度等を把握し、授業準備時に意識するようになったというコメントがありつつ、入力を定着させていく必要性についても言及がありました

課題 児童生徒が授業を理解できたか・授業目標が児童生徒に届いたかどうかは、テスト結果や直接児童生徒に聞くことでしか把握できず、**定量的に児童生徒の日々の学習理解度や満足度を把握するのが難しい**状況だった。

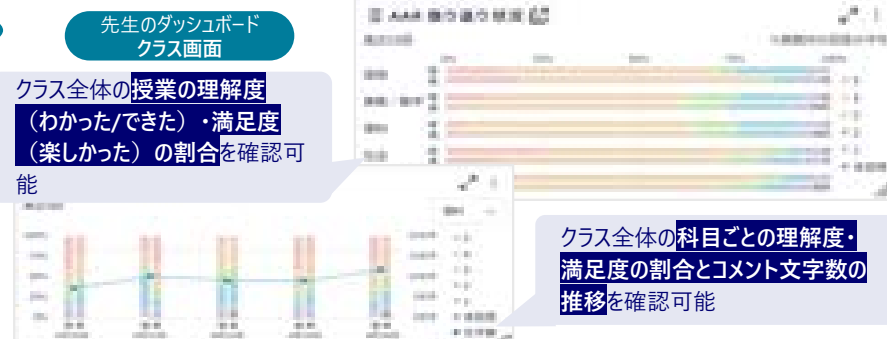
解決策 まなびポケットの時間割機能（AAR）から「**わかった・できた（理解度）**」「**楽しかった（満足度）**」と授業振り返りコメントを入力することで授業ごとの振り返りが可能。これらのデータをダッシュボード画面で確認することで、児童生徒が授業を受けている様子と見比べながら**データに基づいた日々の授業改善を行うことができる**。

活用ユースケース

1 授業の後、児童・生徒に授業振り返りを「時間割」（AAR）メニューから入力するよう促す



2 ダッシュボードのクラス画面・生徒画面から振り返り状況を確認し、授業改善に活用する



効果・活用状況に係るユーザーコメント

- 授業中の印象と児童生徒の理解度・満足度の結果を比較・把握することは、授業準備や生徒への声掛けに有効との声

（ユーザーコメント）

- ダラーっとして授業を受けている子もポジティブな振り返りコメントを書いていた。授業中に様子を見ていた時に受けていた印象とすごく違う。
- 授業準備の時に意識することがすごく変わった。「あの子がこんなこと書いてたな」というのを意識して準備をするようになった。
- 教科の評価をする時に授業に出席しているかは大事なポイントだが、今ほどこにも記録されていないので、AARを使っている。

改善点に係るユーザーコメント・今後の方針

- タブレットを開いて入力してというのは難しい。毎時間タブレット使った授業をやっていると思うが、鉛筆をもって書かせるのも大事にしたい。言わないとまだいれてくれないので、習慣化することが自分としての課題。

【今後の方針】

- 授業ごとの出席簿代わりに必ず最後にAARに入力してもらい、それを成績評価でも確認するなど「必ず毎回入力すること」の意味づけを教員・児童生徒ともに納得できる運用をすることで習慣化が図れる
- 教育委員会や管理職が教員に呼びかけを実施することで振り返りの定着につながる点を今後活用のコツとして紹介していく。

(6) 効果検証結果 (ユースケース別) _保護者対応や成績評価の前に生徒の情報を確認する

AIレポートは、児童生徒一人ひとりの情報を取り纏めて把握する手段として受け入れられており、
 今後はより具体的な情報を示せるよう、改善を検討していくことが必要と考えられます

課題

保護者から問い合わせがあり管理職や学年主任が対応をする必要がある場合や、教員が成績評価をする際など、**正確な情報を元にやりとりを行うため担任の教員からの丁寧な情報共有や点在している情報を一つひとつ確認する必要があった**。また、通知表に教員からのコメントを記載する際には**一人一人の頑張ったことを振り返り、文章をゼロから考える作業が大きな負担**となっていた。

解決策

ダッシュボードに、**連携済みのアプリ・システムの情報が集約され、その情報をもとに生成AIレポートが自動生成される**。そのため、各カードを読み解かず概要を把握した上で各カード詳細を確認することができるため、**情報収集の時間を大きく削減**できる。

また、**指定した期間の児童生徒の変化に対してどのようにフィードバックするのかの文例も提示する**ため、通知表コメントを作成する手間の軽減することができる。

活用ユースケース

1 生徒の情報を集めたい

〇〇さんのお母さんから
問い合わせだ



面談や成績評価のために、
生徒の情報が欲しい



2 生徒画面で基本情報やAIレポートを確認し、 必要に応じて個別のカードで詳細情報を把握する

生徒画面



AIに読み込ませるデータや、
データの取得期間を変更して、
何度でも再生成することが可能



3 面談ではデータを見ながら、 根拠に基づいて会話をできる



気になる項目がある場合は、
AIレポートの根拠となる
詳細情報を確認可能

効果・活用状況に係るユーザーコメント

- データ入力の手間なく自動で総括が生成される点は点在するアプリ・システムから情報を収集する手間や学期全体を思い出す負荷が減って業務改善につながるという声が挙がった

(ユーザーコメント)

- ダッシュボードの各カードを見て読み解くのは時間がかかるし、GeminiやCopilotはデータを投入するのもデータを整理して読み込ませるための稼働がかかるが、まなびポケットのAIレポートはデータが連携されていてその手間がない点がメリット。成績評価にはものすごく時間かけているので、すごい業務改善になる。

改善点に係るユーザーコメント・今後の方針

- 一人一人頑張った単元が違うので探してて評価コメントをつけているが、それがすごく負担になっている。4人分やってコメントつくだけでも1時間くらいかかるので、そこが楽になると嬉しい。
- 「授業を前向きに取り組んでいるよね、でも得点がふるわない教科は.....」という話をしたとして、教員側が「どの教科が振るっていないのか分かっていないといけない。(今のレポート内容は総括的に丸めて書かれているので) 具体的な教科名まで聞きたい。

【今後の方針】

- 生成AIレポートのプロンプトを調整し、学習に関してレポートする際には具体的な科目や単元を示すように改善を検討する。

(6) 効果検証結果（ユースケース別）_学校教育の成果を振り返り、施策を考える

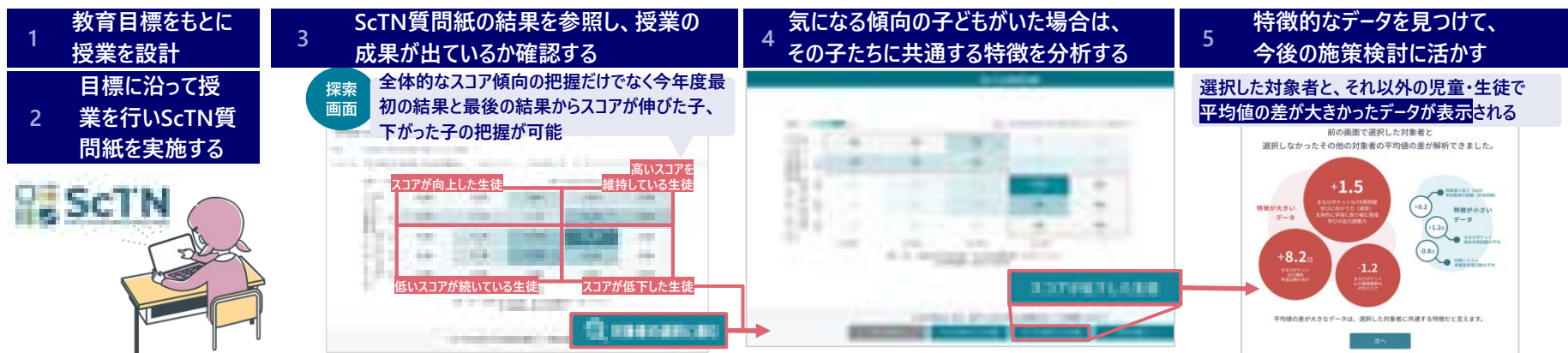
ScTN質問紙と実際の生徒の見取りを組み合わせることの重要性や、教科・単元・実施日と紐づけた結果確認に対するニーズ等についてコメントが挙がりました

課題 これまで多くの学校で「主体性の育成」「自己肯定感の向上」などの学校目標を掲げてきたが、その達成状況の把握は教員の所感や振り返りに依存するなど、定性的な評価が中心であった。目標と実態の関係が明確になりにくく、**取組の効果検証や改善策の具体化が十分に行えないという課題**があった。

解決策

ScTN質問紙は主体性や自己効力感などの非認知能力を定量的に把握でき、**学校目標を数値目標として設定・計測することが可能**となる。さらに、ダッシュボードにて**ScTN質問紙の結果だけでなく他データと掛け合わせて分析・示唆の獲得が可能**となるため、次の授業設計や児童生徒への支援・指導策の検討に繋げることが可能となる。**支援を感覚や経験に頼るのではなく、データに基づく仮説のもとで次の施策を検討**できるようになり、共通の特徴を把握することで、同様の傾向を持つ他の児童生徒への予防的な支援や、授業設計・学級経営の改善にもつなげることができる。

活用ユースケース



効果・活用状況に係るユーザーコメント

- 先生方の「体感（主観）との答え合わせ」や「具体的な声掛けのヒント」として実際の授業改善や声掛けに活かされた

（ユーザーコメント）

- 各児童に対する印象とScTNの結果を比較し、意外な差分が生じるケースも興味深い。データだけ見てもダメで、しっかり生徒を見とった上で『こうやってもっと伸びそう』と考えるのが大事。
- データで分布図が出てきたのが良かった。4月にScTNを通して『授業をどういう視点で伸ばしていけるか』という研修に使える
- 項目別に生徒の特性がみられる。これをみて『ダメだな』と思うのではなく、『どうやってやるか』データから先生が考えるのが大事。

改善点に係るユーザーコメント・今後の方針

- 最初と最後の結果の相関だけでなく、2月と3月の比較など、任意のタイミング（例えば11月末と12月半ばなど）での『伸び』が見られるといい。
- 教科や実施日で比較ができるようになるといい。小学校も教科担任制が多くなると、先生も自分の教科をみたくなると思う。
- 各項目がどの設問にリンクしているかわかりやすいとありがたい。選択肢ごとに色の濃淡が薄いので、より視覚的に違いが分かりやすいと良い
- スコアが低い項目を改善する手立てをAIに相談できると手間が省ける。

【今後の方針】

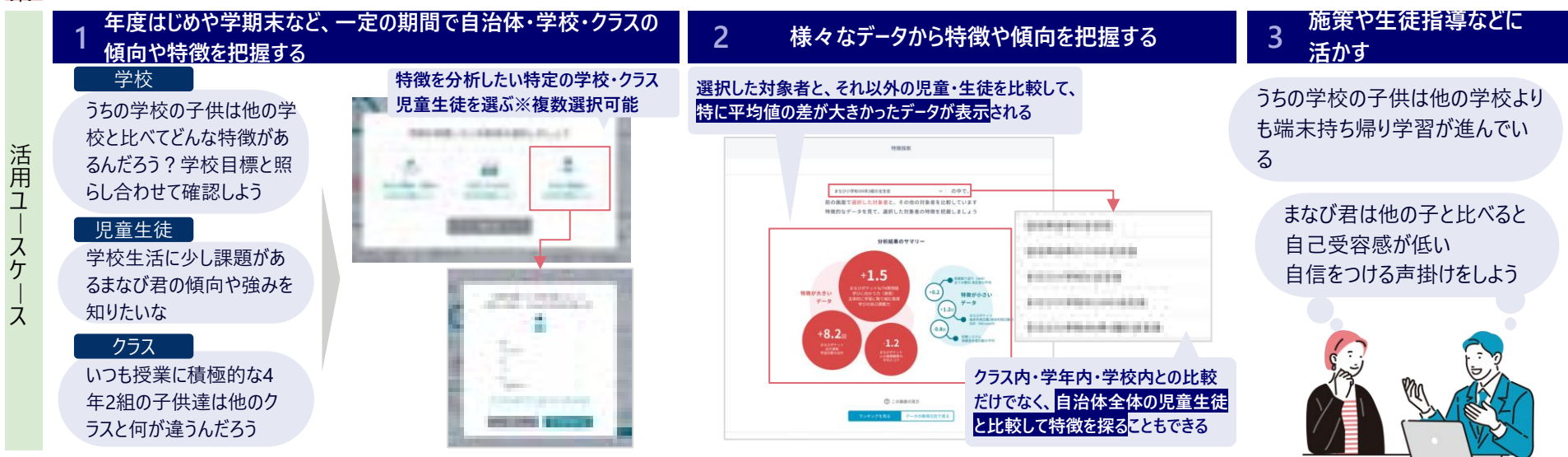
- ScTN質問紙の教科や単元との紐付け・任意実施日と紐付けた結果推移の確認など、実際の授業改善により活かしやすい形でデータを取得し、ダッシュボード上に可視化させていく。さらなる活用に向けては、誰でもScTN質問紙の質問項目を理解しながら結果を見て、次のアクションに移すための示唆や提案を行う。

(6) 効果検証結果 (ユースケース別) _学校・学級経営状況を振り返り、施策を考える

「特徴分析」機能の活用により、客観的に学校・学級の状況を把握できる点を評価する声が挙がっており、データの蓄積を進めることで、より有効な示唆を提示し得ると考えられます

課題 会議や指導の場で客観的なデータがなく、感覚ベースで話し合いが進むため、具体的な解決策に結びつきにくい。「ICT利用時間が長い」「欠席が多い」という事実だけを提示されても、「それがどう影響しているのか」が分からず、教員の具体的なネクストアクション（声掛けや指導）に繋がらない課題があった。

解決策 単一データの事実だけでなく複数データを掛け合わせ示唆をわかりやすく提示することで、教員の主観はもちろん、さらに客観的なデータをもとに様々な角度から議論を深めることができる。バイアスをなくして学校全体や自治体全体の施策検討、生徒支援や指導が可能となる。



効果・活用状況に係るユーザーコメント

- 「特徴分析」は教員の主観や経験則をもとにした児童生徒の理解を、データに基づく客観的な視点へと引き上げるツールとして有効という声があった。特に「学校平均」や「自治体全体」と比較でき、客観的な立ち位置が把握できる点が現場から評価された。

(ユーザーコメント)

- 自治体全体と比較でき、その生徒の鹿児島市の中での位置づけが分かったと大きい。『市の平均よりは上にいたい』とか、生徒のやる気が出る。
- レポートを見て、気になることがあったらデータを探索して詳しく見ていきたいと思います。データを見ながら根拠を持って、エビデンスに基づいて子供のことを話すことができる

改善点に係るユーザーコメント・今後の方針

- 探索機能は最近知りましたが、面白いですね。見やすいと思うんですが、『これを見て何をすればいいのだろう』と思った。僕たちが追えない膨大なデータが出ているので有効活用したい。

【今後の方針】事実をわかりやすく提示するだけでなく、その結果から読み取れる示唆や次のアクション提案までできることを目指す。特に、今後さらにデータが蓄積されれば、児童生徒の特性や傾向をもとに、より有効な示唆を提示できる想定。

(7) 今年度実証研究の総括・今後の展望

今年度実証では情報の集約やアクションに繋がるような示唆出しを行ったことで、データの効果的なユースケース創出に繋がりました。今後は、より具体的な示唆の提示や、児童生徒へのデータ還元によりさらなる教育データの利活用促進を図ることが求められます

1. 今年度実証研究の総括

- ・ 教育委員会・学校管理者・教員それぞれの役割でのダッシュボードの効果的な活用ユースケースは見えてきた。
- ・ 今後は生成AIの活用による具体的な示唆の提示による教育の質向上と、児童生徒へのデータ還元を目指す。

2. 今年度の実証成果

① バラバラなデータの集約による「情報収集負荷の削減」

これまで複数のシステムや教員の頭の中に点在していた情報をダッシュボードに一元化することで、朝の確認や面談前成績評価時などにおける教員の情報収集にかかる時間と負荷を削減することに貢献した。

② 事実の分かりやすい提示

生徒ピックアップや探索画面などで、教員の主観や見取りだけに頼っていた児童生徒の理解を補完する客観的な事実を分かりやすく可視化した。これにより、データに基づいた事実をすぐに把握し行動に移すことができるだけでなく、会議が「感覚的な意見交換」から「科学的な議論」へとアップデートされた。

③ 示唆の提示

可視化された事実に対して「AIレポート」が要因や対応策（示唆）を提示する機能を検証した。
現場からは「管理職と教員の対話のきっかけになる」「ベースをもとに通知表のコメントを考えることができる」などの評価を得た。
次の具体的なアクションに繋げるために生成AIを活用したデータに対する示唆や提案の提示は現場から求められている。

④ 児童生徒へのデータ還元

今回は児童生徒の学びの伴走者である教育現場の大人を支援するダッシュボードを検証した。
今後はデータを学びの主体者である児童生徒に還元していくことが求められている。

4-4. 山形県_実証研究報告

(1) 事業概要

山形県では、「勤務時間データの分析を通じた働き方改革の推進」を目的に、前年度より整備しているデータ連携基盤を活用し、勤務時間データ収集アプリ及び業務実態把握のためのダッシュボードの開発に取り組みました

背景・目的

■ 背景・課題

- 従前、授業でのICT活用に比べ、校務でのICT活用の遅れや学校間・教員間の取組格差が課題となっていた。
またシステム面でも、各種データは蓄積されているものの、境界分離型ネットワークによりデータ連携ができない状況にあった。
- そうした状況の中、第7次山形県教育振興計画では「教育DXを実現する」アクションのもと、指標(36)「教育データの可視化のシステムを活用した県立学校の割合」の目標達成を目指している。また令和6年度より「県立高等学校教育DX化促進事業」にて、校務効率化支援システム等の開発・運用を進めている。
- 令和7年1月からは、汎用クラウドツールをベースに、順次校内の各種申請等を電子化（デジタイゼーション）し、申請内容を各種システムに連携することで、学校日誌や出勤簿等の自動作成を実現している

■ 令和7年度実証の目的

- 以上の課題・背景を踏まえ、令和7年度の当実証研究では、「勤務時間データの分析を通じた働き方改革の推進」を目的として教育データ利活用に取り組むこととした。

構築システム概要

- 本実証では、令和6年度より推進している「県立高等学校教育DX化促進事業」にて、山形県が利用する汎用クラウド（Google Cloud）上に整備した校務支援システム（サービス管理機能を含む）と、データ連携基盤との連携によるシステム設計・実装を基本とする。
- 上記連携に加え、以下のアプリ・ダッシュボード等を構築する
 - ①校務支援システム（サービス管理・行事予定・教員情報）から必要なデータをデータ連携基盤に収集・蓄積するETL機能の開発
 - ②勤務時間データ収集アプリ（モバイル対応Webアプリ）の開発
 - ③業務実態を把握するためのダッシュボードの開発



(1) 事業概要 実施体制・スケジュール

今年度の実証に際しては、県立特別支援学校18校をパイロット校と位置づけ、日々の出退勤入力から勤務データ提出までの一連の取り組みと、効果検証を実施しました

実施体制	参画者	主な役割
	山形県教育局高校教育課 教育DX推進室 教職員課	・事業全体の統括・推進 ・教育委員会ダッシュボードの運用 ・効果検証の実施（アンケート・ヒアリング）
	Ddrive株式会社	・勤務時間データ収集アプリの設計・開発・運用 ・業務実態把握ダッシュボードの設計・開発・運用
	パイロット校 県立特別支援学校 18校	・全校展開に向けた準備・計画策定 ・月次の勤務データ提出状況の確認 ・データ連携基盤・校務支援システムの構築・運用保守 ・ヘルプデスク運営・マニュアル等作成 ・教職員による出退勤打刻・時間外業務入力 ・フィードバック・改善要望の提供 ・管理職によるデータ確認・月締め処理 ・ダッシュボードを活用した勤務実態の把握

スケジュール		8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	要件定義	要件定義・データ設計							
	開発・リリース		アプリ開発・DB連携基盤構築	アプリ修正・改善					
			ダッシュボード開発	ダッシュボード修正・改善					
	現場運用（準備含む）			パイロット校導入	パイロット校テスト運用	パイロット校本格運用			
	効果検証						アンケート・ヒアリング実施		
	成果報告							報告書等作	次年度準備

(2) 利活用対象データ項目

利活用対象データ項目、表示・集計方法については、教育DX推進室主導のもと、局内関係課や参画事業者との協議を経て決定されました

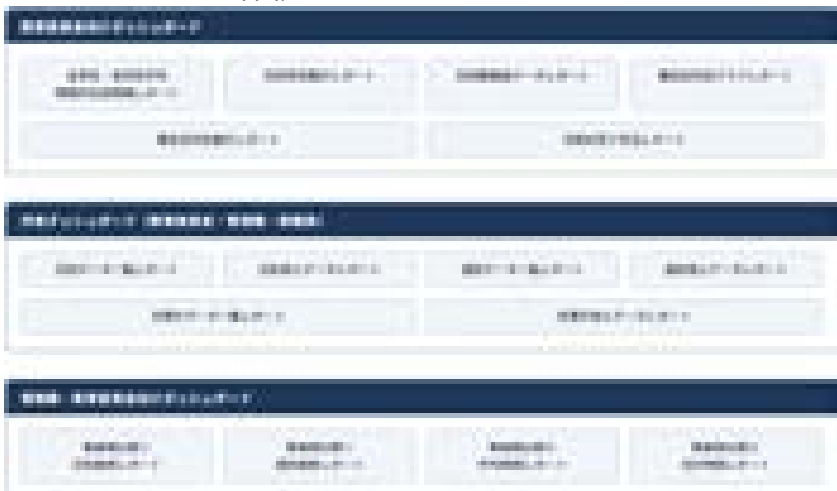
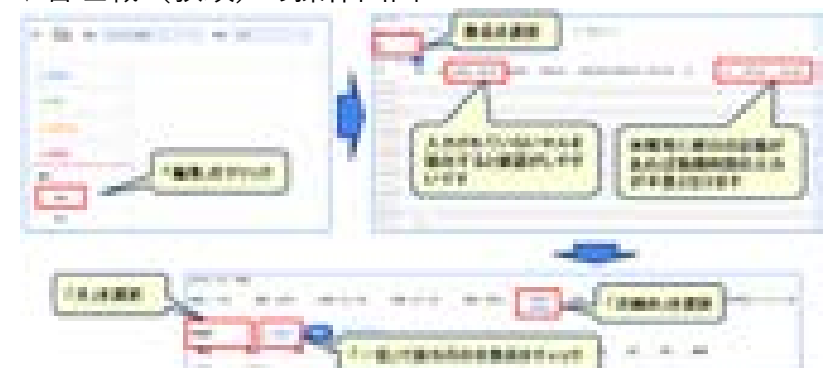
項目分類	項目名	データ型	取得頻度	連携元	表示先ダッシュボード・表示単位		
					管理職	教職員	教委
勤怠情報	出勤時刻	時刻型	日次（打刻時）	勤怠アプリ		○	
勤怠情報	退勤時刻	時刻型	日次（打刻時）	勤怠アプリ		○	
勤怠情報	時間外在校時間	数値型	日次（自動算出）	勤怠アプリ		○	
勤怠情報	時間外休憩時間	数値型	日次（入力時）	勤怠アプリ		○	
勤怠情報	時間外業務種別	選択型	日次（退勤時）	勤怠アプリ		○	
勤怠情報	出勤区分	選択型	日次	校務支援システム		○	
教職員属性	職名・役職	文字列型	年度初・異動時	教職員マスタ		○	
教職員属性	所属学校	文字列型	年度初・異動時	学校マスタ		○	
月次集計	月締め完了状況	ブール型	月次	校務支援システム		○	
アラート	80h超フラグ	ブール型	月次（自動）	BigQuery		○	

● データ項目定義を進める上での工夫・留意事項

- ・ 教育委員会（教育DX推進室）が主導し、局内関係課、Ddrive社と協議して項目を定義した。
- ・ 「働き方改革」の観点から、時間外在校時間の把握と業務種別の可視化に重点を置いた。
- ・ 既存の校務支援システム（服務管理）のデータ項目を参考に、勤怠アプリで追加取得すべき項目を精査した。
- ・ 時間外業務種別は、文科省の勤務実態調査の分類を参考に8区分（授業準備・教材研究、学習指導、生徒指導、校務分掌、部活動等、保護者・地域対応、会議・研修等、その他）を設定した。
- ・ 個人情報保護の観点から、ダッシュボード・データのアクセス権限を教職員/管理職/教育委員会で分離設計した。
- ・ モック画面でのレビューを複数回実施し、局内関係課の意見を反映して項目を調整した。

(3) 可視化システム・ツールにおける工夫 (1/2)

役割に応じてアクセス可能範囲をコントロールしており、管理職は自校教職員の勤務状況を把握することができ、把握した内容をシステム上で教育委員会へ報告可能となっています

タイトル	工夫内容	画面イメージ
役割に応じた、ダッシュボードのアクセス範囲制御	(検討課題・目的) 個人情報保護の観点から、教職員は自身のデータのみ、管理職は自校のみ、教委は全校を閲覧可能等、それぞれ必要なデータを適切な範囲で閲覧できる制御が必要だった。 (工夫内容) Googleアカウントに所属・役職情報を紐づけ、役割ごとのグループにダッシュボードの閲覧権限を設定した。また、Looker Studioのデータソースフィルタリングでアカウントの役割に応じて自動的にアクセス範囲を制御できるようにした。 - 教職員向け：個人日別/週別/月別データ、グラフ表示 - 管理職向け：自校教職員の比較レポート、月締め状況 - 教委向け：全校横断集計、学校別/職名別分析、月締め管理等	▼ダッシュボード全体構成 
労務管理報告の自動化	(検討課題・目的) 管理職から教育委員会への報告業務の効率化をする必要があった。 (工夫内容) 月締め処理をシステム化し、管理職の「月締め」操作で教育委員会への報告が自動完了できるようにし、従来のExcel作成・メール報告が不要な運用を整備した。	▼管理職（教頭）の操作画面 

(3) 可視化システム・ツールにおける工夫 (2/2)

管理職が、自校教職員の過重労働状況を早期発見できるように、平均時間外在校時間等の人数を分かりやすく可視化しています

タイトル	工夫内容	画面イメージ
教員の 過重労働を 早期発見 するための 表示項目設計	(検討課題・目的) 管理職による過重労働の早期発見を支援する必要があった。 (工夫内容) - 月・週ごとに、平均時間外在校時間、前月比、時間外在校時間区分ごとの人数等をわかりやすく可視化し、学校全体の勤務状況を把握できるようにした。 - 教員間の比較をグラフで可視化し、教員間の業務負荷の偏りがわかるようにした。 - 月別時間外在校時間が80時間超の場合、ダッシュボード上に視覚的フラグを自動表示し、管理職が速やかに対応できるようにした。	▼管理職向けダッシュボード画面（教職員の勤務状況） 

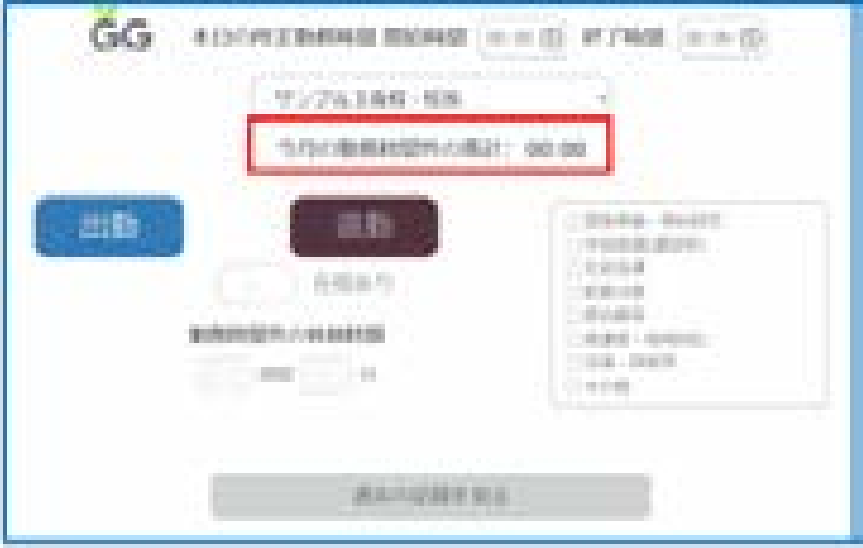
(4) 現場活用促進のための施策・工夫 (1/2)

教育委員会側で勤怠アプリURLのブックマークを自動配信することで、教職員の勤怠アプリへのアクセス負担の軽減を図りました

時期	タイトル	工夫内容
稼働直前	勤怠アプリの アクセス簡略化	(検討課題・目的) 教職員がアプリのURLを意識せず、日常的に簡単にアクセスできる環境を整備する必要があった。 (工夫内容) - MDM (モバイルデバイス管理) を活用し、教育委員会側で全校務用端末に勤怠アプリのURLをブラウザのブックマークとして自動配信し、教員が意識せずともブラウザのブックマーク一覧から「出退勤申告アプリ」にワンクリックでアクセス可能にした。 - 教員用iPad向けにショートカットアイコンの作成方法を周知し、ホーム画面から直接起動できるよう案内を実施した。 - その他モバイル端末からもアクセス可能とし、出退勤打刻の利便性を確保した。 

(4) 現場活用促進のための施策・工夫 (2/2)

教職員が日常的に自身の勤務実態を意識できるよう、勤怠アプリに「今月の勤務時間外の累計」を表示しています

時期	タイトル	工夫内容
運用中	アプリ画面上での超過勤務時間表示	(検討課題・目的) 教職員が日常的にダッシュボードを見に行く手間を軽減し、自身の勤務実態を自然に意識できる仕組みが必要だった。 (工夫内容) - 出退勤申告アプリのトップ画面に「今月の勤務時間外の累計」を表示し、教員が出退勤打刻のたびに自身の当月超過勤務状況を自然に確認できるようにした。 - ヘルプデスクサイトを公開し、マニュアル・問い合わせ窓口を集約してブックマークに設置した。 

(5) 現場での活用状況

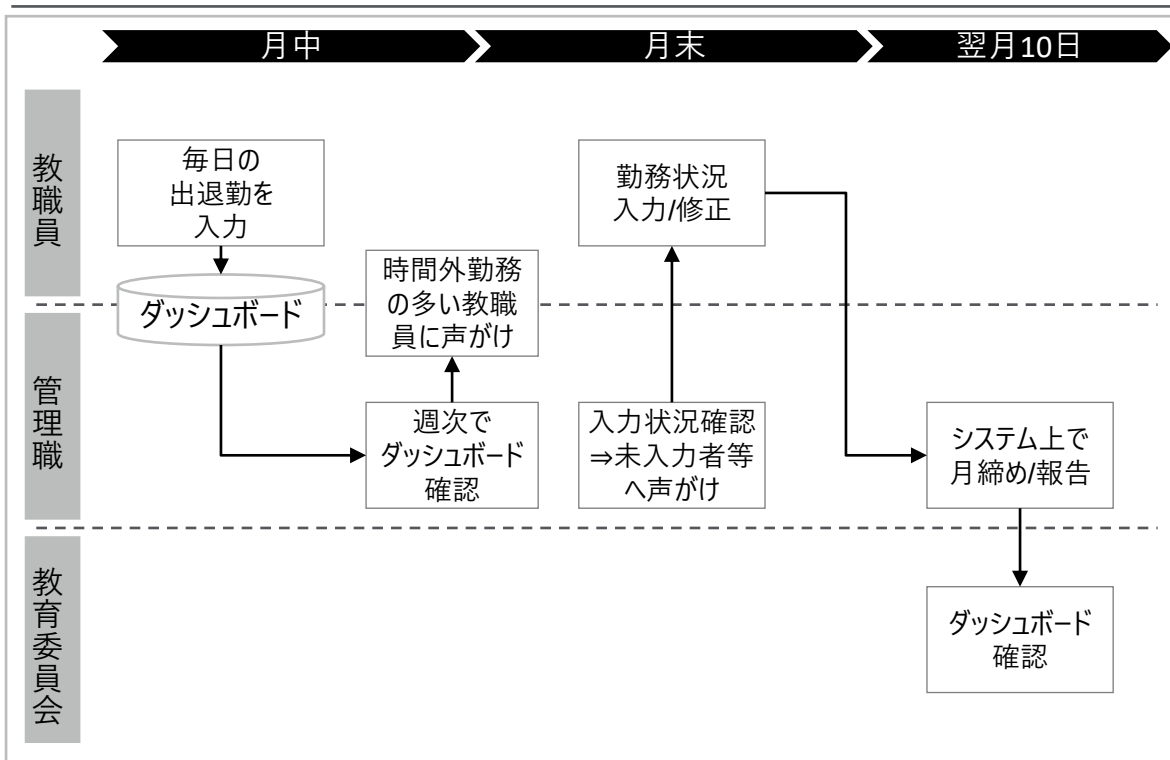
導入校では、教職員が日々勤務データをアプリ入力し、管理職が週次で更新されるダッシュボードを確認、月末にも入力状況を確認の上、月締めを行う運用が定着してきています

役割別の活用状況は以下の通りである。

- ・ 教職員：毎日出退勤をアプリで打刻する。
- ・ 管理職：ダッシュボードで週次で勤務状況を確認し、校務支援システムを使って月次で月締めを実施する。
- ・ 教育委員会：ダッシュボードで全校データを一括して把握する。

※従来は特別支援学校ではスタンドアローン端末1台での打刻→USBメモリでデータ移動→エクセル集計→メール報告という非効率な運用であった。

業務フロー



検知課題・リスク、それらへの対応

【検知課題】

①ダッシュボードは自ら見に行く必要があり、手間とを感じる教員がいる

→アプリ画面上に累計時間を表示して対応

②ダッシュボード更新が毎週月曜のため、リアルタイムの状況は確認不可

→ETLバッチ頻度の見直しを検討中

③打刻忘れ・誤入力の発生

→過去データ修正機能で当月内は自身で修正可能。
月締め前に管理職が確認

【今後の対応】

- ・ 高校での運用開始に向けた準備（校務支援システムとの連携調整）
- ・ ダッシュボード活用促進の研修・好事例の共有

(6) 効果検証結果

パイロット校の教職員を対象に効果検証を実施し、ダッシュボードの使いやすさ、得られた気づきの有無や、今後の超過勤務削減効果への見込みも含め回答を得ました

	アンケート・ヒアリング回答サマリ	考察・得られた示唆
検証観点① ダッシュボード データの 分かりやすさ	Q. ダッシュボードで可視化されたデータは分かりやすかったか 【管理職】 (n=24) とても思う＋そう思う：95.8% (87.5%＋8.3%) あまりそう思わない：4.2% 【本務教員】 (n=164) ※利用した教職員数 とても思う＋そう思う：85.9% (76.8%＋9.1%) あまりそう思わない：14%	- 管理職・教員ともにデータの分かりやすさは高評価を得ていることから、ダッシュボードによる視覚的な可視化（箱ひげ図、円グラフ、時系列推移）が有効に機能したと考えられる。 - 一方で、教員の14%は「あまり分かりやすくない」と回答している →PCに慣れていない教員向けに、レポートの表示項目やフィルター操作の簡略化、閲覧ガイドの充実が次年度の改善ポイントと考えられる
検証観点② 超過勤務に 関する気づき	Q. ダッシュボード/アプリで超過勤務状況への気づきはあったか 【管理職】 (n=24) 自校全体の課題への気づき 気づきがあった：87.5% →うち21名が具体的なアクションに繋がった 【本務教員】 (n=526) ※教職員全員 出退勤アプリでの気づき 気づきがあった：43.2% 【本務教員】 (n=164) ※利用した教職員数 ダッシュボードでの気づき 気づきがあった：50.6%	- 管理職の87.5%が気づきを得て、具体的なアクションに繋がった点は大きな成果といえる。特に「超過勤務が長い職員への声掛け」（90.5%）が最も多い。 - 教員のアプリでの気づきは43.2%に留まるが、ダッシュボード利用者では50.6%に上昇。自分のデータなので管理職に比べ気づきは少なくなる傾向はあるが、半数は気づきがあると回答。 →アプリの累計表示に加え、ダッシュボードの積極活用促進が重要
検証観点③ 超過勤務 削減効果 の見込み	Q. 超過勤務の削減効果が今後見込めると思うか 【管理職】 (n=24) ダッシュボード活用による削減効果 とても思う＋そう思う：58.3% 【本務教員】 (n=526) アプリ上での自身の状況表示による削減効果 とても思う＋そう思う：46.4% (4.2%＋42.2%) あまりそう思わない：45.4% まったくそう思わない：8.2%	管理職は58.3%が削減効果を見込む一方、教員は46.4%と温度差がある。教員の45.4%が「あまりそう思わない」と回答している →「データが可視化されただけでは勤務時間は変わらない」という教員と「変わる」という教員がほぼ半数ずつに分かれている。データに基づく業務改善施策（分担見直し・会議効率化等）と連動することで効果が見込める可能性は高いと考えられ、次年度は管理職主導のPDCAサイクル構築が取組の鍵となる。

(7) 今年度実証研究の総括・今後の展望

今年度実証では、管理職が毎月実施している教育委員会への報告業務の負担が軽減し、データ利活用の有効性が示されました。今後はさらに活用校を拡大し、働き方改革を推進するとともに、多様な生徒への支援・指導の実現に向けた機能を展開していく想定です

1. 運用課題への対応案

- ・ ダッシュボード更新頻度の向上（現在週次で更新しているが、日次更新への移行検討）
- ・ ダッシュボード活用促進のための研修・活用事例集の作成と校内共有
- ・ 入力状況の確認ができる機能や、打刻忘れ防止のためのリマインド通知機能の検討（未入力箇所が即座に把握できるようなマークの表示等）
- ・ 教員がダッシュボードを「見に行く」負担を軽減する仕組み（プッシュ型通知・メール配信等）
- ・ 校務支援システムとの連携（休暇管理や旅行管理等とのシステム連携）

2. 連携対象データ・ダッシュボード仕様のアップデート

- ・ 保健室来室・健康観察データ収集アプリの開発・連携（生徒の健康・心理状態把握ダッシュボード）
- ・ 行事予定データとの連携による繁忙期分析の高度化
- ・ 教員間比較レポートの充実（年代別・教科別・校務分掌別の分析軸追加）

3. 展開対象校の拡大と機能改修

令和8年度は、今年度実証の「勤務時間データの分析を通じた働き方改革の推進」に加え、「客観データの共有による多様化する生徒への的確な支援・指導の実現」にも取り組む想定

- ・ 働き方改革の推進：県立中学・高校42校で勤務時間記録アプリの全校展開（既存校務支援システムとの連携）
- ・ 多様化する生徒への的確な支援・指導の実現：保健室来室アプリを構築し、普通科高校数校でパイロット運用後、段階的に展開

4. 教育委員会としての総括

- ・ 校務支援システムとの連携により、教育委員会への報告業務の負担が大幅に軽減された。
- ・ 今後は、出勤簿・休暇管理・旅行管理等ともシステム連動し業務のさらなる効率化を図るとともに、行事予定や校務文書の属性データ、教員の働き方に関わる調査等の様々なデータをデータ連携基盤に集約することで、教員の働き方改革を支えるデータ分析の高度化につなげたい。

4-5. 効果検証報告

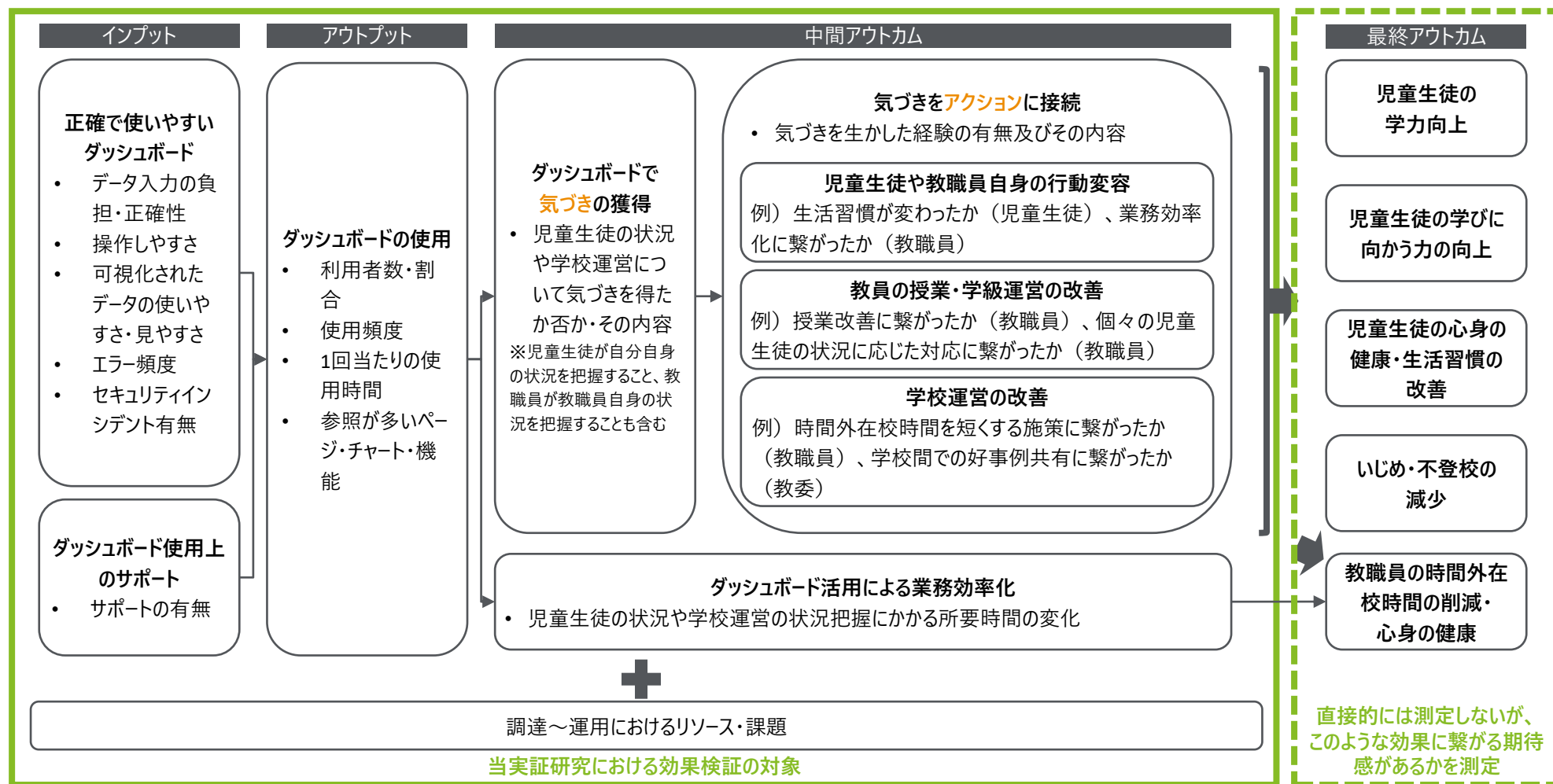
効果検証概要

効果検証として、アンケート・ヒアリングを実施しました

		山形県	長浜市	鹿児島市
モデル校		特別支援学校18校	- 中学校1校 - 小学校2校	- 中学校1校 - 小学校1校
教職員等 アンケート	対象	- モデル校18校（回答数534） - 教育委員会教職員課（回答数4）	モデル校3校（回答数35）	モデル校2校（回答数8）
	期間	1月下旬～2月上旬	1月下旬～2月上旬	2月上旬～中旬
教職員等 ヒアリング	対象	- モデル校2校（特別支援学校 / 教頭・教諭） - 教育局教職員課（ツール利用部署） - 教育局高校教育課 教育D X推進室（本事業担当部署）	- モデル校3校（中学校1校・小学校2校 / 教頭・教諭・養護教諭） - 教育委員会教育指導課（ツール利用部署） - 教育委員会教育改革推進課（本事業担当部署）	- モデル校2校（中学校1校・小学校1校 / 校長・教頭・教諭） - 教育委員会教育DX担当（本事業担当/ツール利用部署）
	期間	2月中旬	2月中旬	2月中旬

ロジックモデル

以下のロジックモデルに沿って、効果検証を行いました



サマリ（実証結果）

一部では、ダッシュボードの能動的な活用は限定的であるものの、閲覧層では気づき・改善のためのアクションに繋がっていました

1. ダッシュボードを活用しているかどうか、効果的な教育活動や働き方改革に向けて、意図的にダッシュボードを活用しているかどうかは、実証自治体や職種によって異なる

- 山形県の学校管理職では、在校等時間の状況を踏まえて対策するために使用している層は限定的であった。学校管理職・教職員課ともに、能動的に働き方改革に向けて活用している様子は見られなかった
- 長浜市では、学校管理職等においては、児童生徒の状況把握のために、能動的に使用している層が多い一方、その他教職員においては、受動的な使用が一定数存在した
- 鹿児島市では、いじめ・不登校予兆への早期対応をはじめ、学校管理職・教諭ともに能動的に使用している様子が見られた

2. しかし、ダッシュボードを活用している教職員・教育委員会職員においては、多くの場合、ダッシュボードを踏まえた何かしらの気づき・改善のためのアクションに繋がっている

- 山形県の学校管理職では、ダッシュボードを踏まえて、課題の把握や、教職員へのヒアリングに繋がった。教職員課では、より積極的な活用はこれからだが、超過勤務が長い教職員に関して学校への声かけには繋がっている
- 長浜市では、学習関連のデータによる気づきは限定的であった一方、生活関連（心の健康観察）は、特に学校管理職において、児童生徒の状況の把握、それを踏まえた児童生徒や教職員への声かけ・サポート、学校や学年での相談に繋がっていた
※ただし、その他教職員においては学習関連も生活関連も、気づきは限定的であった
- 鹿児島市でも、学習関連のデータによる気づきは限定的であった一方、生活関連（心の健康観察）は、支援が必要な児童生徒への気づきや、それを踏まえた児童生徒への声かけ、詳細情報の確認、関係者との協議に繋がっていた

サマリ（改善の可能性）

活用フローの確立や、主体・目的に応じたデータの見せ方や更新頻度には改善の余地があります

3. より効果を上げるために、既存の業務フローを踏まえた活用フローの確立が必要である

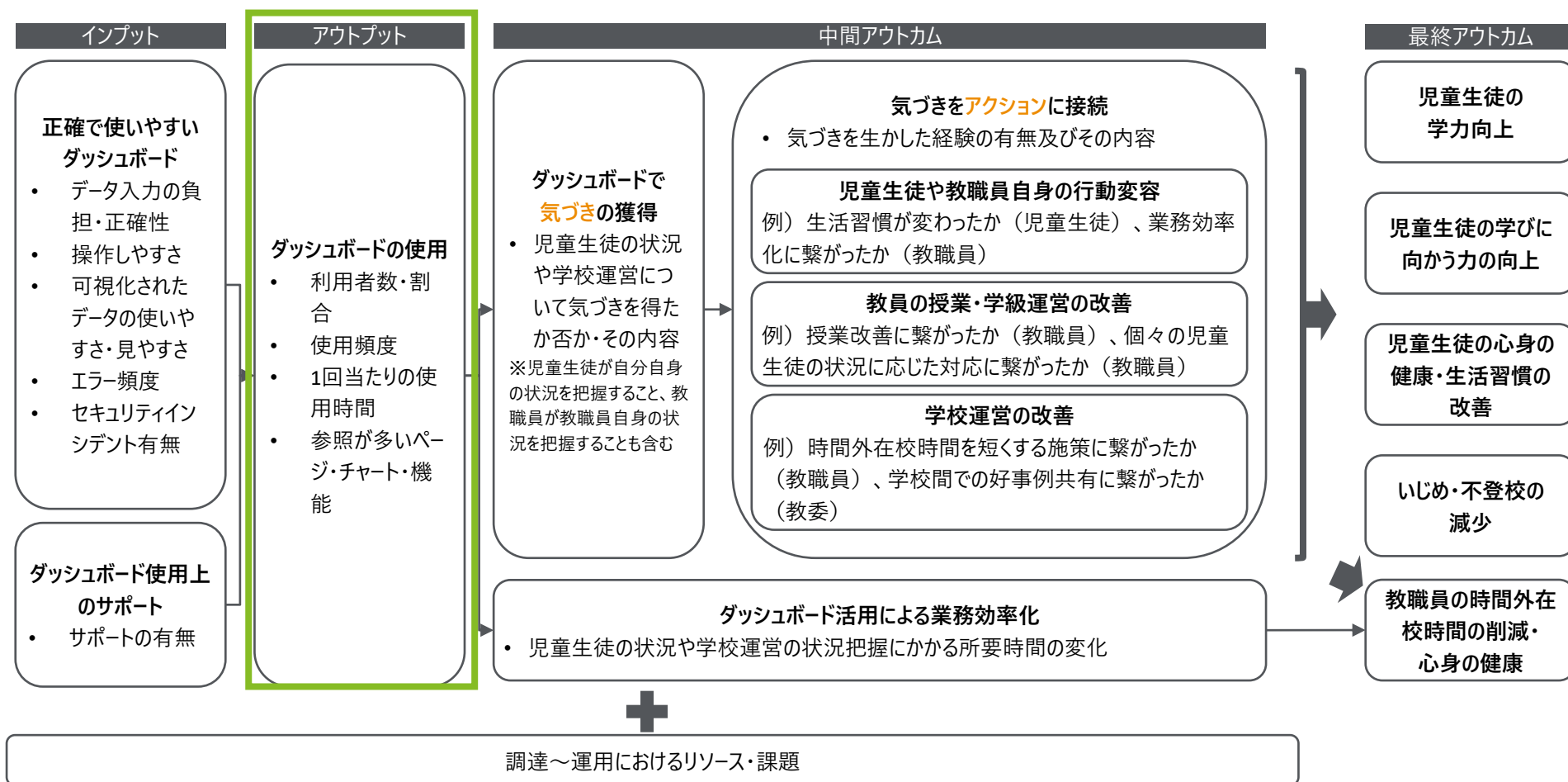
- ・ 特に山形県・長浜市において、既存の業務フローとダッシュボードがかみ合っておらず、活用しきれていない様子がヒアリングから窺えた
- ・ 山形県においては、既存の打刻確認という業務をダッシュボード上で行えるようにする、長浜市においては、既存の健康観察と一緒に心の健康観察も見られるようにする等、既存の業務フローと組み合わせて活用フローを確立することが有効ではないかと示唆された
- ・ 長浜市においては、教職員間での情報連携を支援し、チームとして児童生徒を見守るためのツールである一方で、教職員間でどのように活用していくかの共通認識がないため、活用フローについて教職員間で共通認識を持つ必要性が示唆された
- ・ 活用フロー確立においては、教職員間でデータを踏まえて検討する場を設ける、ツール担当者を置く、教育委員会から活用フローを明示することも必要であることが示唆された
- ・ また、長浜市・鹿児島市においては、閲覧までのステップをできる限り短くすることの必要性もアンケート・ヒアリングにおいて指摘された

4. 主体・目的に応じたデータの見せ方や更新頻度に改善の余地がある

- ・ 山形県においては、業務改善について踏み込んで検討するために、追加の属性情報を踏まえて分析を行うことや、勤務状況の取り方を見直すことが有効ではないかと示唆された
- ・ 長浜市においては、教育委員会では学校ごとに比較したい、学校管理職ではクラスごとに比較したい、担任では児童生徒一人ひとりの状況を一目で見られるように表にしたいといった、主体に応じてデータの見せ方を変える必要があることが示唆された
- ・ 加えて、長浜市においては、心の健康観察は毎日見たいが、デジタル学習ツール使用状況はやや長いスパンで分析したいといった、データや目的に応じて見せ方を変える必要性も示唆された
- ・ 鹿児島市においては、授業振り返りデータの活用が推進されつつあるが、意味のあるデータとするためには、教職員がデータ利活用のイメージを持つことや、児童生徒への指導・支援が必要なことが分かった

ロジックモデル

アウトプットに関する各自治体の検証結果について、次ページ以降掲載しております



ダッシュボードの閲覧頻度

それぞれ、データの更新頻度に合わせた閲覧層が多い結果となりました

ダッシュボードを導入開始から現在まで、平均してどれくらい閲覧しましたか（単一回答）

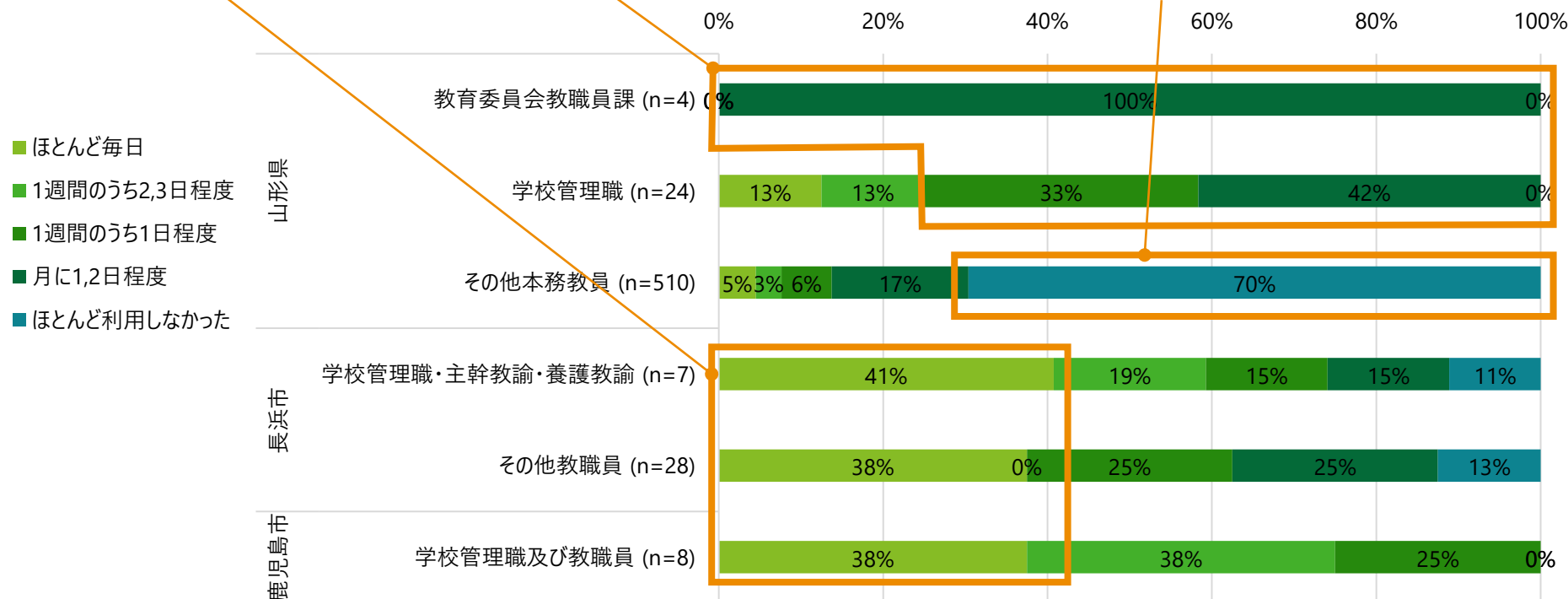
長浜市・鹿児島市については、日次更新のダッシュボードであり、その頻度での閲覧層が多い

山形県については、週次～月次更新のダッシュボードであり、学校管理職・教職員課では、その頻度での閲覧層が多い

山形県のその他本務教員向けダッシュボードは、まだ周知がされてから日が浅く、閲覧した層は少ない

※ヒアリングでは、自分の働き方に課題を感じていないため、見ない / 出出勤アプリ上の超過勤務表示についても、見ていないという声が聞かれた

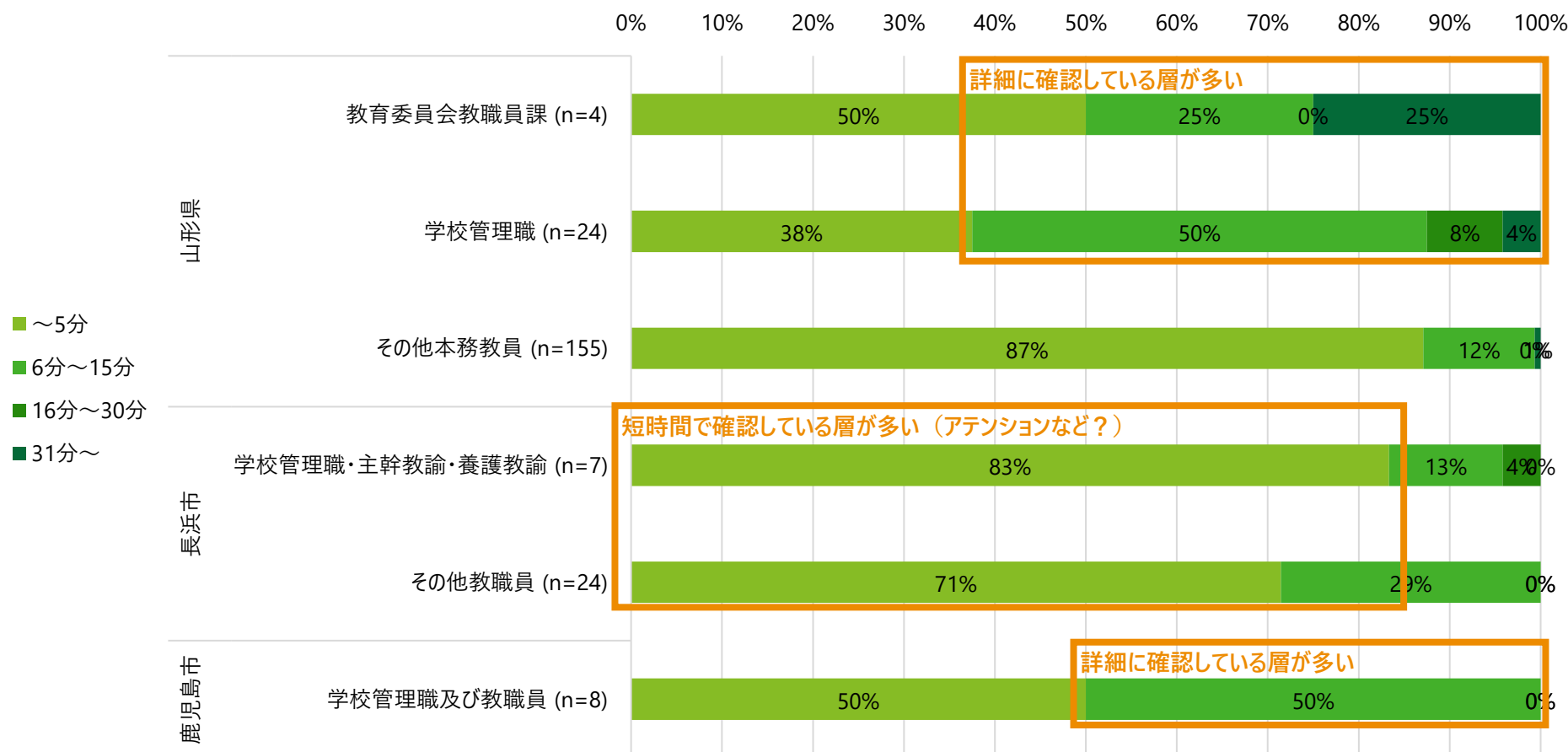
▶現時点では特支のみのため他校種に展開すると、異なる意見が出てくるかもしれない



ダッシュボードの閲覧時間

山形県・鹿児島市のダッシュボードは6分以上時間を取って確認している層が多い一方で、長浜市では5分以内の短時間で閲覧している層が多い結果となりました

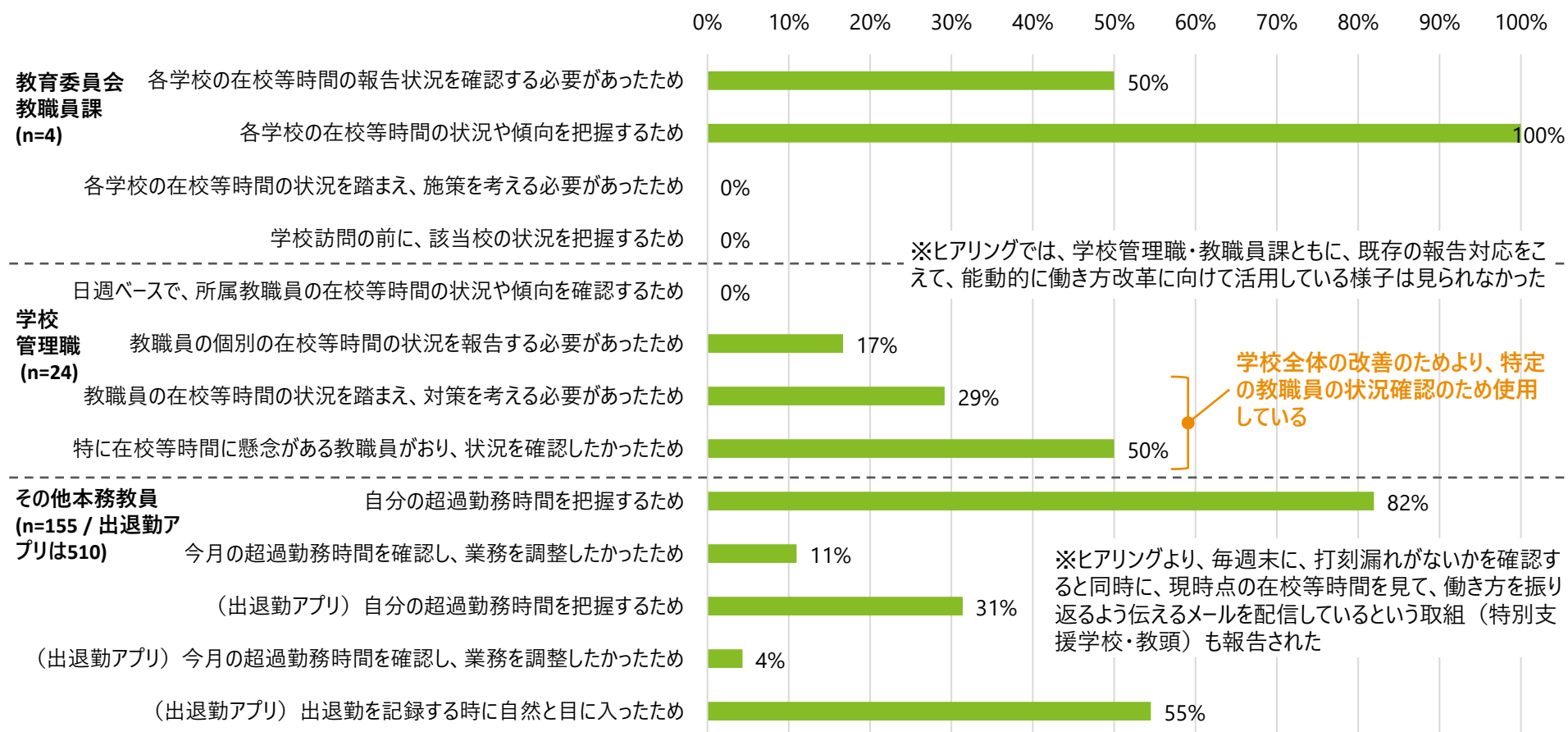
1回あたりどれくらいの時間を情報の確認に費やしましたか（単一回答 / 母数は閲覧人数）



ダッシュボードの閲覧きっかけ – 山形県

山形県では、学校管理職では、特定の教職員の状況確認のためにダッシュボードを閲覧している層が一定数いた一方で、学校全体の改善に向けて使用している層は限られました

どのようなきっかけでダッシュボード/出退勤アプリ上の超過勤務表示を閲覧しましたか（複数回答）



ダッシュボードの閲覧きっかけ – 長浜市

長浜市では、学校管理職等においては能動的に使用している層が多かったですが、その他教職員では受動的な使用が一定数確認されました

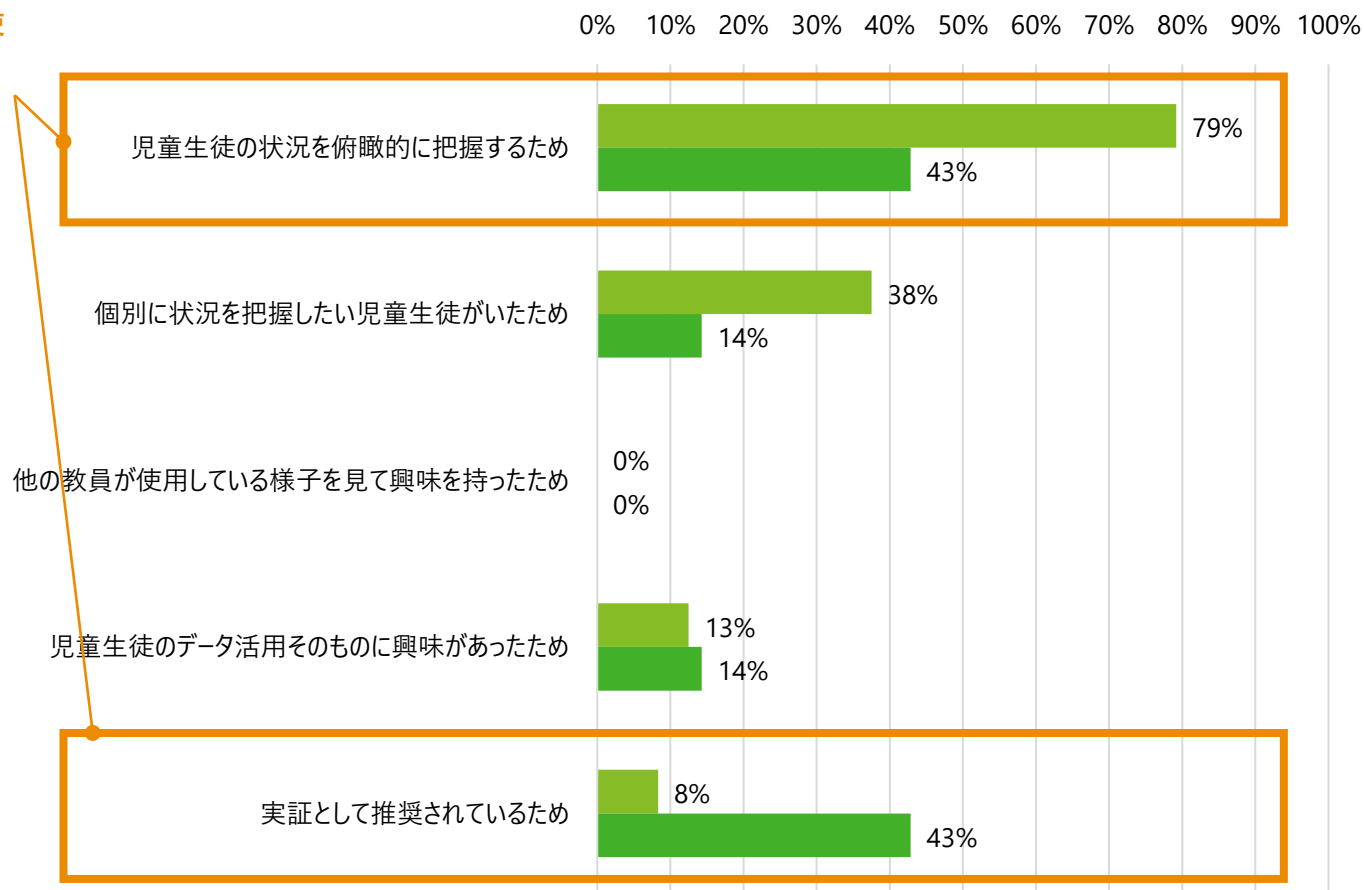
学校管理職等においては、児童生徒の状況把握のために、能動的に使用している層が多いが、その他教職員においては、受動的な使用が一定数存在する

※ヒアリングにおいては、ダッシュボードの活用が各教職員に任せられており、教職員間で、どのように活用するのか（誰が、いつ閲覧して、閲覧した結果、どのような行動に移すのか）の共通認識がないことが窺えた

■ 学校管理職・主幹教諭・養護教諭 (n=7)

■ その他教職員 (n=24)

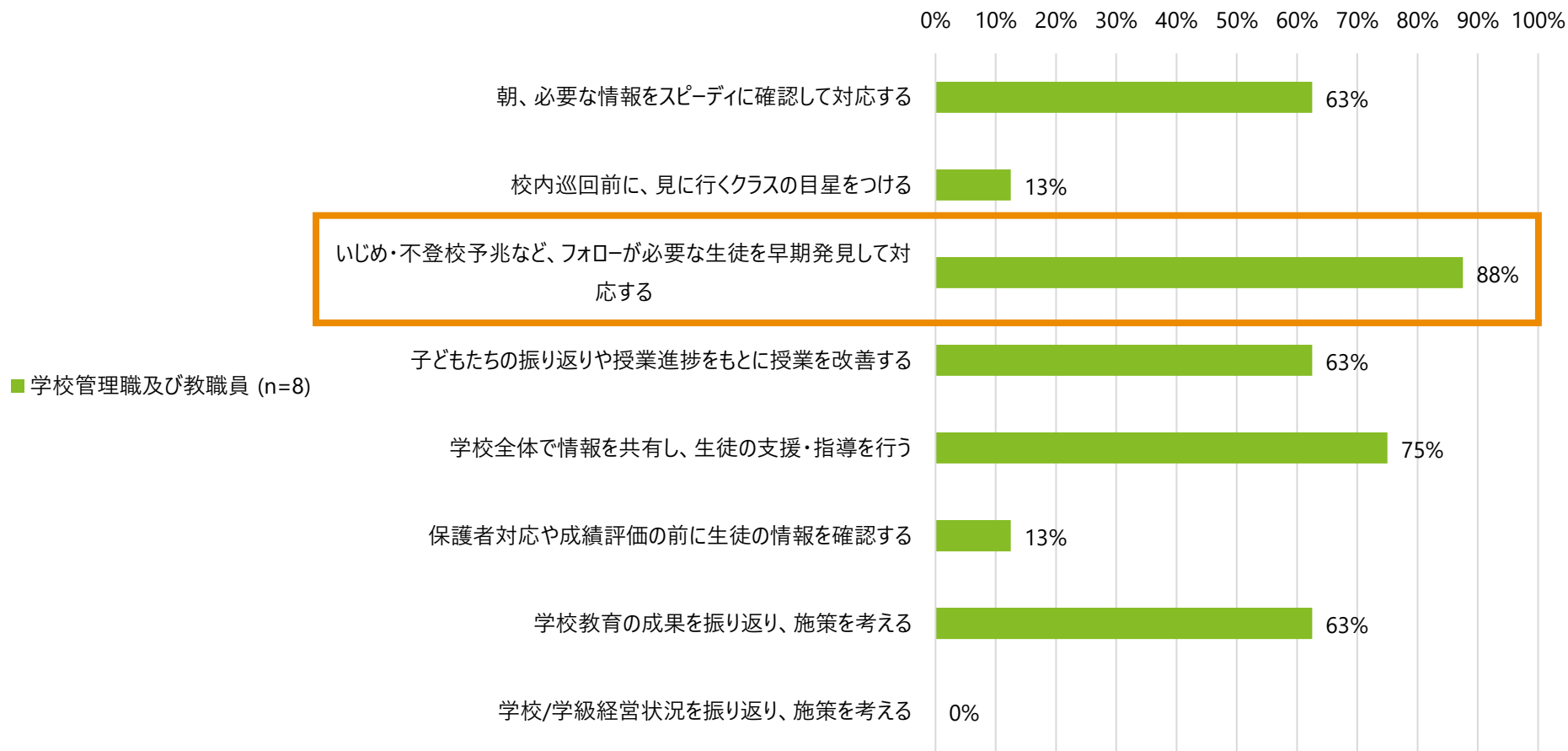
どのようなきっかけでダッシュボードを閲覧しましたか（複数回答）



ダッシュボードの閲覧きっかけ – 鹿児島市

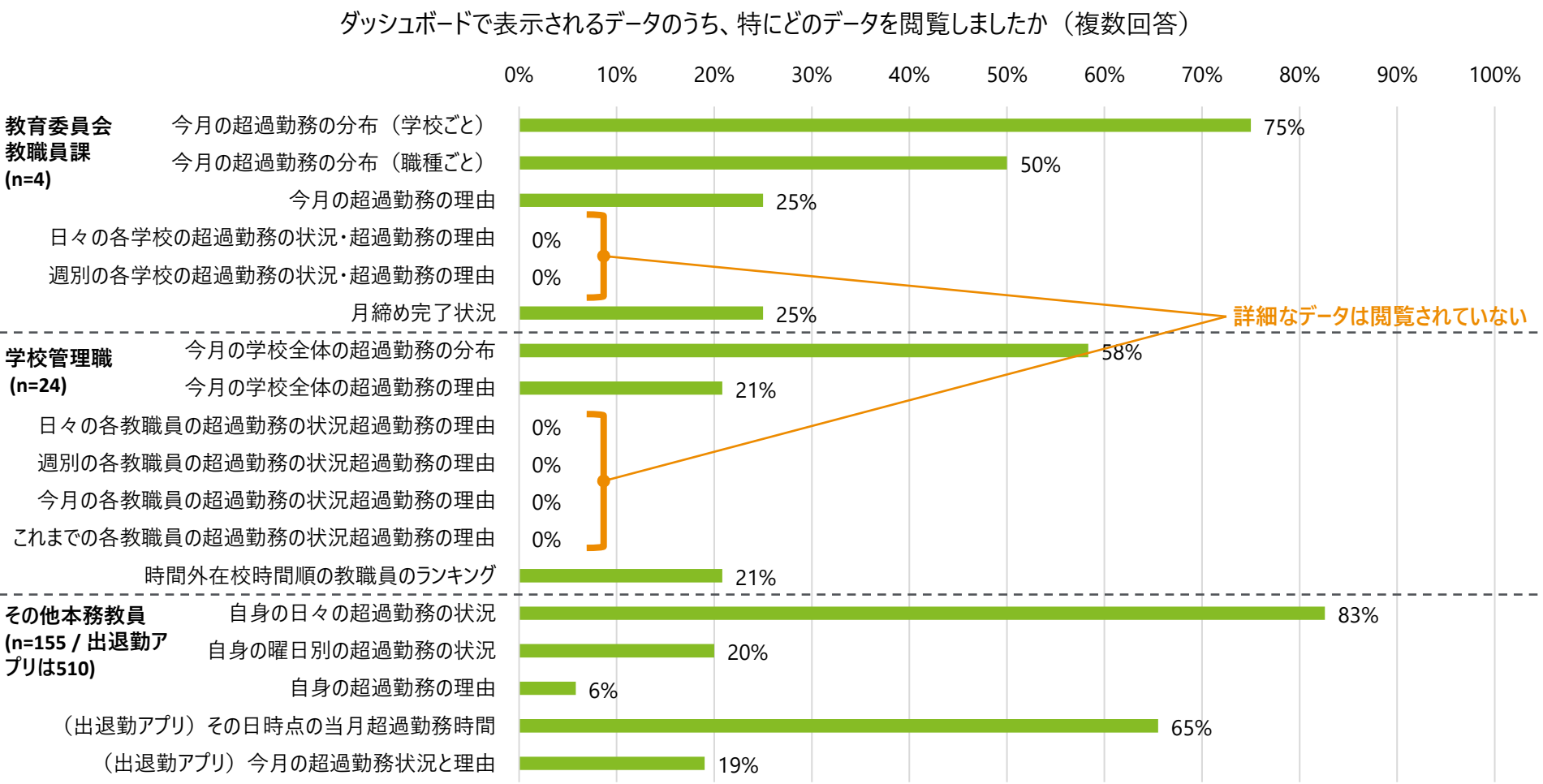
鹿児島市では、いじめ・不登校予兆への早期対応に使用している層が多かったです

どのようなきっかけでダッシュボードを閲覧しましたか（複数回答）



閲覧が多かったデータ – 山形県

山形県のダッシュボードについては、詳細のデータは閲覧されておらず、学校全体の超過勤務状況を概観するのに使用されていることが示唆されました



閲覧が多かったデータ – 長浜市

長浜市では、短時間でアテンションを見る層が多いことが示唆されると同時に、学習データより生活データを見る層が多いことが分かりました

ダッシュボードで表示されるデータのうち、特にどのデータを閲覧しましたか（複数回答）

ヒアリングより、**短時間でアテンションのみを見るという使用が主流**であることが分かった

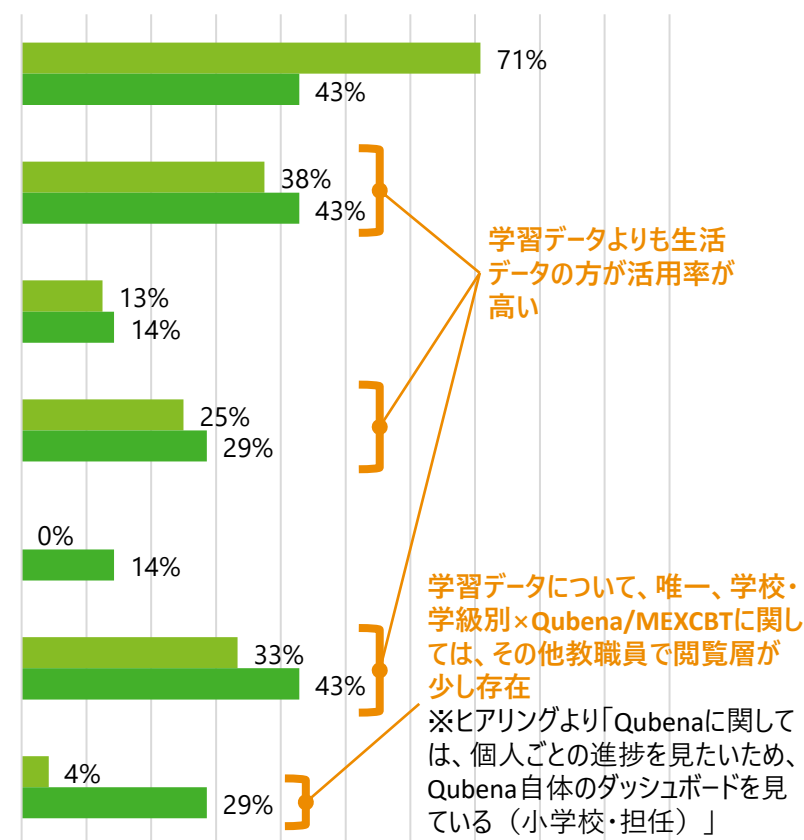
■ 学校管理職・主幹教諭・養護教諭 (n=7)

■ その他教職員 (n=24)

ヒアリングより「家庭学習については日々というより、家庭学習週間中・それ以外で比較したいが、**長期のデータを学年別に簡単に比較できる形になっていない**（小学校・教頭）」

- アテンション機能（朝食・睡眠・心の状態・家庭学習等）
- 児童生徒別の日別回答データ（朝食・睡眠・心の状態といった児童生徒が入力する「生活習慣」に関して）
- 児童生徒別の日別回答データ（家庭学習といった児童生徒が入力する「学習習慣」に関して）
- 学校・学級別のグラフ（朝食・睡眠・心の状態といった児童生徒が入力する「生活習慣」に関して）
- 学校・学級別のグラフ（家庭学習といった児童生徒が入力する「学習習慣」に関して）
- 学校・学級別のグラフ（気づきや健康観察といった先生が入力する児童生徒の様子に関して）
- 学校・学級別のグラフ（QubenaやMEXCBTといった学習に関する記録について）

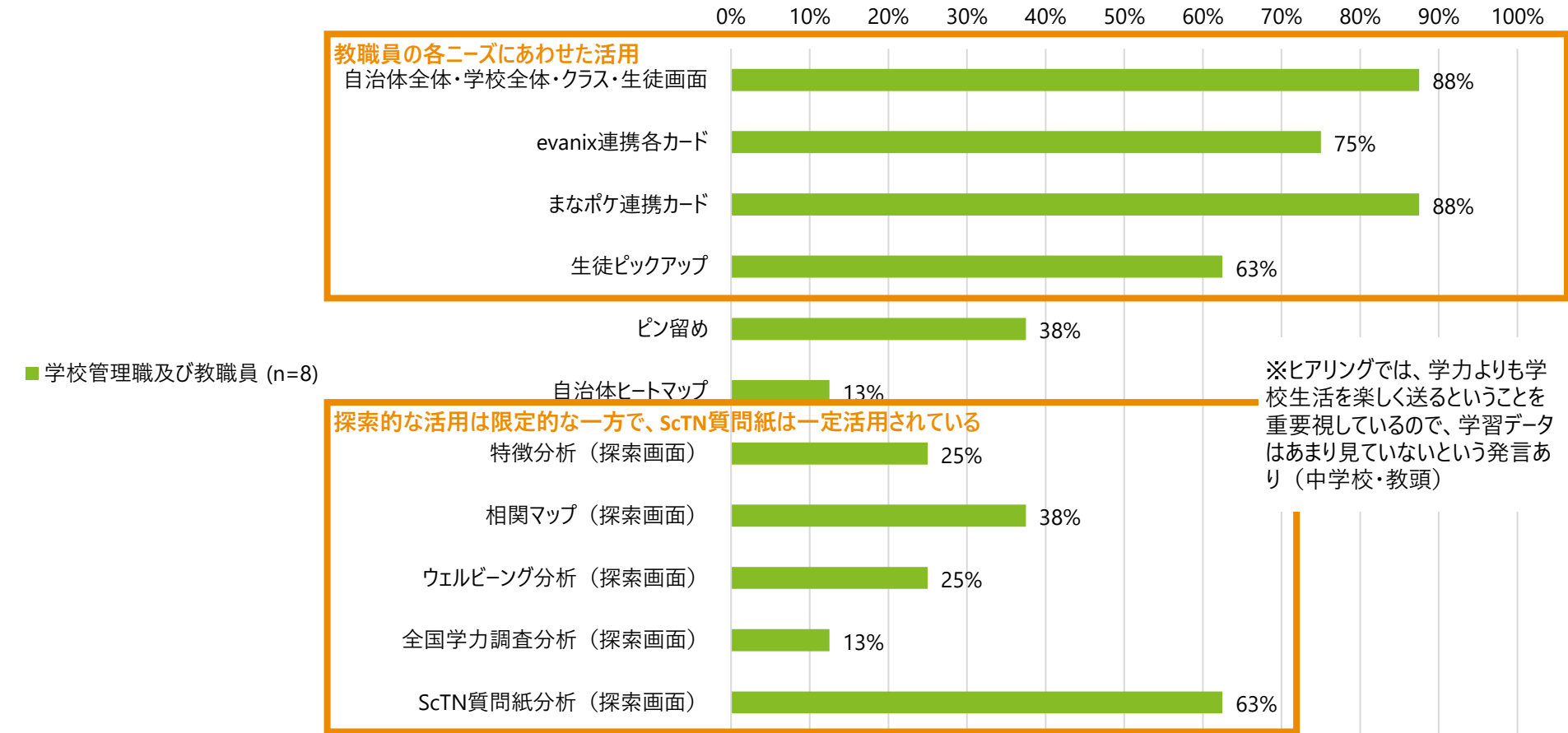
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



閲覧が多かったデータ – 鹿児島市

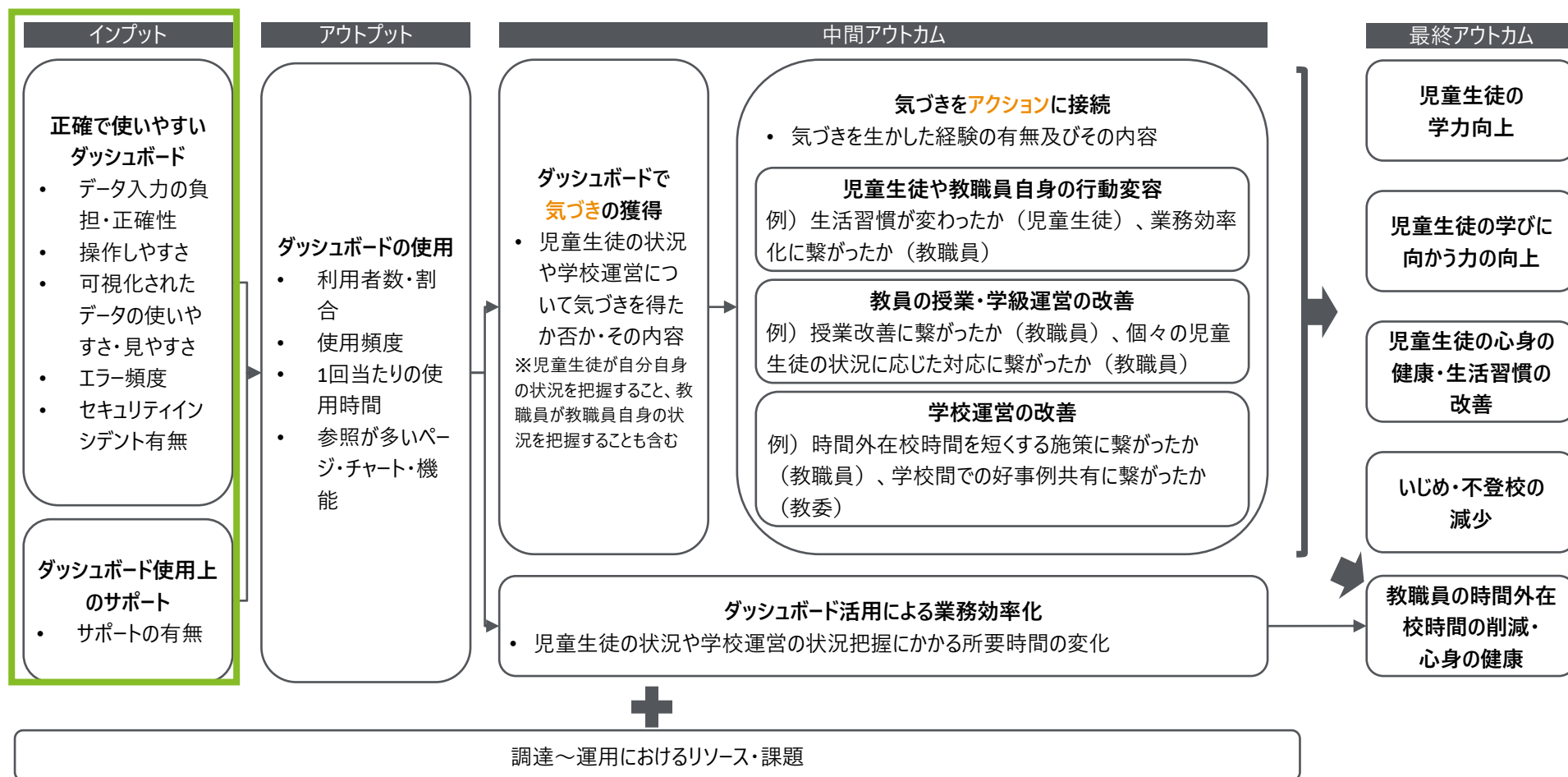
鹿児島市では、「連携カード」等や、ScTN質問紙が一定活用されています

ダッシュボードで表示されるデータのうち、特にどのデータを閲覧しましたか（複数回答）



ロジックモデル

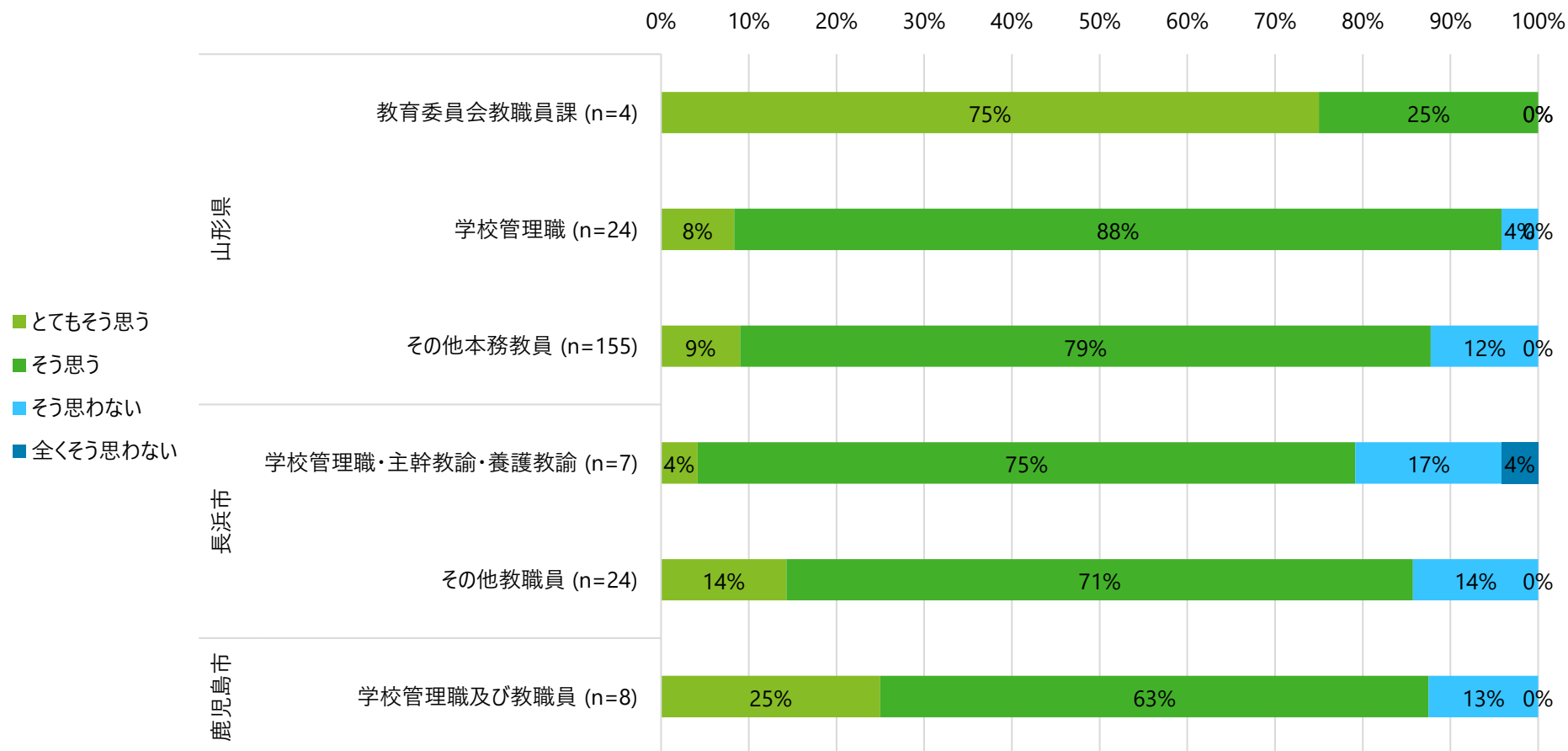
インプットに関する各自治体の検証結果について、次ページ以降掲載しております



ダッシュボードの分かりやすさ

どの自治体でも、概ねダッシュボードで可視化されたデータは分かりやすかったという意見でした

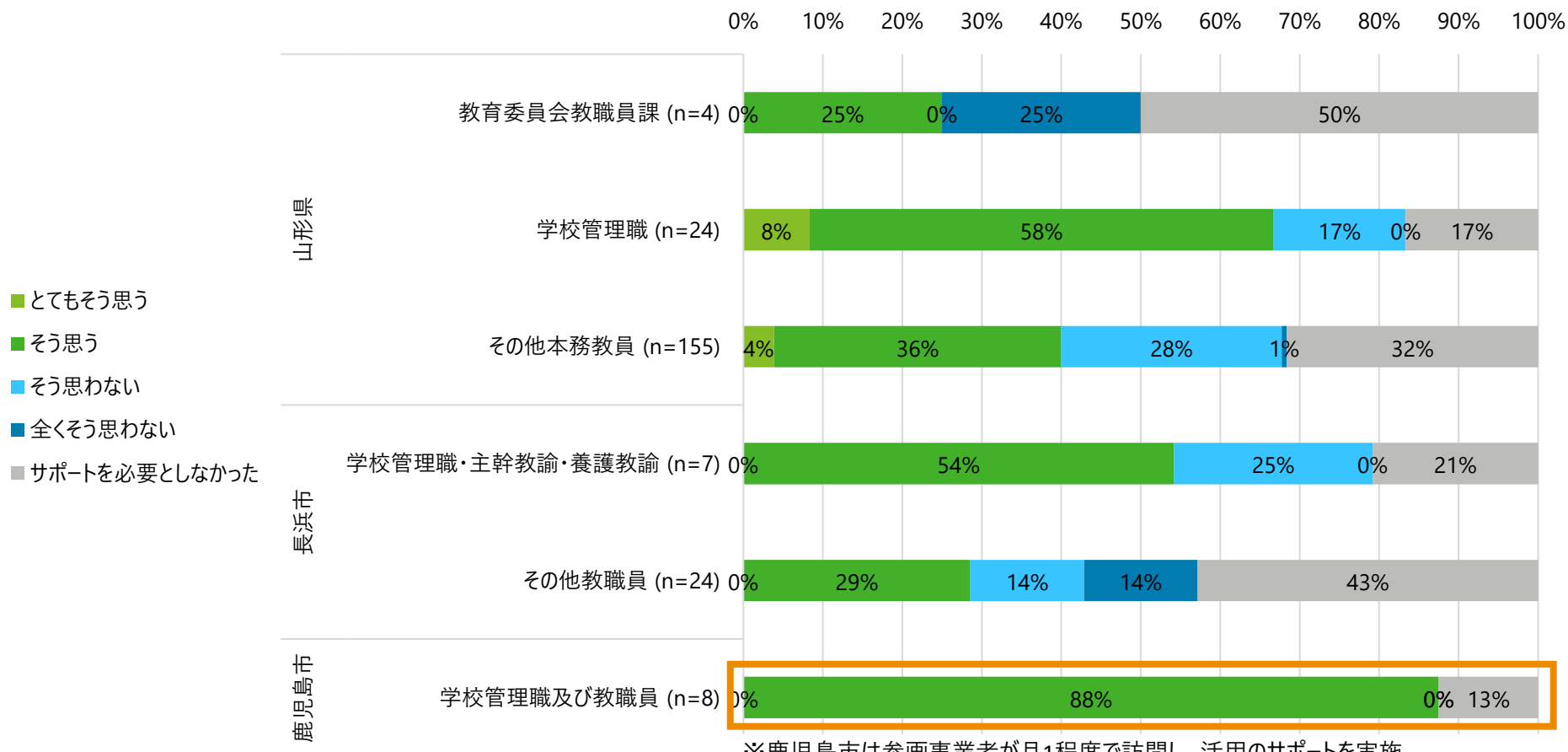
ダッシュボードで可視化されたデータは分かりやすかったですか（単一回答）



サポートの有無

割合としては限定的ではありますが、山形県・長浜市では使用に当たって必要なサポートを受けられなかった層も存在しました

ダッシュボードを使用するにあたり、必要なときにサポートを受けることができましたか（単一回答）

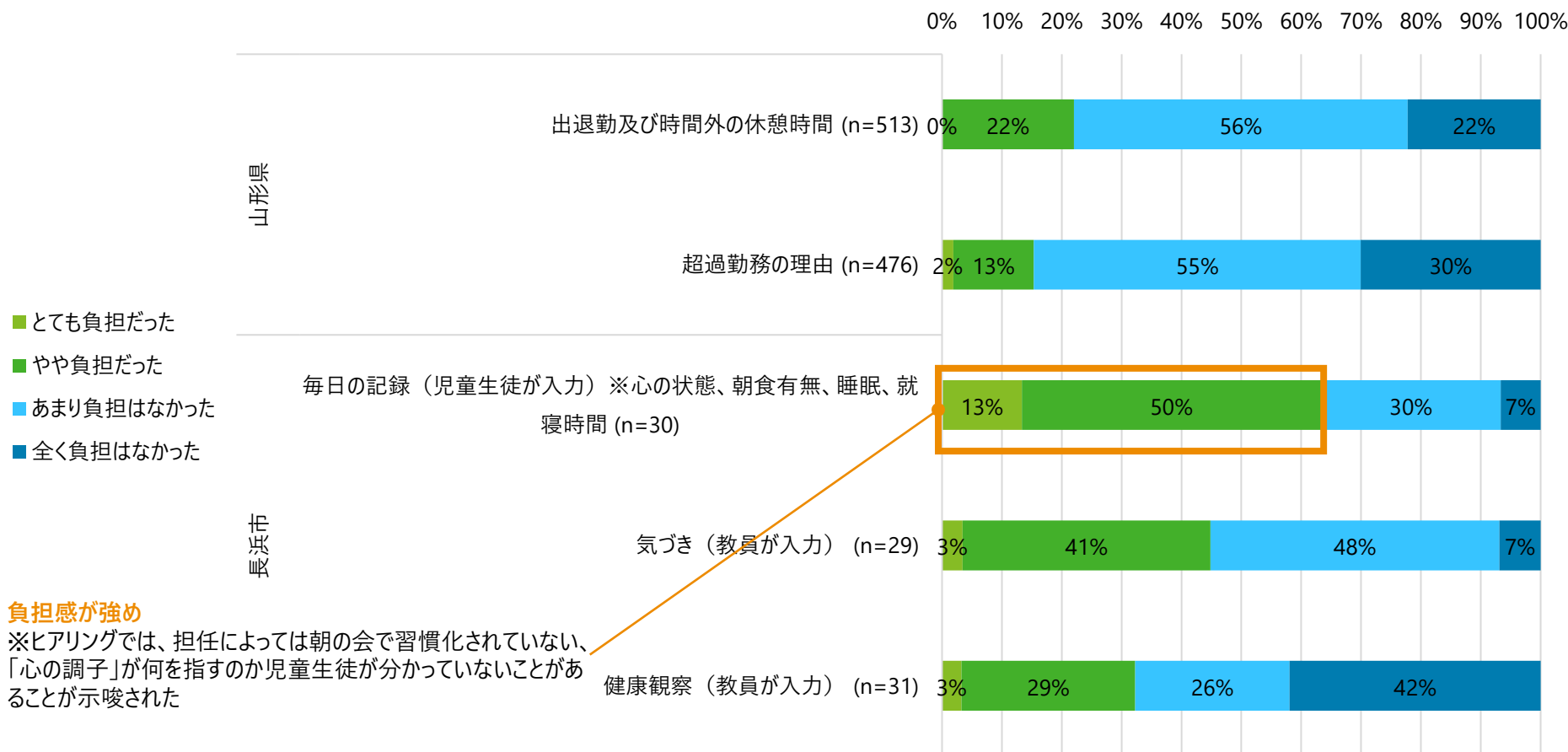


※鹿児島市は参画事業者が月1程度で訪問し、活用をサポートを実施
 ※ヒアリングより「使おうとしている画面で迷ったときに、関連する「よくある質問」をすぐ確認出来たり、AIチャットボットに聞いてすぐ解決を図れると便利だと思う（鹿児島市・小学校・教諭）」

データ入力への負担感 - 山形県・長浜市

データ入力について、長浜市における児童生徒の「毎日の記録」や教員による「気づき」の入力の負担感が強めでした

各データ入力にどの程度負担感がありましたか（単一回答）



※鹿児島市については、データ入力の負担感については、質問項目なし

ダッシュボード使用上の課題

ダッシュボード使用上の課題について、見たいデータに行きつくまでの操作が面倒という点が、特に長浜市・鹿児島市にて挙げられました

※ヒアリングでも、教員が見なければならないアプリが多すぎるため、閲覧までのステップをできる限り少なくする必要性が指摘された（長浜市・鹿児島市）

	山形県			長浜市		鹿児島市
	教育委員会 教職員課 (n=4)	学校管理職 (n=24)	その他本務教員 (n=155)	学校管理職・主 幹教諭・養護教 諭 (n=7)	その他教職員 (n=24)	学校管理職及 び教職員 (n=8)
入力するデータが多すぎる	0%	8%	5%	8%	14%	25%
データ入力の方法が煩雑である	0%	25%	3%	13%	14%	75%
ダッシュボードを開いたり、見たいデータに行きついたりするまでの操作が面倒である	25%	42%	25%	58%	57%	88%
データが多すぎてどのデータを見ればいいのか分からない	25%	25%	8%	21%	43%	50%
データの見え方が分かりづらくてどこを見ればいいのか分からない	0%	13%	6%	21%	14%	33%
データを解釈するのに時間がかかる	0%	13%	10%	17%	14%	13%
在校等時間が実際の状況を反映しているか疑義がある / 子供の入力が実際の状況を反映しているか疑義がある	0%	17%	7%	29%	29%	67%
超過勤務の理由が実際の状況を反映しているか疑義がある	0%	17%	8%	N/A	N/A	N/A
見ても最新のデータとなっていない	0%	13%	0%	0%	0%	0%
ダッシュボードを見る必要性を感じない	25%	0%	11%	8%	0%	0%
見ても新しい気づきがない	0%	0%	6%	0%	0%	33%
課題や困ったことはなかった	25%	21%	45%	13%	14%	N/A

効果を上げるための運用上の工夫や課題（活用フロー関連）

山形県・長浜市では、既存業務フローに組み込みつつ、教職員間でデータを見て検討する等、活用フローを改善・確立する必要が示唆されました

サマリ	ヒアリングでの意見
（山形県・長浜市） 既存の業務フローに組み込む ことが必要	- PC開いてわざわざ見ないといけないものは見ない。大型のモニターに全員の忙しさを表示する（山形県・特別支援学校・教諭） - 午前中に心の状態を確認して、気になる児童がいる場合は担任に伝える。ただ、毎日見れているわけではない。校内で担当を決めて、心の状態が悪い児童の名前を職員室の欠席・遅刻・早退等を共有する連絡版に一緒に書いておく等すれば、教職員も目に入って、意識が向きやすくなるのではないかと（長浜市・小学校・教頭） ▶（どこまで職員室で全員が見られるようにするのかという論点や、デジタルになっているものをアナログにする矛盾はありつつ）教職員が自然に目に入れる状況を作ることで、活用は促進されるのではないかと - 打刻漏れや「昨日押していない人」などはダッシュボードでは把握できず、別システムで確認している。ダッシュボードで確認できると、日次でフォローできてよい（山形県・特別支援学校・教頭） ▶山形県の場合、教頭の既存業務である「打刻確認」をダッシュボードに組み込むことで、自然と、ダッシュボード自体を見るようになるのではないかと - 朝の会中に学年主任やフリーの先生は遅刻で連絡がない生徒等の家庭に連絡をしており、担任が朝の会を行っている間に学年主任が見ることは難しい。それを踏まえてフローを考える必要がある（長浜市・中学校・教頭） - 本当はその日の朝に確認したいが、朝の会開始以降、見るタイミングがない（長浜市・小学校・学年主任） 朝、児童が毎日のアンケート（心の健康観察）に回答しているタイミングで、同時に結果を確認したいが、そのタイミングはデジタル教務手帳（別のアプリ）で健康観察の入力をしなければならない。その後は教員タブレットは電子黒板にミラーリングして、子どもへの投影に使っているため、確認するタイミングがない（長浜市・小学校・担任） - デジタル教務手帳上で、健康観察（出欠席等）の隣に、心の調子も表示されると、教員の既存業務の延長で無理なく見れるのではないかと（長浜市・小学校・教頭） ▶長浜市において、担任が毎日確認する前提の取組にする場合、既存の健康観察と心の健康も同じページで確認できる等、朝の担任業務に組み込むことが必要ではないかと
（長浜市） 閲覧までのステップを限りなくゼロ にする必要	※アンケート結果からも課題が見られた点 - iPadでスムーズに見られないと見ない。校務パソコンからわざわざは見ない（長浜市・中学校・教頭） - iPadからのアクセスでタップ数を減らすよううまく設定もできるが、知らない人はやっていないので、開くものが多くなったなどになってしまう（長浜市・小学校・学年主任） - 自分は、朝、校務パソコンを開くと自動でL-Gateが立ち上がるようにしている。その流れでダッシュボードを開いて、前日分の心の調子を確認している（長浜市・小学校・学年主任）

効果を上げるための運用上の工夫や課題（活用フロー関連続き）

（前頁続き）

サマリ	ヒアリングでの意見
（山形県・鹿児島市） データをもとに、教職員間で検討する場 を設定することが必要	・ ダッシュボードのデータは活用していないが、月1の安全衛生委員会で年間の勤務状況も見つつ、繁忙期への対応を考えている。若い教員の超過勤務が長くなりがちなため、中堅教員と組んで、業務改善に取り組むことも行っている（山形県・特別支援学校・教頭） ・ 心の健康観察を踏まえ、コメントでの不満や、雷マークの連続を見られた場合、まず話を聞いた上で、定期開催の生徒指導委員会で聞き取り内容を共有し、対応方針を検討している（鹿児島市・中学校・教諭） ▶ データをもとに教職員間で検討する場があると、実効性がある取組になりやすいのではないか
（長浜市）校内で 活用フローについて共通認識 を持つ必要	・ 入力率がクラスによってまちまちになるため、本校のやり方はこれです、と年度始めから統一していきたい（長浜市・中学校・教頭） ・ 遅刻してくる子が一番気にして見たい子でもあるが、遅刻すると毎日のアンケート（心の健康観察）を入力させるか担任によって対応が異なる（長浜市・中学校・教頭 / 長浜市・小学校・教頭） ・ 毎朝、健康観察を見て集計した後に、ダッシュボードも確認して、心の状態がとても良くない・良くないと回答した児童に対して、休み時間に声をかけに行くが、担任との連携はしていない（長浜市・小学校・養護教諭） ・ 2日1回程度、見るようにしている。気になる児童がいる場合は、保健室にその子が来たら声をかけるようにしているが、担任との連携はしていない（長浜市・小学校・養護教諭） ・ 自分のクラスと学年は毎朝、見るようにしているが、他のクラスについて、その担任と連携することはなく、気になる児童がいる場合は意識して見るようにしている程度である（長浜市・小学校・学年主任） ▶ クラスごとに入力の徹底度合いが異なる。また、教職員同士、お互いがいつ・どのような頻度で見ているか把握しておらず、ダッシュボードをもとに連携するという意識もない。教職員間で共通認識を持てるよう、教育委員会からも活用フローを発信するとよいのではないか。また、できれば学校ごとにツール担当者を置いて、活用の中心となっていただけるとよいのではないか
（長浜市）教職員が「 見なければならぬ 」必然性を持たせる必要	・ 子どもたちにとって分かりやすく、また、担任が絶対に見なくてはならないような質問の取り方（e.g., 先生に相談したいことはあるか・悩みがあるか）にするとよいのではないか（長浜市・小学校・教頭） ・ 「心の調子」は基準が曖昧である。眠たい、風邪気味だから「心の調子が悪い」と答えている子もいる。嫌なことはありましたか、等の方が答えやすいかもしれない（長浜市・小学校・担任） ・ 児童がアンケートに悩みを書いてきて、必ず対応しないといけないといった形にしないと、教員は見ないと思う。一方で、1日のうちに何人もそのフォローをする時間はない（長浜市・小学校・学年主任） ▶ 教職員がダッシュボードを確認する必然性を持たせると、取組の意義は分かりやすくなる可能性がある（一方で、特に担任の負担とトレードオフとなる？）
（長浜市） スクールカウンセラー等との情報連携 の可能性	・ スクールカウンセラーが学校の状況を把握するための情報の1つとして見てもらえたらよい（長浜市・中学校・教頭） ・ スクールカウンセラーに校務支援システム上の「気づき（教員の日々の所見）」を見てもらえるよう紹介した。それと一緒に見てもらえるとよいのではないか（長浜市・教育指導課） ▶ スクールカウンセラー含め、教職員間での情報連携を効果的にするという観点で活用を広げていく余地がある

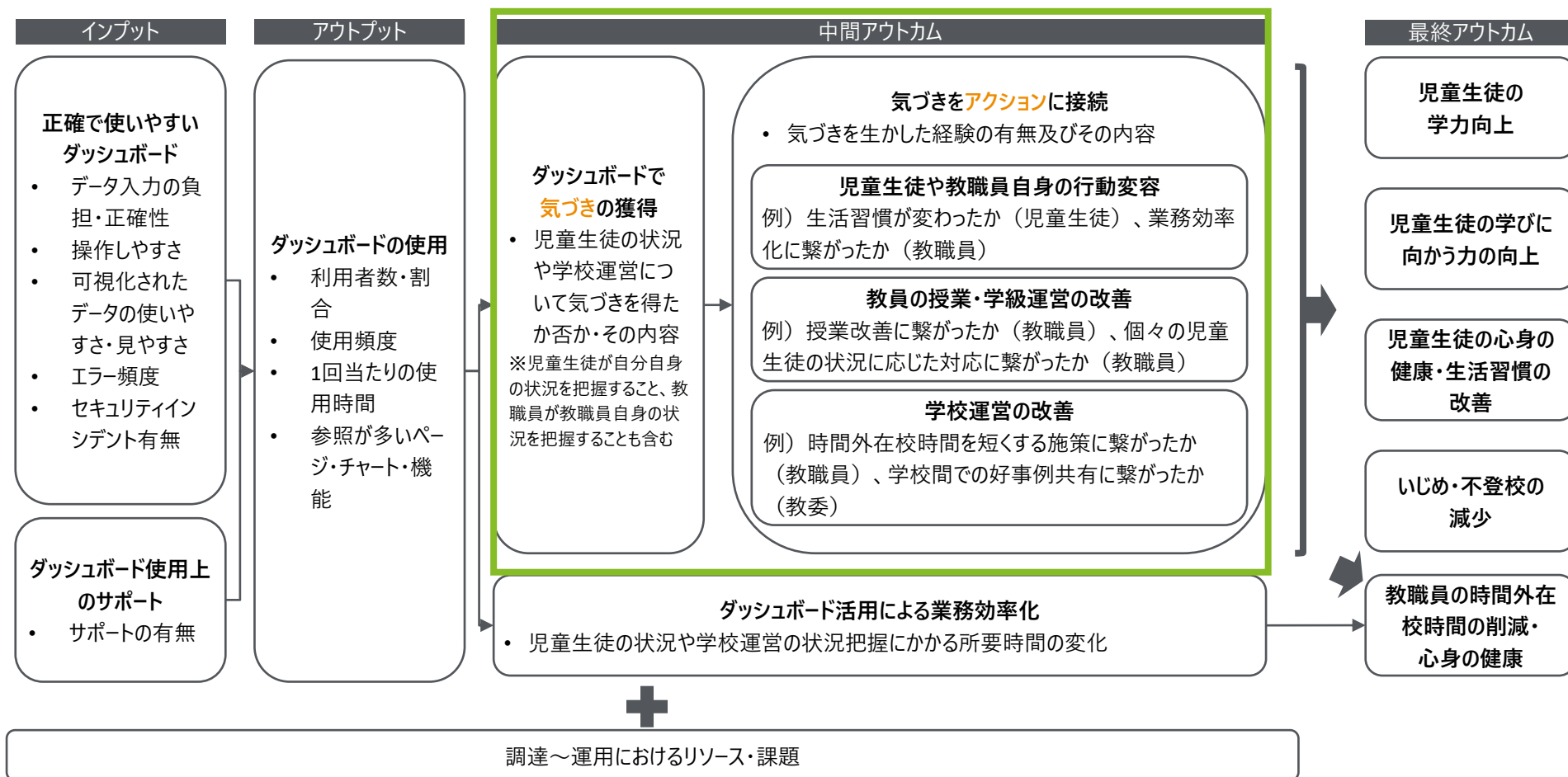
効果を上げるための運用上の工夫や課題（データの入力・見せ方関連）

主体・目的に応じてデータの見せ方等には改善の余地があることが分かりました

サマリ	ヒアリングでの意見
（鹿児島市） 振り返りデータ入力には改善の余地	教諭がどのように（授業の）振り返りコメントがダッシュボード上で活用されるか分かっておらず、児童生徒の振り返りもどのような観点から書いてもらうか指導できていない（鹿児島市・教諭）
（山形県・長浜市） 主体・目的に応じて、データの見せ方には改善の余地	- 教職員人数が多くても整理しやすいグラフや形式にしてほしい（山形県・特別支援学校・教頭） - 教科や年代、校務分掌といった追加属性情報があると、学校へ問題提起する際に、あわせて伝えて、注視してもらえる（山形県・教職員課） ※一方で、学校（山形盲学校）からは、忙しい校務分掌は既に分かっており、他の校務分掌への振り分けも難しいため、その観点で分析しても意味がない、超過勤務は業務の偏りというよりその人のパーソナリティによってそうになっているという意見あり - 業務3分類（基本的には学校以外が担うべき業務・学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務・教師の業務だが、負担軽減が可能な業務）ごとの状況が分かると超過勤務に対する対応を考えやすくなる。一方で、項目が多くなりすぎると入力負担が増すため、例えば、1年のうち一時期だけ詳細を入力してもらう等の工夫が必要である（山形県・教職員課） - 教育委員会では学校ごとに比較し推移を見たい、学校管理職では学年やクラスごとに比較し推移を見たい。心の調子が悪い割合が教育委員会向けでは学校ごと・学校管理職向けではクラスごとに出たら、見てフォローしないととなると思う（長浜市・教育指導課） - 担任としては（集計されたグラフではなく）どの子がどういう状態なのか、パッと見れる表にしてほしい（長浜市・小学校・担任） - Qubenaに関しては、個人ごとの進捗を見たいため、Qubena自体のダッシュボードを見ている（長浜市・小学校・担任） - 家庭学習については日々というより、家庭学習週間中・それ以外で比較したいが、長期のデータを学年別に簡単に比較できる形になっていない（長浜市・小学校・教頭） ▶主体やデータによって、閲覧したい頻度や目的は異なり（e.g., 一人ひとりの児童生徒について見たいのか、全体の傾向を見たいのか）どの主体がメインで、何のために使用する想定かによって、それぞれのデータの見せ方には改善の余地がある
（山形県） 情報反映のタイミングに改善の余地	即時反映ではないため、月中の早期介入（アラート的な運用）には限界がある（山形県・特別支援学校・教頭） ▶予防的効果を求める場合、情報反映のタイミングは改善の余地がある
（鹿児島市） データを見た上でのアクション提案がある と便利	時間割に単元を設定でき、さらにその単元に関連してどんな改善があり得るかもサジェストしてくれる機能があったらうれしい（鹿児島市・小学校・教諭） ▶（鹿児島市に限らず）データとアクションを繋げる仕組みがあると、より、ダッシュボードが効果的に活用されるのではないかと

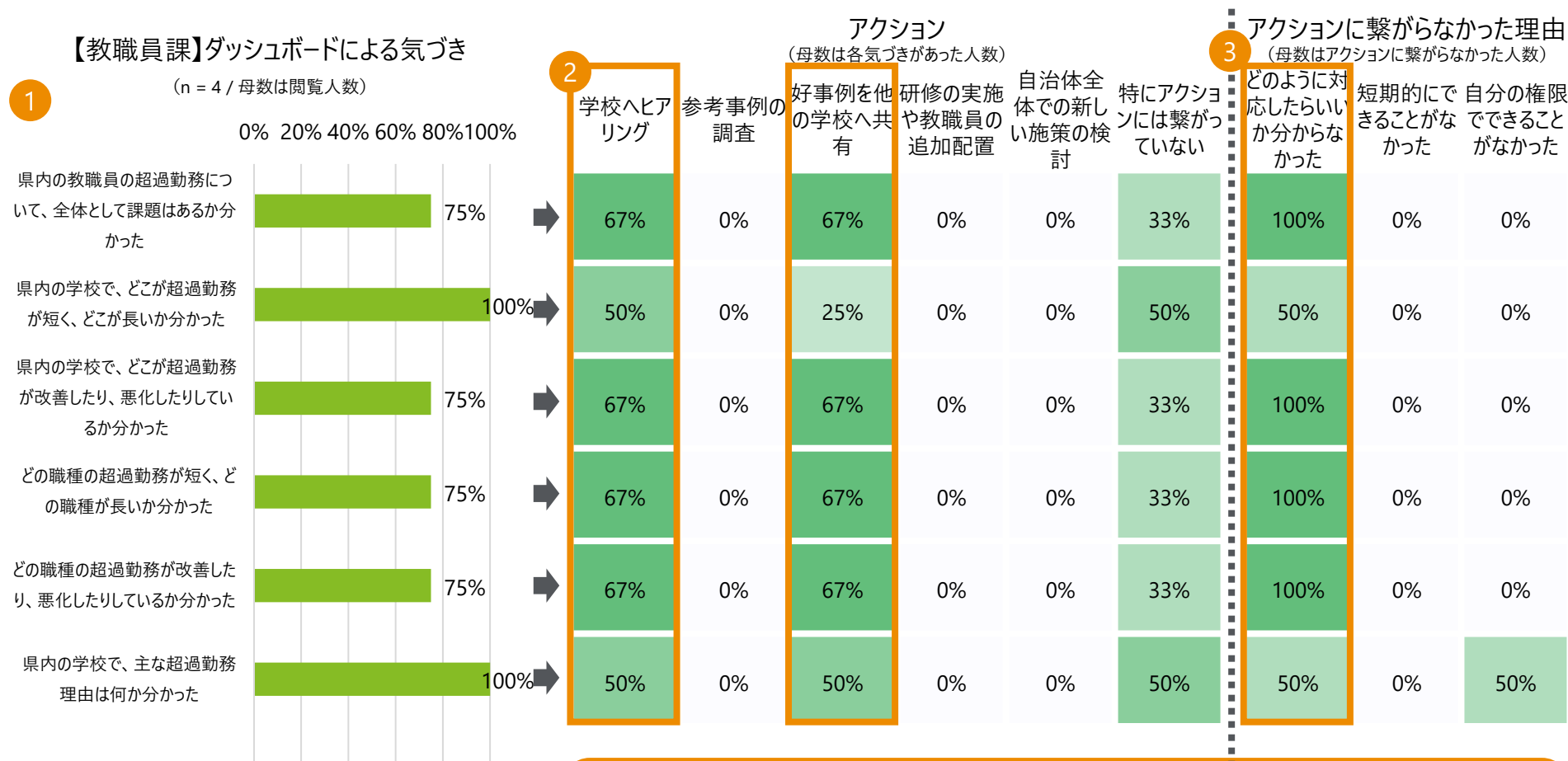
ロジックモデル

中間アウトカムに関する各自治体の検証結果について、次ページ以降掲載しております



気づき・アクション - 山形県（教育委員会教職員課） ※n数が特に少ないことに留意

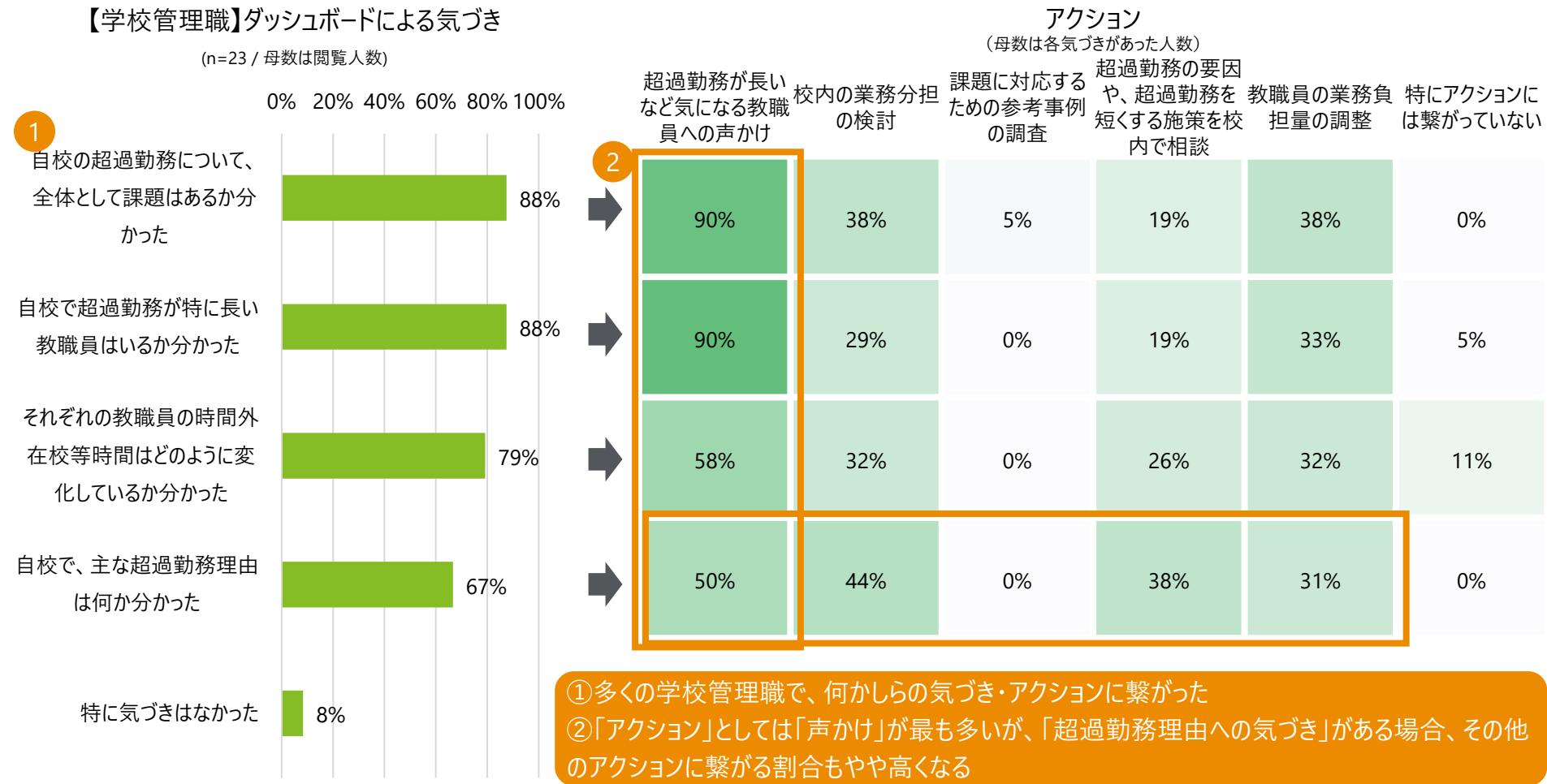
教職員課においては、「気づき」に繋がった割合は一定数あるものの、積極的なアクションに繋げるにはダッシュボード以外の情報が必要であるようです



- ①「気づき」に繋がった層は一定存在する
- ②「アクション」はヒアリングや好事例共有に留まり、リソース配置や施策検討には繋がっていない
- ③アクションに繋がらなかった理由として「どのように対応したらいいかわからなかった」が挙げられ、ダッシュボード以外の情報と組み合わせる必要が示唆された

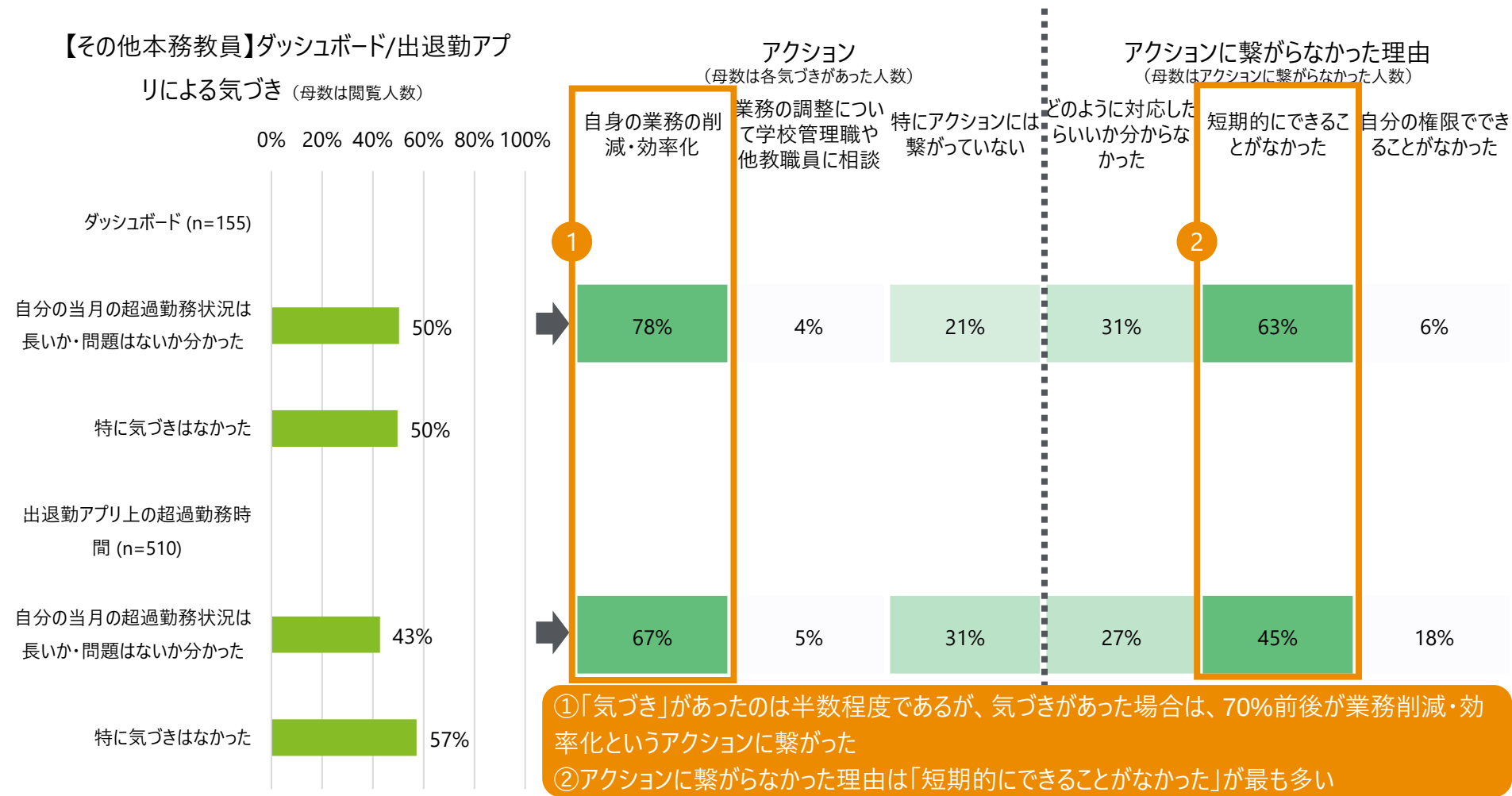
気づき・アクション - 山形県（学校管理職）

山形県の学校管理職においては、多くの層で気づき・アクションに繋がりました。最も多いアクションとしては「声かけ」でしたが、「気づき」によっては他のアクションへも繋がったようです



気づき・アクション - 山形県（その他本務教員）

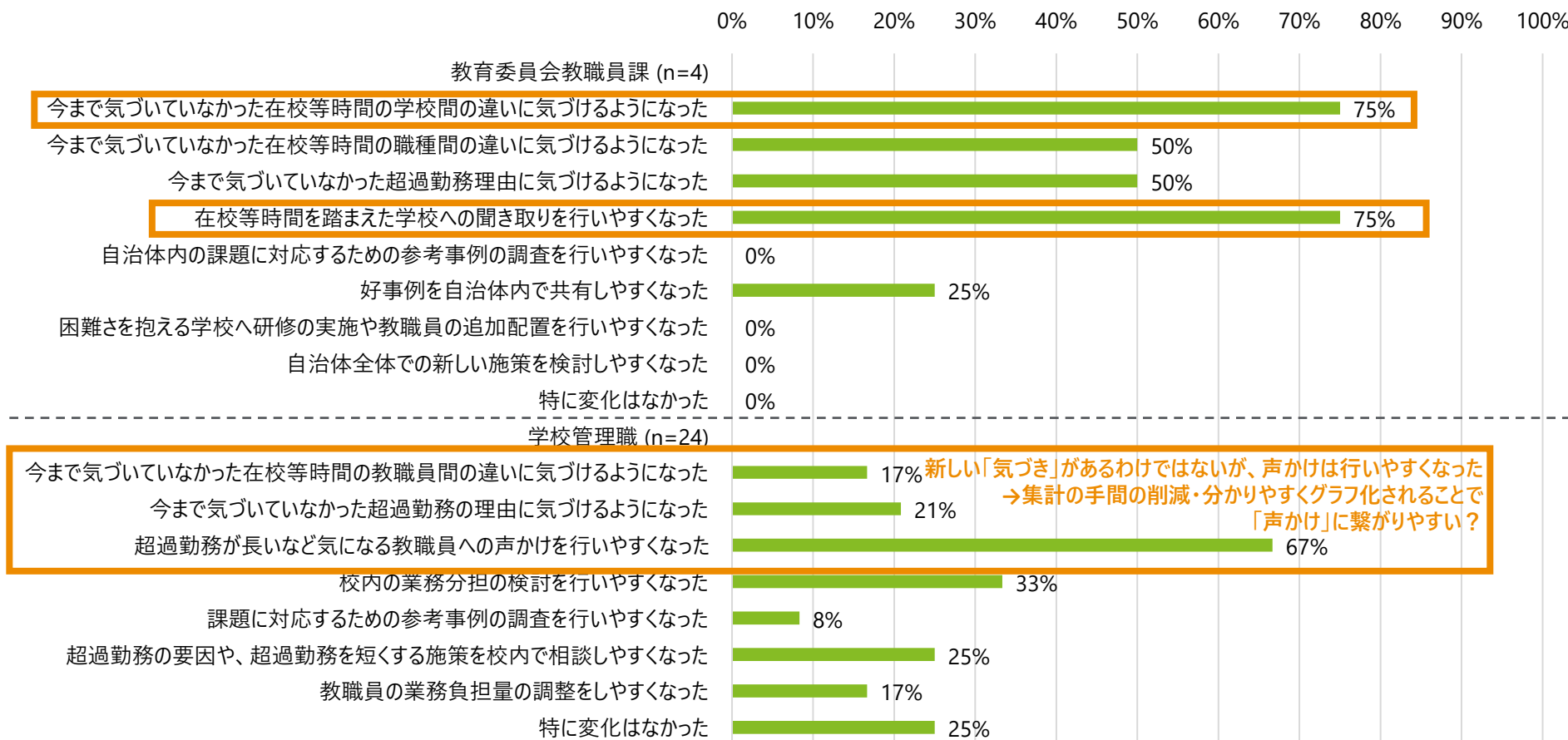
その他本務教員においては、「気づき」に繋がった割合は限定的である一方、「気づきによる業務削減・効率化」は一定割合で見られました



業務の変化 – 山形県

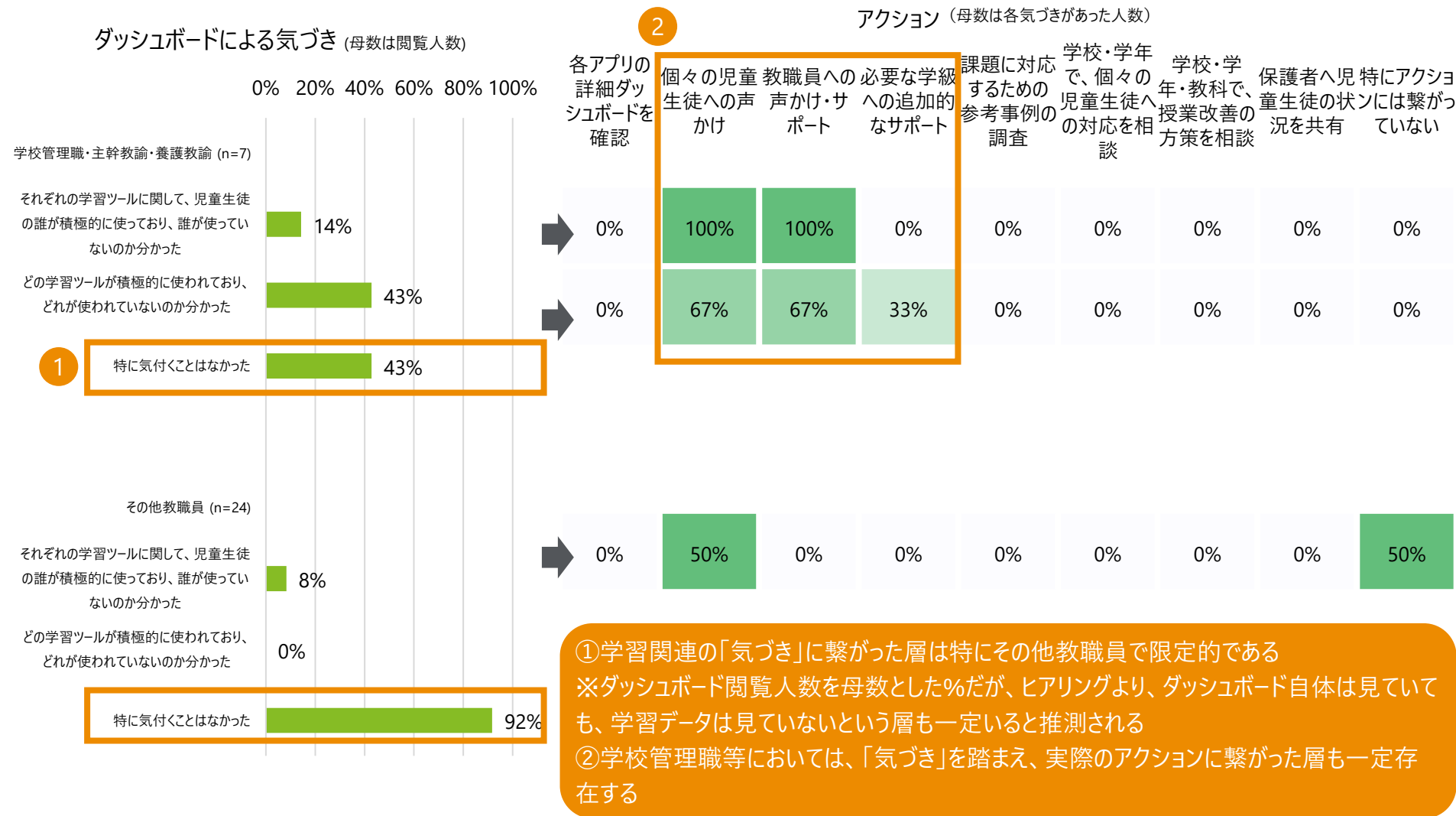
学校管理職では新しい「気づき」があったわけではないが、声かけをしやすくなったという変化があり、教職員課ではそもそも新しい「気づき」があったという業務の変化が挙げられました

ダッシュボードを使用することで、以下のような業務の変化はありましたか（複数回答）



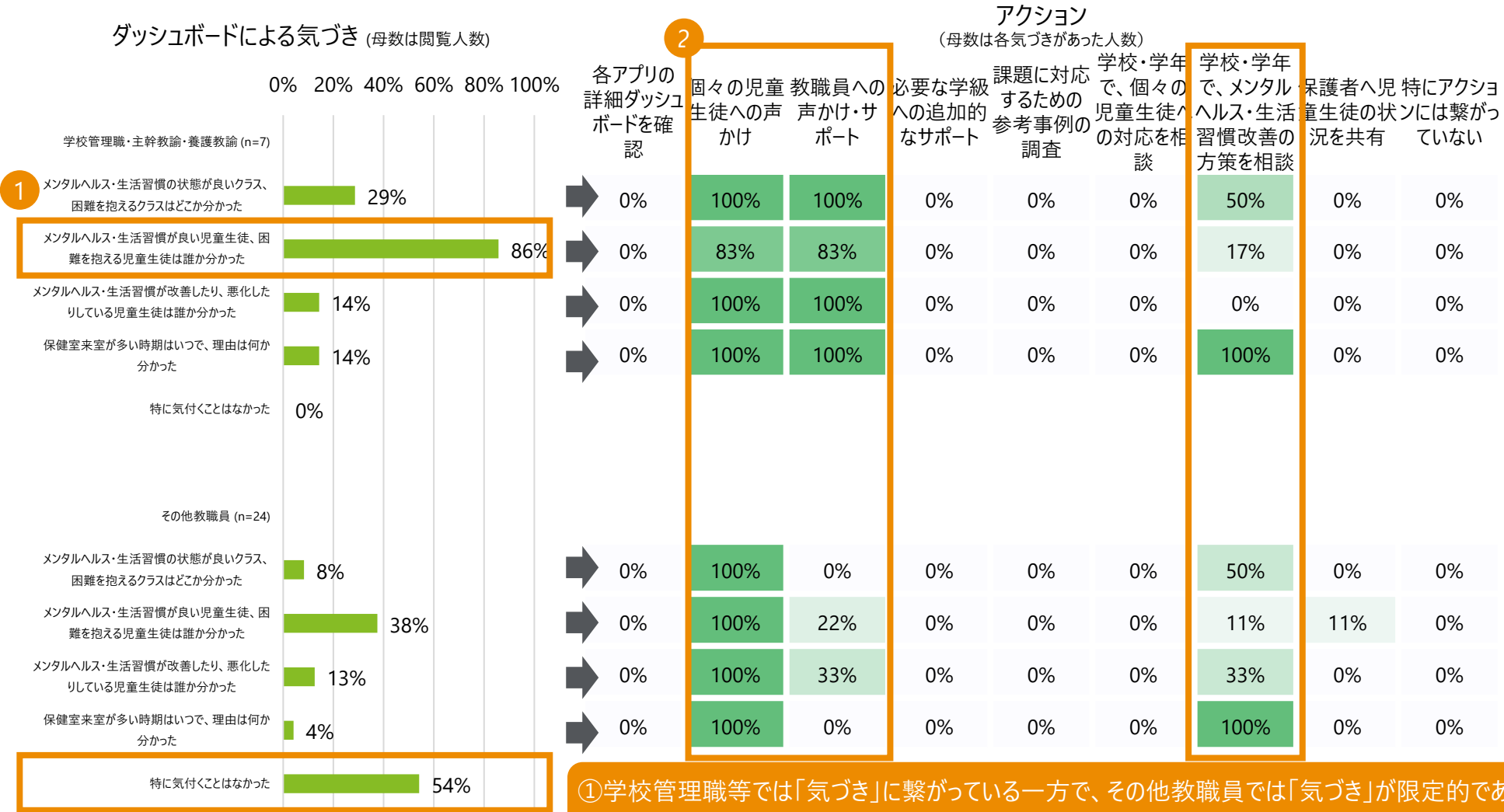
気づき・アクション - 長浜市（学習関連） ※学校管理職等はn数が特に少ないことに留意

長浜市において、学習関連は「気づき」に繋がった層が限定的である一方、「気づき」があった学校管理職等では、アクションに繋がっているようです



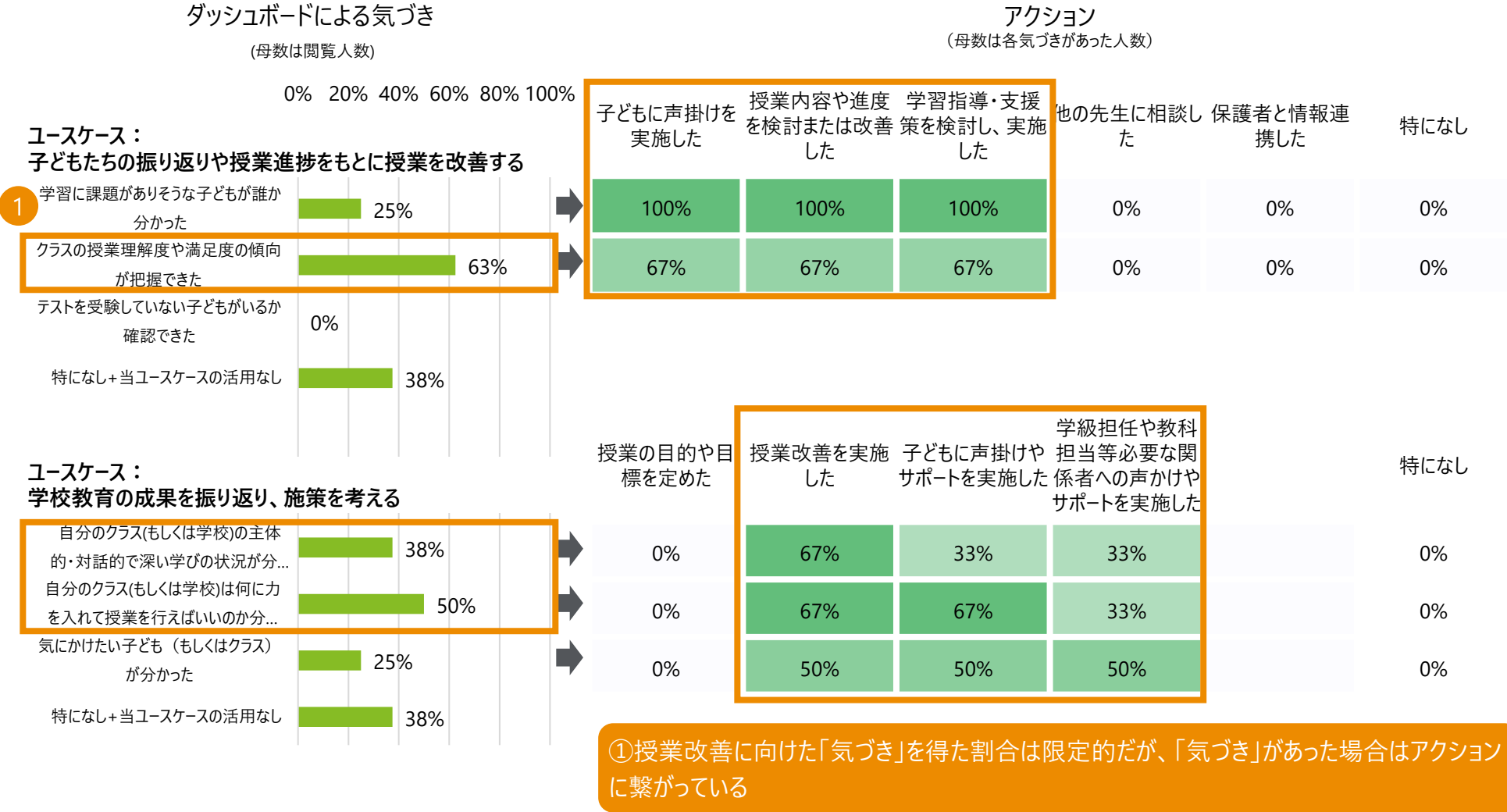
気づき・アクション - 長浜市（生活関連） ※学校管理職等はn数が特に少ないことに留意

生活関連は、学習関連よりも「気づき」に繋がっていますが、学校管理職等以外では限定的です。ただし、学習関連と同じく「気づき」があった場合はアクションに繋がっています



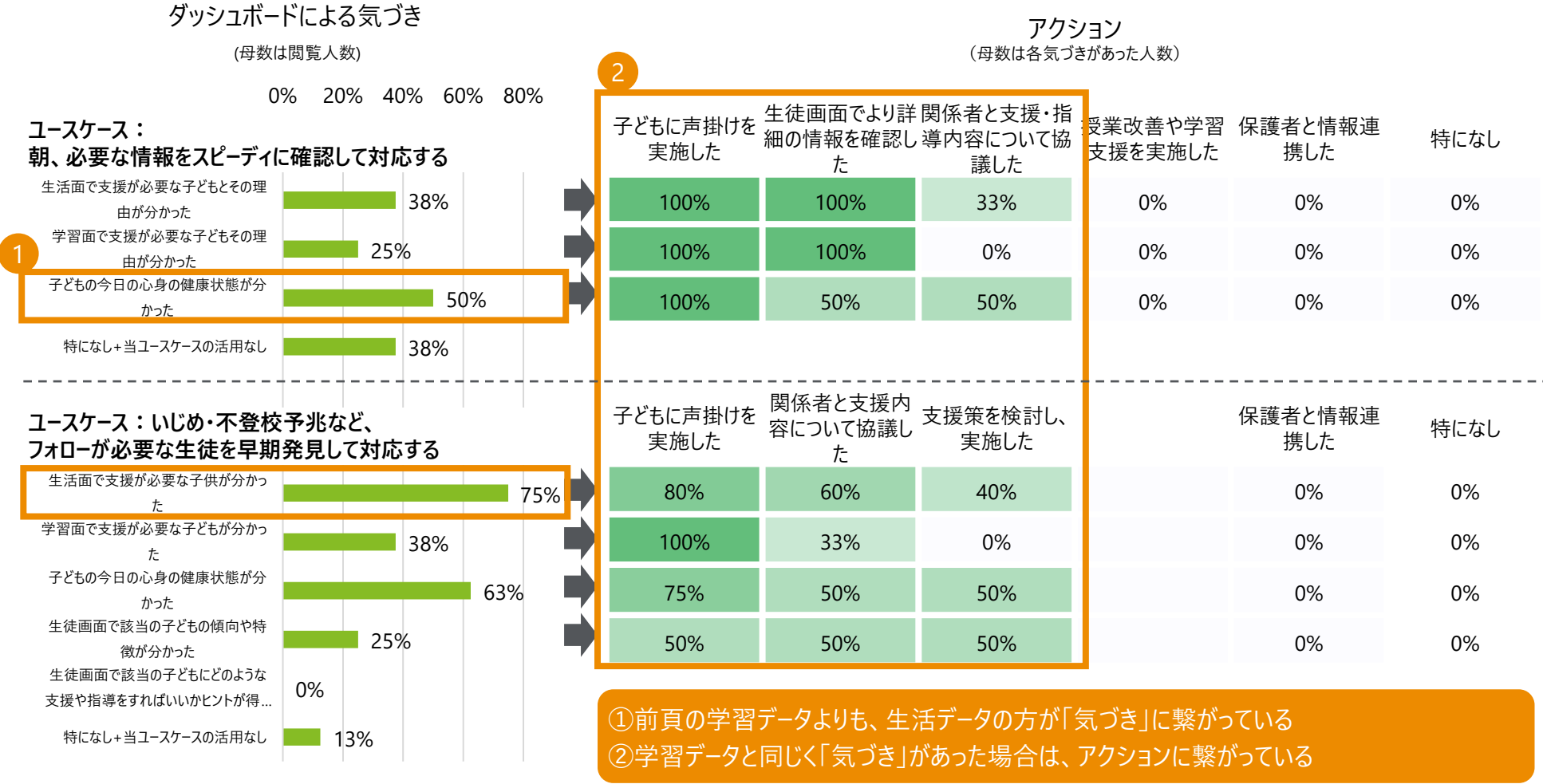
気づき・アクション - 鹿児島市（学習関連） ※n数が特に少ないことに留意

鹿児島市において、授業改善等に向けた「気づき」は限定的ですが、「気づき」があった場合はアクションに繋がっていました



気づき・アクション - 鹿児島市（生活関連） ※n数が特に少ないことに留意

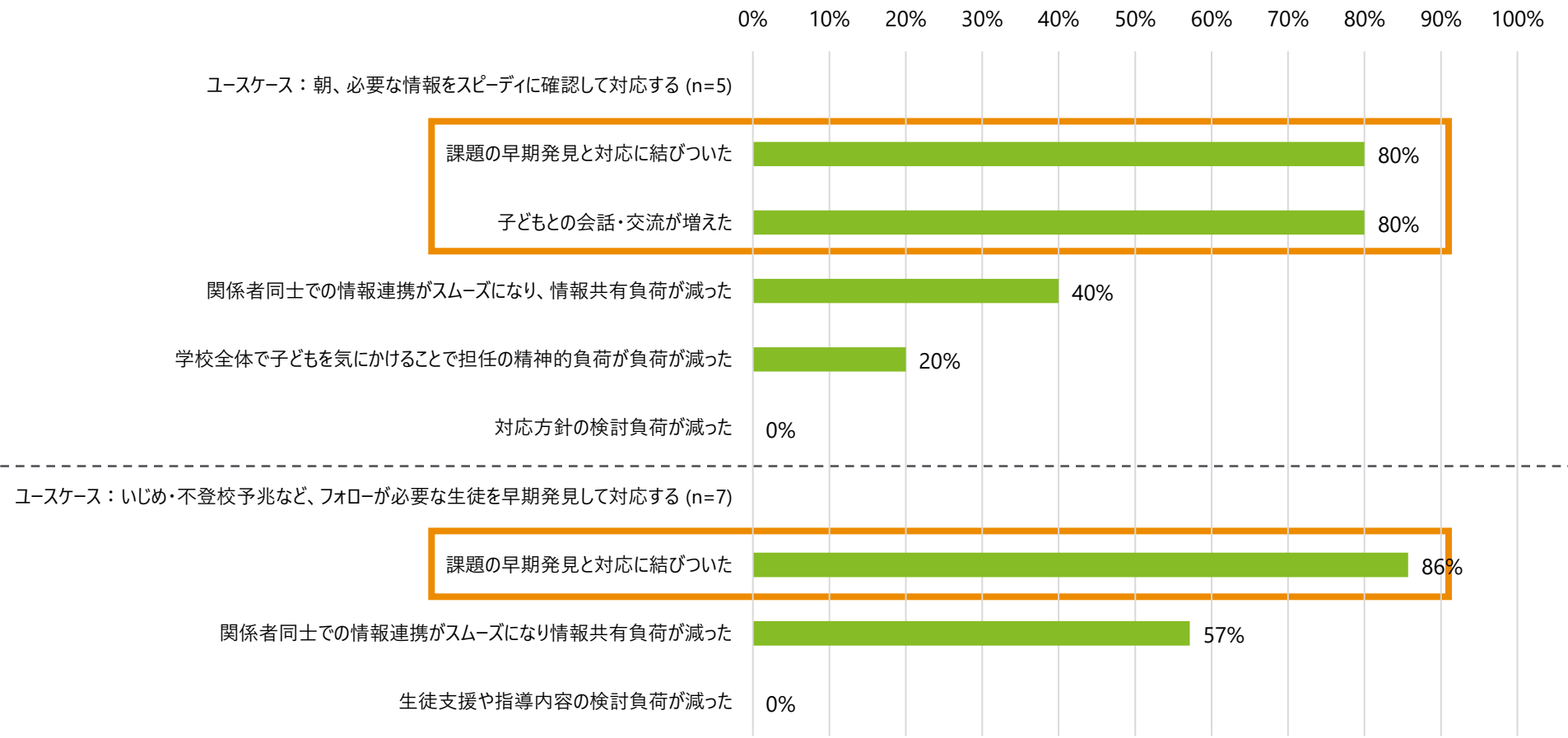
生活関連は、学習よりも関連「気づき」に繋がっている割合が高かったです



業務の変化 – 鹿児島市 ※その他のユースケースに関しても同様の質問をしているが、n数が少ないため割愛

特に活用割合が高かった生活データ関連のユースケースについて、教職員に業務変化について伺ったところ、課題の早期発見と対応に結びついた等の効果が挙げられました

ダッシュボードを使用することで、以下のような業務の変化はありましたか（複数回答）

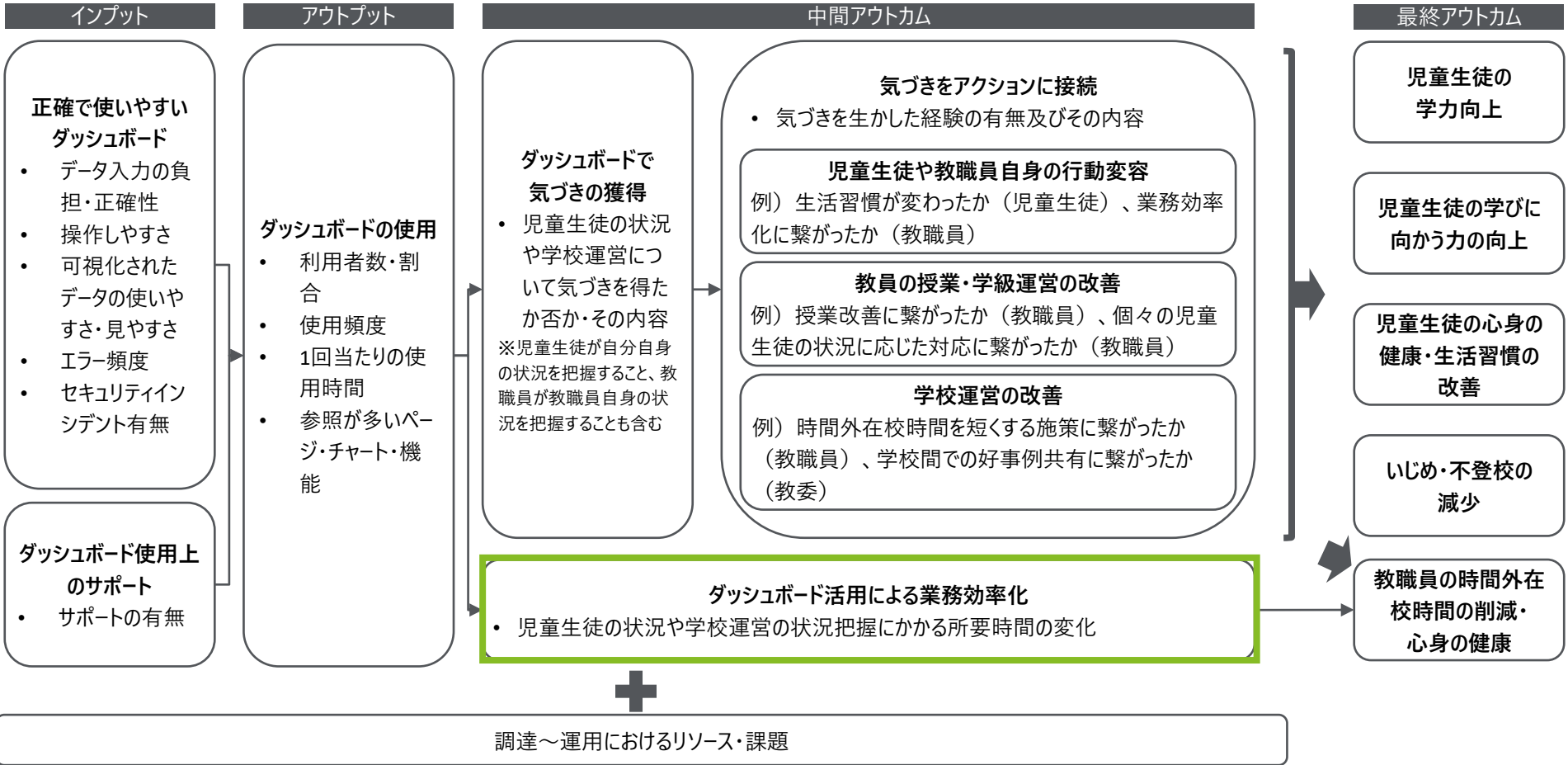


ダッシュボード使用による効果

サマリ	ヒアリングでの意見
(長浜市・鹿児島市) 児童生徒の様子をより多角的に確認できる	- 心の状態が気になるのはだいたい同じ児童だが、たまに違う子が入っていることがある。見落としがちな子を拾えているかと思う(長浜市・小学校・養護教諭) - 教員が完璧に児童の様子を見取れているわけではないので、このようなものがあると児童を見る一つの助けになる(長浜市・小学校・学年主任) - 当校は小規模校のためデータがなくてもある程度児童の様子は共有できているが、中規模以上の学校だと、データがあると児童の様子を把握しやすくなると思う(鹿児島市・小学校・教頭) - AAR(授業満足度・コメント)を踏まえ、生徒が理解していると思っていたが、理解していない生徒が一定数いる等を見取り、次の授業で補足説明を行ったり、質問に対応したりしている(鹿児島市・中学校・教諭)
(長浜市) 経験が浅い教職員への支援となる	(前提として、まだ学校全体で活用フローを確立することはできていないが)若手の教員が増える中で、担任として生徒の状況へのアンテナの張り方には個人差がある。教職員全体でこのようなデータを通して、生徒の状況を見ることができれば、担任が対応できていなくても、大丈夫?と他の教職員が声をかけられる。担任1人の責任ではなく、チームとして生徒を見ていけるようになるのはよいと思う(長浜市・中学校・教頭) - 若い先生が増える中で、児童生徒の表情を見ても気づけない先生はいるので、まず数字の助けもありつつ児童生徒の支援ができるようになるとうい。これで声をかけておいてよかった、という成功例が蓄積されるとよい(長浜市・教育指導課)
(長浜市) 児童生徒がSOSを出しやすくなる	- 本校の課題として、子どもたちが自分から相談事を言えず、周りや保護者から教員が知らされることが多い。タブレットを通してであればSOSを出せる子もいるかもしれない(長浜市・小学校・教頭) - 言葉に出しにくい子は、このようなアンケートだと出しやすかったりする(長浜市・小学校・養護教諭)
(山形県) 業務改善に繋がる	今まではExcel提出・集計・加工・学校への返却に時間がかかっていたが、ダッシュボードになったことで対応までのスピードが上がった(山形県・教職員課)

ロジックモデル

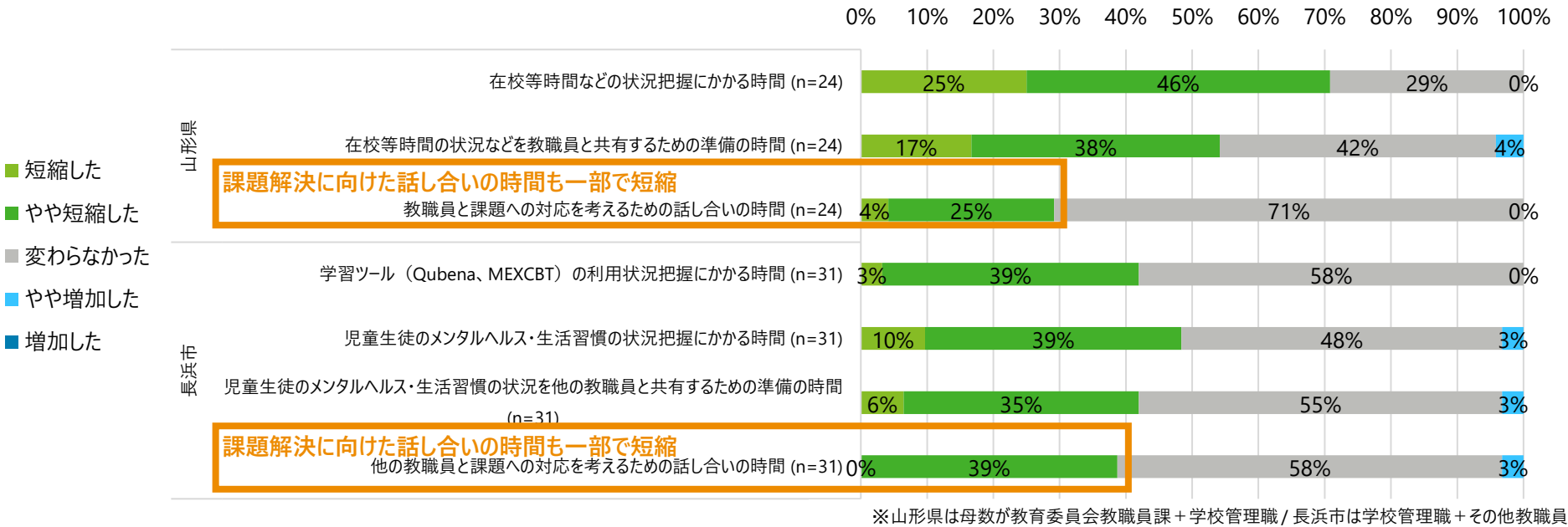
ダッシュボード活用による業務効率化に関する各自治体の検証結果について、次ページ以降掲載しております



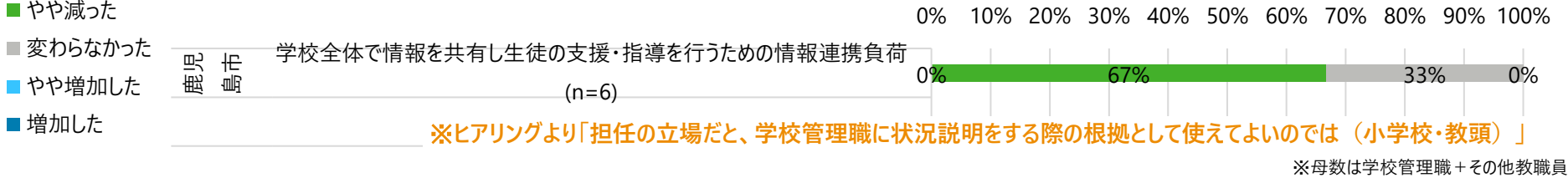
業務効率化

意図通り、状況把握や共有準備の時間について、一部で短縮が見られる一方で、課題解決に向けた話し合いの時間についても一部で短縮が見られました

ダッシュボードを使用することで、以下の時間はどのように変化しましたか（単一回答）

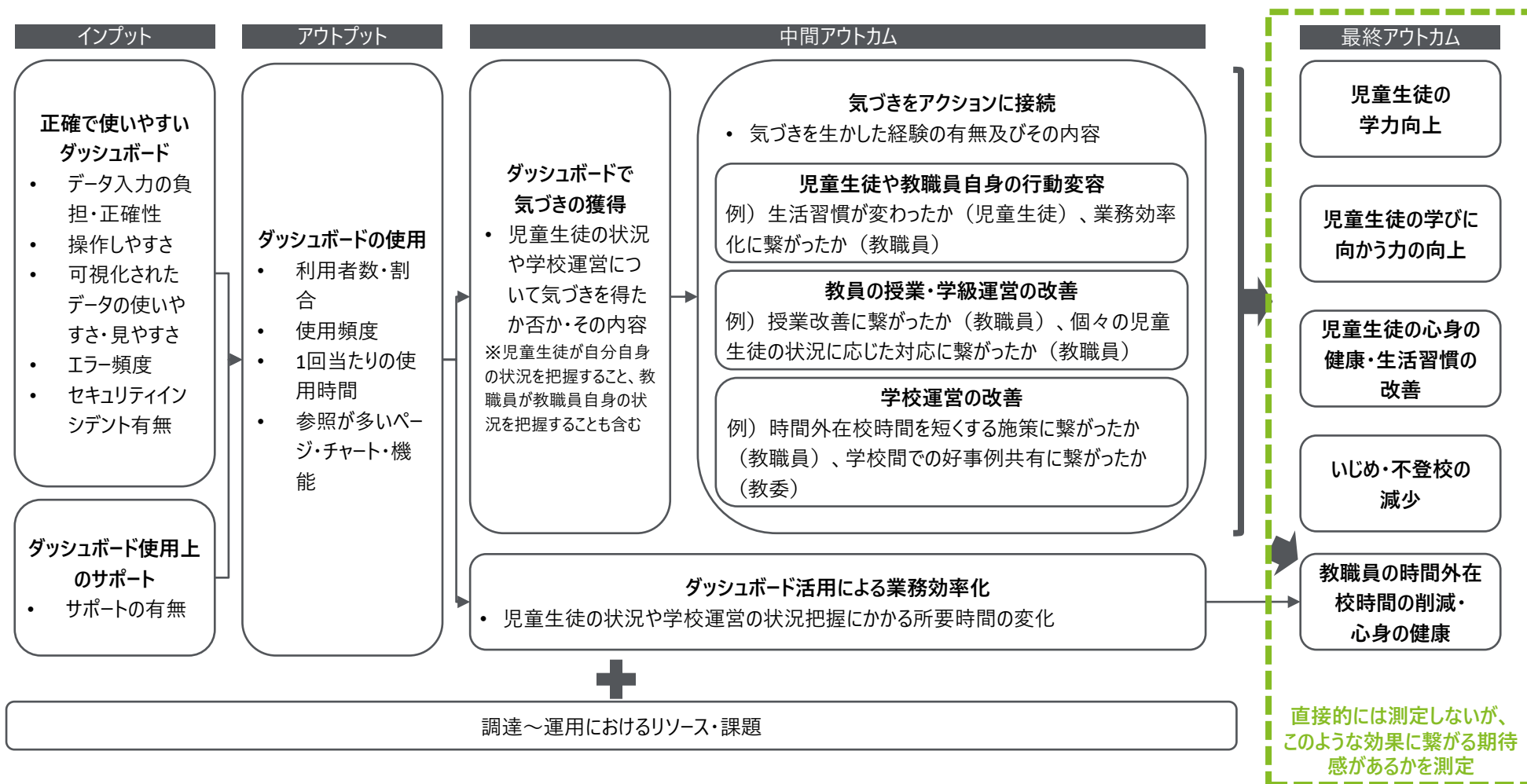


ダッシュボードを使用することで、以下の業務負荷はどのように変化しましたか（単一回答）



ロジックモデル

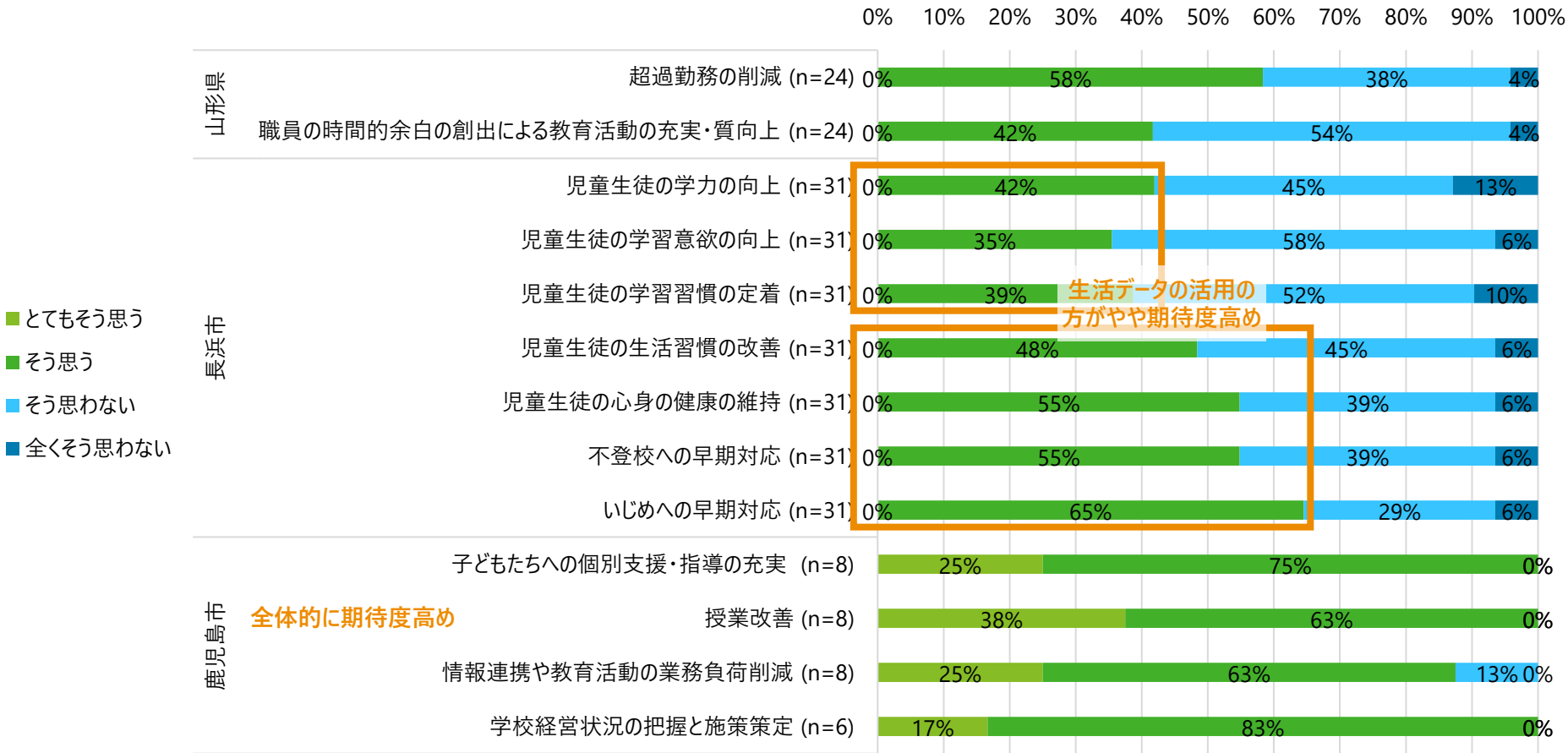
最終アウトカムに関する各自治体の検証結果について、次ページ以降掲載しております※直接的な測定ではなく、効果につながる期待感を伺っています



最終アウトカムへの期待感

特に、鹿児島市において最終アウトカムへ繋がる期待度が高めであり、長浜市では生活関連の期待度が学習関連より高めという結果となりました

ダッシュボードを使用することで、以下のような効果が見込まれると思いますか（単一回答）



※山形県は母数が教育委員会教職員課＋学校管理職/長浜市は学校管理職＋その他教職員
※鹿児島市は学校管理職＋その他教職員だが、「学校経営状況の把握と施策策定」は「学校管理者でない」を除く

実証事業の進め方に係る工夫・課題

最後に、実証事業を進めるにおいて、教育委員会から実証校への支援の在り方には改善の余地があることが分かりました

サマリ	ヒアリングでの意見
（山形県・長浜市・鹿児島市）教育委員会から実証校へ、何を目的に、どのように使うと効果的かを具体で発信していく必要	・ 業務効率化の面からの操作説明しか行っていないため、今後、データの見方や分析方法について伝えていく必要がある（山形県・教育DX推進室） ・ ダッシュボードをこのように使用すると、このような効果があったというのを（外の人間ではなく）教員から発信していくと、使っていこうという気になってもらえるかもしれない（長浜市・中学校・教頭） ・ 今後、教育委員会から、こういう風に使うと効果的だというフローを示していきたいと思う（長浜市・教育改革推進課） ・ 実証校に対して、最終的にどんなことをできるようになるのか、先生自身の考えがどのぐらい反映できるのかというのをより伝えていくべきだった（鹿児島市・教育DX担当）
（長浜市・鹿児島市）校内の担当者を明確化する必要	・ 情報担当は各学年が1人ずつ入る形でチームにしてくださいと学校にお願いしている（鹿児島市・教育DX担当） ・ ダッシュボード担当を置いてもらうことも考えられる（長浜市・教育改革推進課）
（長浜市・鹿児島市）実証校の取組状況を把握する仕組みが必要	・ どのぐらいのスパンで、どのぐらいの学校をどの程度把握して、どのぐらいそれぞれの学校に聞き取りをするのか、フレームワークを決めるのが大事。全ての学校がどのぐらい活用しているか、どこに課題があるのかをあまねく把握できる仕組みが今後必要となる（鹿児島市・教育DX担当） ・ うまく使ってもらっている事例を拾って、他校へ展開していく必要がある（長浜市・教育改革推進課）

5.教育データ利活用のステップ（β版）

5-1. 作成・更新の背景、更新方針

今年度の更新に際して、昨年度公開されたステップ（β版）をベースに、「教育データ利活用に関する手順書」となるよう、内容の充実化を図り、章立ても見直しました

参考：【資料2-1】教育データ利活用の推進に向けた取組について
参考：【資料2-2】教育データ利活用のステップ（β版）

前提事項

背景	令和6年3月「教育データ利活用の実現に向けた実効的な方策について（議論のまとめ）」において、教育データ利活用を今後全国で進めるうえで必要な取組の一つとして「各自治体における実装支援」が挙げられ、支援例として「各自治体がシステム導入を検討する際の参考となる、調達時に共通に備えることが望ましい技術的要件を整理した資料の提示と、導入の実証とその知見の共有」が示された
位置づけ	「教育データを利活用したいけれど何から始めたら良いかわからない」という教育委員会の担当者を主な対象として作成 - 教育データを利活用していくまでのステップについて解説 「β版」であり、今後の実践や議論を踏まえたブラッシュアップを想定
資料構成の特徴	- データ利活用の手法・環境整備を3パターンに分けて整理 - データ利活用目的・対象データを決める部分は共通ステップとしたうえで、各パターンごとに必要な環境整備のプロセスを示す

更新の基本方針

今年度の更新のねらい

- ① 教育データ利活用に関する一連のプロセスが分かるよう、内容の充実を図る
- ② 初めて教育データ利活用に取り組む担当者が、進め方のイメージを具体化するために必要な情報を体系的に示す
- ③ 既に教育データの利活用を進めている自治体による、継続的な取り組み・より効果的な取り組みにも寄与する内容・構成とする

① 内容の充実	骨子の見直し・項目の追加	ステップ（β版）では、システム調達に係る記載が厚い構成となっているため、教育データ利活用の一連のプロセスに沿って全体構成を見直すと共に、内容の充実を図る
② 初めて取り組みを担当者を支援	ユースケース・事例の充実	別途実施の調査研究事業と連携し、目的設定（ユースケース）の類型や先行自治体の事例を分かりやすく示す
	推進上の課題対応策の提示	取り組む過程で起こりがちな課題や進め方に対し、先行自治体での対応例等を参考情報として示す
③ 継続的な取組に寄与	取組効果を高めるための留意点の提示	具体的な活用フローの提示等、取組効果を高めるための、プロジェクト推進上の留意点を実例とともに示す
	効果検証の進め方の提示	継続的に改善を図っていくための効果検証の観点・指標の立て方について要点を示す
	継続取組自治体向けのコンテンツ追加	段階的な取組の発展を想定した記載内容とし、既に取り組んでいる場合でも参考になる情報を組み込む

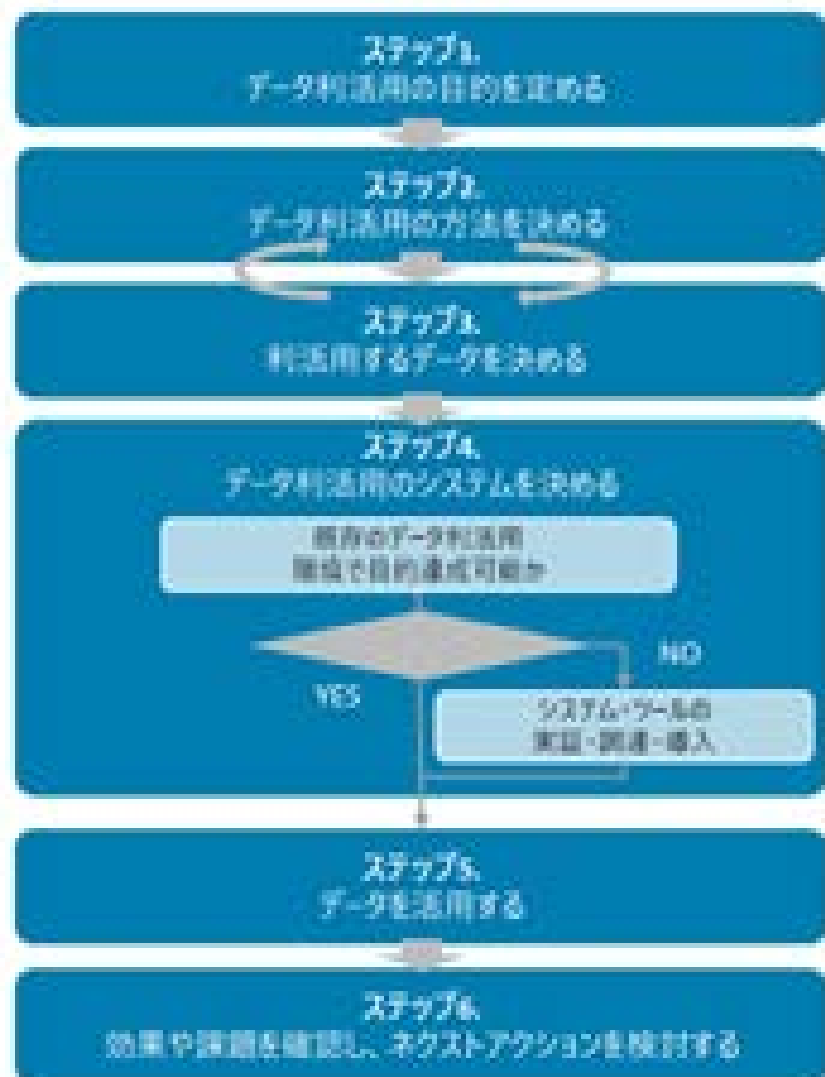
5-2. 更新版骨子

前掲の更新方針に基づく、今年度の更新版（ステップ（β版）2.0）の構成と、各章・項の更新方針は以下の通りです

目次	主な記載事項	「ステップ（β版）」からの更新方針
I. はじめに	ガイドブックの目的、位置づけ	（追記）前掲の更新方針をふまえ追記
II. データ利活用の重要性	教育データ利活用の意義、課題、効果	（追記）今年度の検討内容をふまえ修正
III. データ利活用の類型	利活用の目的や方法、実装手法のパターンについて、基本的整理として提示	（追記）実装手法に加え、目的やデータ利活用方法についてもとりまとめた類型を示すため追記 ➤ 目的設定：個別支援、授業改善、組織的な対応、学校経営・学級運営、施策立案 ➤ データ利活用方法：見える化/共有/検証/予測 ➤ 実装手法：個別アプリ・システム/データ連携機能付システム/表計算/独自構築システム
IV. データ利活用のステップ	0. ステップに関する全体像 1. データ利活用の目的を定める 2. データ利活用の方法を定める 3. 利活用するデータを定める 4. データ利活用のシステムを定める 5. データを活用する 6. 効果や課題を確認し、ネクストアクションを検討する	1.~6.の概要 （差替）更新方針をふまえ最新の全体像を図示 （追記）目的の妥当性・実現性の初期検討や、ロジックモデル等を活用し、効果検証視点や活用フローを事前に整理することについて追記 （追記）利活用方法の特性を理解して選択いただくため、想定される具体的なユースケースも紹介しつつ、類型の考え方について追記 （追記）現状整理～加工の一連の流れをより具体的に示すため、データの収集、加工について追記 （追記）追加調達を要する内容の決定から調達・導入までの手順や留意点がより伝わりやすくなるよう、考え方や工夫例を追記 （新規）現場での活用を促す取組の必要性を伝え、実際の活用イメージを持ってもらうため、本事業や分析事業の実証内容、先進事例のヒアリングをふまえて記述 （追記）より具体的に効果検証の取組イメージを伝えるため、今年度の実証もふまえて手順や留意点に関して追記
V. データ利活用の際の留意点	個人情報取り扱い等の共通的な留意点	—
VI. 用語集	専門用語等のリスト・簡単な補足	対象用語を（過年度事業成果物もふまえ）整理の上記述
別添資料	- 教育データ利活用のユースケース集（「効果的な教育データ利活用に関する調査研究事業」にて作成） - データ項目一覧（「効果的な教育データ利活用に関する調査研究事業」にて作成） - 教育データ利活用に向けたシステム利用状況調査（個別事例ヒアリング結果）	

補足) ステップに関する全体像

教育データ利活用の手順について全体像を把握しやすいよう、データ利活用の手順ごとに再構成をしました



実施内容

自治体や学校における課題を洗い出し、利活用の目的を設定します
自治体や学校における教育上の課題や業務上の課題を洗い出し、教育振興基本計画等の大きな方針も意識しながら、目的を設定します

見える化、共有、検証、予測等の利活用の方法を検討します
設定した目的を踏まえて、どのようにデータを使いたいのか（例えば、子供の状況を見たい、教員間で共有を図りたい等）を検討します

実際に収集・加工するデータ項目を検討します
必要なデータ項目を仮想的に定義したうえで、現在保有しているデータの種類や量、精度等の現状を整理し、データ項目を決定します

データを活用するシステムを決定し、実装します
必要なデータ項目を、収集・活用するためのシステムを検討・決定の上、システム化のための手続き（実証・調達・導入）を進めます
（※）既存の環境で目的達成可能であれば、調達に関する部分は飛ばして進めます

実際に学校現場や教育委員会でデータの利活用に取り組みます
各学校現場や教育委員会において、データを活用し、気づきを得て、必要なアクションにつなげていきます

データ利活用の効果・運用上の課題を把握し、計画に反映します
ネクストアクションにつなげるために、定期的にデータ利活用の効果や課題を確認したうえで、ネクストアクションを検討します

補足) データ利活用の種類の示し方について

今年度の更新版では、教育データ利活用の全体像を端的に示すため、目的・方法・システムそれぞれの種類を示したうえで、それぞれの決定方法を解説する流れとしました

何のために（データ利活用目的）

どのように（データ利活用方法）

何を用いて（システム等実装手法）



授業改善に向けたデータ利活用

- 授業計画の作成、授業の円滑な運営、授業の振り返り



個別支援に向けたデータ利活用

- 個人への学習面のサポート、個人への生活面のサポート、児童生徒本人の振り返り



要配慮児童生徒への組織的な対応強化に向けたデータ利活用

- チーム学校として特に支援や配慮が必要な児童生徒への組織的な対応



学校運営・学級経営に向けたデータ利活用

- 教委による学校の支援、働き方改革、学校風土や学級満足度の改善



教育委員会による施策立案に向けたデータ利活用

- 統計的なデータ等エビデンスを踏まえた教育施策の立案・実行・改善



見える化

- 自治体・学校・学年・クラス・個人単位のデータが見える化し、課題を特定の上、個別の状況に応じた対応をする



共有

- 教職員間でデータを共有し、協働で課題解決に取り組む



検証

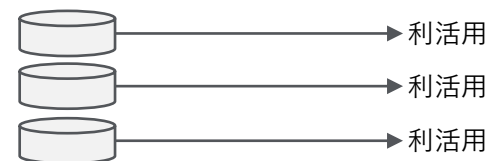
- 介入の効果を検証し、より良い改善に繋げる。また、介入を拡大していくための論拠とする



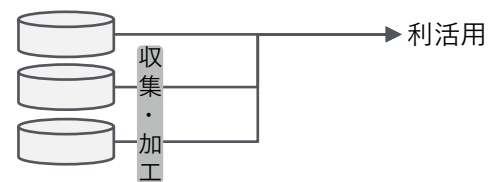
予測

- 顕在化していないリスクを予測し、早期対応に繋げる

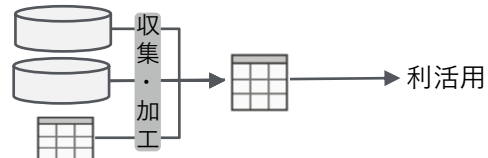
個別アプリ・システム



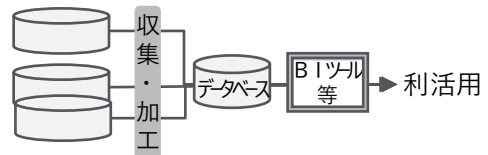
データ連携機能付システム



表計算



独自構築システム



6. まとめ

6-1.今年度の取組から得られた示唆

一連の今年度事業をふまえた示唆、今後の教育データ利活用の加速化にむけた取組方向性（案）を示します

実証研究 の総括

- 今年度の実証における成果
 - ・ 約半年間の限られた実証期間でも、ダッシュボードを活用している教職員・教委職員では、多くの場合気づき・アクションに繋がった
- 今年度の実証を通じた示唆
 - ・ 目的と併せて**主な利用者の明確な初期設定が必要**。それによって、必要なデータ・業務への組み込み方等が異なる。
 - ⇒とりあえずの可視化・共有では使われない。特に一般教員にとって価値のあるデータの見える化は難易度が高い
 - ⇒学校管理職や教育委員会にとっての利活用目的の検討、有用なデータの検討から着手したほうが効果が出やすい
 - ・ 活用定着のためには、既存の業務フローをふまえた、活用フローの確立、自治体内としての好事例創出・展開が不可欠
 - ⇒そのために、学校と密にコミュニケーションしていく、一緒にユースケースを創り出していく体制づくりが必要
 - ・ データの量・質をいかに担保するか、どのような期間・単位で、どのようなデータを組み合わせればインサイトにつながるのか深掘りが必要
 - ⇒仕組みとして優秀であっても、入ってくるデータの抜け漏れ、偏り、属性情報の不備等があると価値を感じにくい
 - ⇒更新頻度（日次/月次等）や表示対象期間（日別/週別等）、対象単位（個人単位、クラス単位等）
 - ⇒特にデータの組合せ方や粒度設定については、初めから完成形を目指すことは難しい。
 - 実際のユーザーの声を聞き、見せ方やデータ収集方法の改善、業務フローの見直しを継続的に実施していくことが必要

コミュニティや 利用状況調査 等をふまえた、 利活用の加速化 方向性

- ノウハウ不足、実現策のイメージが湧かないといった理由で着手できていない自治体も多い
 - ⇒普及のためには一層の事例（課題に対する目的設定、効果が示されているグッドプラクティス）の収集・発信が必要
 - ⇒目的に応じ、ある程度標準的なシステム構成・データセットのテンプレートも必要か？
- 費用対効果、定量的な効果が不明なために、予算獲得が難しい自治体も多い
 - ⇒具体的な効果事例や、予算獲得を実現できる方策について発信が必要
- 既に取り組んでいるものの、ネクストステップに迷っていたり、実証段階であり効果については未知数という状況の自治体も多い
 - ⇒効果検証のアプローチ、取組例を増やし、発信していく必要
 - （目的に照らして有効な施策となっているかの確認・改善策検討に各自治体担当者が取り組めるよう、アドバイザーによる支援や、伴走事業等を通じた普及活動に取り組む必要）

Appendix

実証研究における主な開発アプリ・ダッシュボード画面

長浜市_ダッシュボード・アプリ画面_教務手帳入力画面

ホーム

教務手帳

保護者連携

設定

お知らせ

確認小

学年 3年 クラス 3-1 ☐ 交通学校で表示 対象日 2024.03.17 再検索 検索条件設定

スタンプ選択 (出欠席等)

生徒番号	写真	氏名	性別	3-17 (水)	理由1	理由2	3-18 (木)	理由1	理由2	3-19 (金)
1		内藤 幸希	女							
2		内藤 聖梨沙	女							
3		内藤 悠希	男							
4		内藤 圭介	男							
5		内藤 健太郎	男							
6		内藤 悠希	男							
7		内藤 智希	女							
8		内藤 み希	女							
9		内藤 遥希	男							
10		内藤 海斗	男							

テーブル

閉じる

保存

長浜市_児童生徒向け 毎日のアンケート回答画面

[illegible]

長浜市_アテンション表示画面

■学年・クラス選択時画面



■個別カード選択時画面



R6年度（前回）版



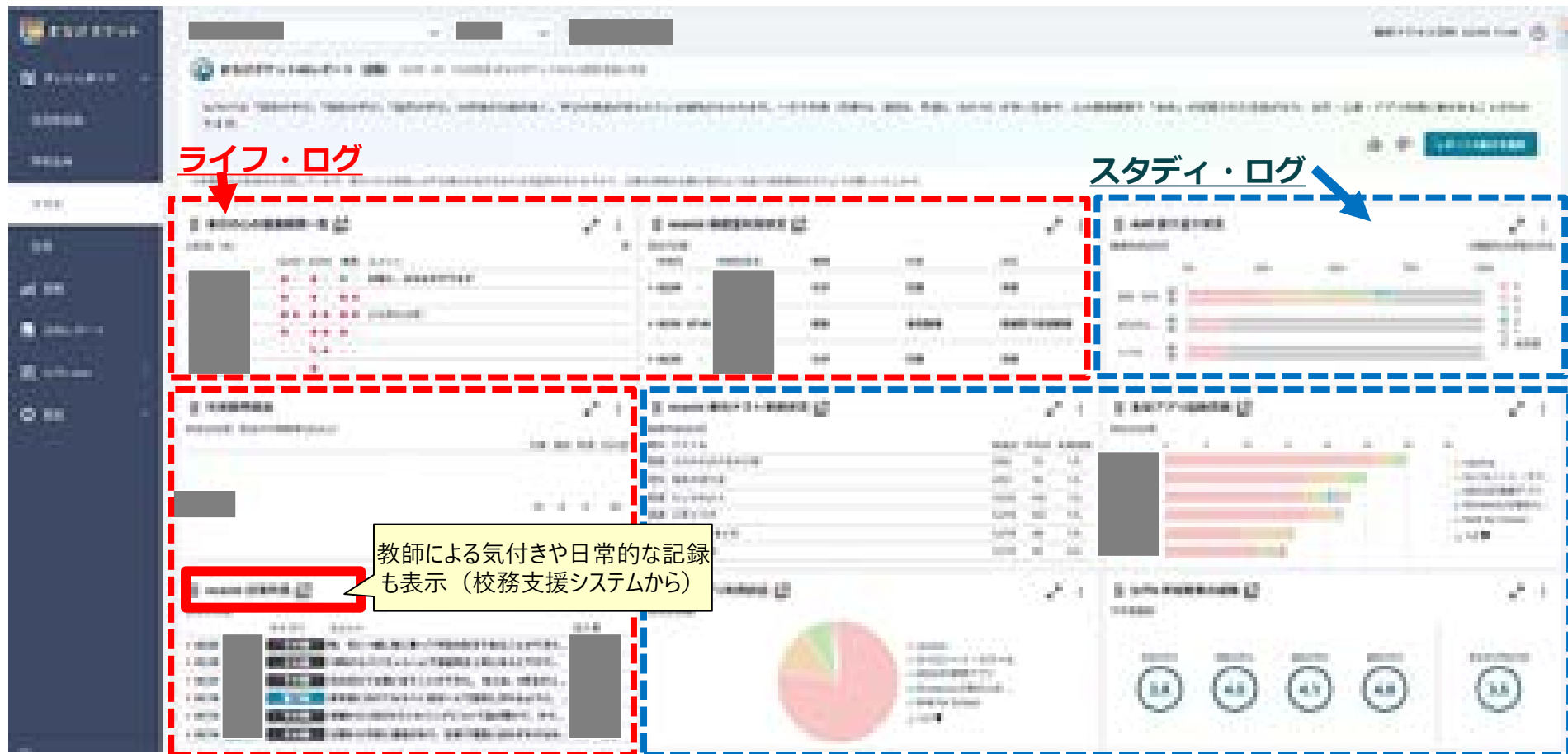
R7年度（今回）版



- グラフの色合いを統一
- 選択肢の順番を「否定的回答→肯定的回答」に統一
- 表示期間を「週／月」で選択可能

鹿児島市_校務支援システムからの連携項目の表示

■ 校務支援システム等からの連携項目と、学習状況に係る項目を併せて確認でき、教職員個人でもレイアウトのカスタマイズが可能



鹿児島市_AAR授業振り返り入力画面（児童生徒時間割）、教職員向けカード

■ 児童生徒向け時間割（AAR授業振り返り入力）画面



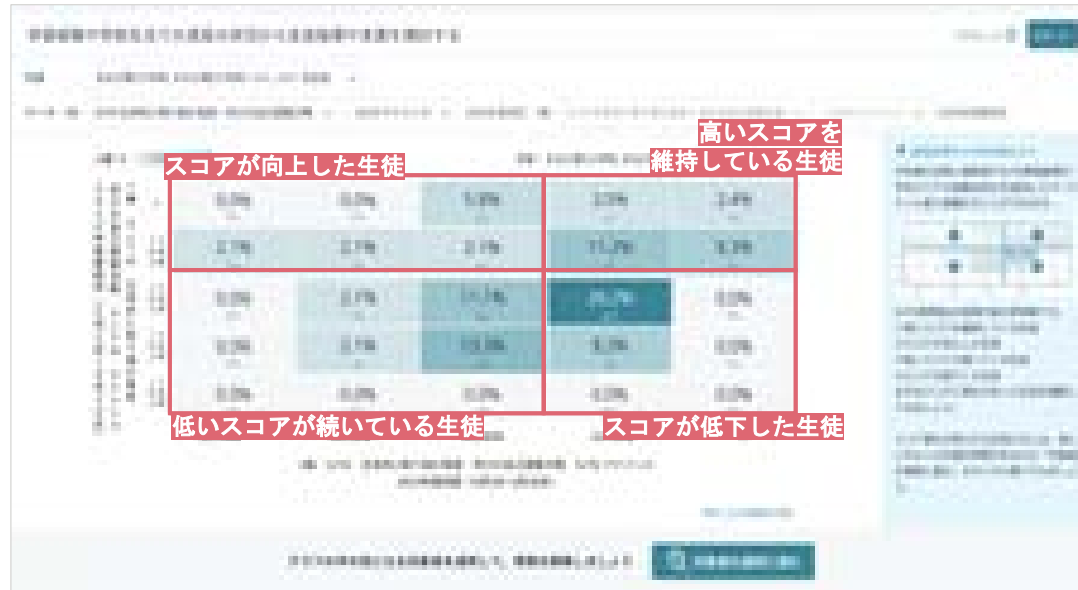
■ 教職員向けカード



鹿児島市_探索画面（ScTN質問紙結果分析・特徴分析・相関マップ）

■ 探索画面（サンプル画面は、ScTN質問紙結果を表示）

：2軸で児童生徒の傾向や分布を確認（サンプルはScTN質問紙のスコアの変化）

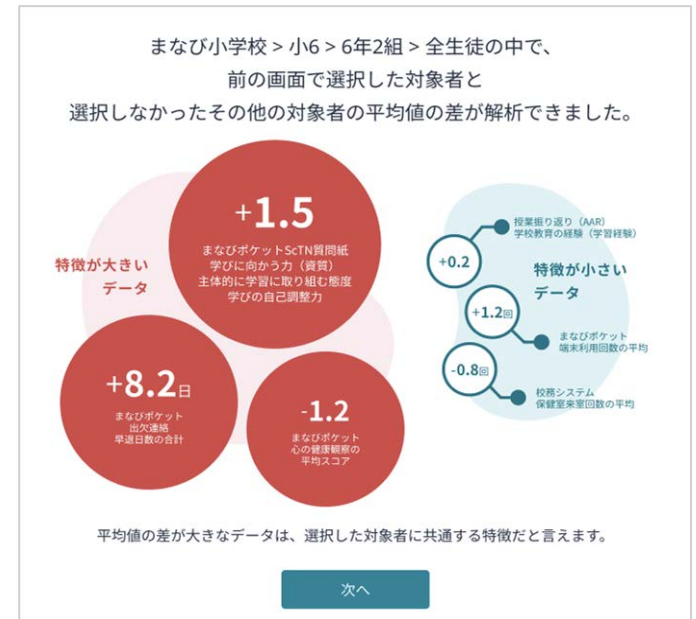


■ 相関マップ：複数データの中で、相関の高い組み合わせを可視化



■ 特徴分析画面

：選択した児童生徒（群）の特徴を、平均値との差分等から把握



気になる組み合わせ
は分布図で確認

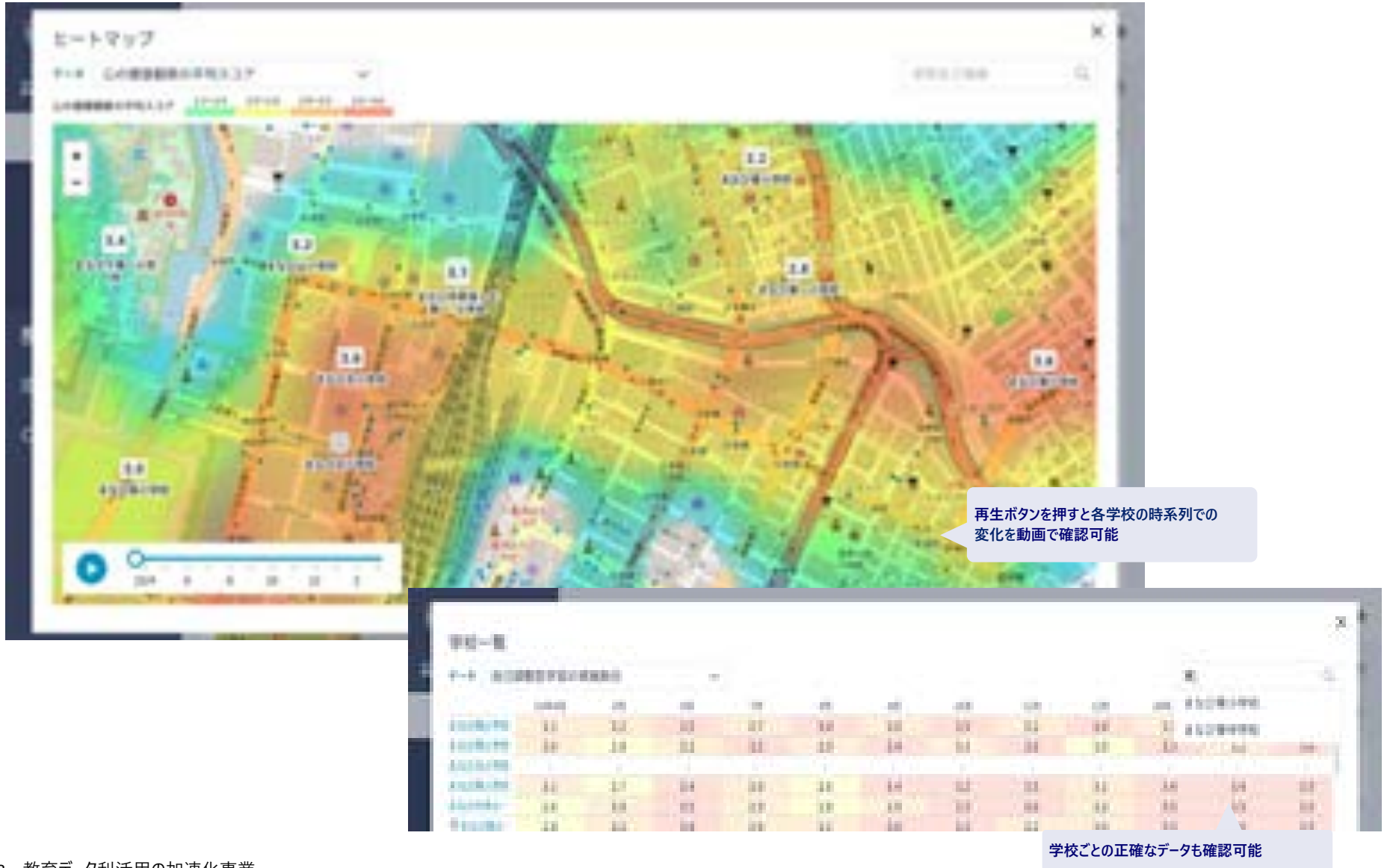


鹿児島市_AIレポート

■ AIレポート：分析元データを選択の上、目的に応じたレポートを出力可能

Appendix_鹿児島市_教育委員会での活用画面（ヒートマップ）

■ ヒートマップ：地域全体の状況を可視化（サンプル画面は、心の健康観察の平均スコアのヒートマップ）



山形県_入力アプリ・個人用ダッシュボード画面

■個人用勤務時間入力アプリ

The diagram illustrates the workflow for the personal work time input app:

- Step 1:** The user logs in and is presented with a calendar view. A red box highlights the "出勤" (Attendance) button. A callout box states: 「出勤」「退勤」をクリックすることで打刻 (Clicking "Attendance" or "Dismissal" will clock in/out).
- Step 2:** The user selects a date from the calendar. A red box highlights the date selection area. A callout box states: 修正対象の日程を選択 (Select the date to be corrected).
- Step 3:** The user enters the specific work time details for the selected date. The form includes fields for: 出勤時間 (Attendance Time), 退勤時間 (Dismissal Time), 所定勤務 開始時間 (Scheduled Work Start Time), 終了時間 (End Time), and 勤務時間内の休憩時間 (Break Time within Work Time). A red box highlights the "保存" (Save) button.

■個人用ダッシュボード画面（管理職も管理下教員別の同画面を確認可能）



山形県_管理職用 学校全体の勤務状況把握画面

■管理職用_学校全体 勤務状況把握画面



山形県_管理職用 データ比較画面

■管理職用_データ比較画面

